アイヌ語法概説序

アイヌ語に關心を持つ人があつて、往々、恰好なその手引書をと求められるのに、丁度手頃な、すぐ間に合ふアイヌ文法の一册も出來てゐないといふことは、何といふ腑甲斐ないことであつたらう。

知里眞志保君は、アイヌ神謠集の著者知里幸惠女史の令弟で、自ら遜つて、頭は迚も姉にはかなひませんと云ふけれど、姉さんは生前に、弟の頭こそ、何かきつとお役にも立つ頭かと思ひますと推奬して居られたものだつた。果せるかな、室蘭中學から一擧一高へ入つて、三年間、英語や獨逸語では、さすが一高の秀才をも後へに瞠若たらしめて押通した。それなのに却つてアイヌ語の方は、實は家庭で話されないものだつたから、殆んど一語も知らなかつた。偶に私に向つて、『アイヌ語つてどういふ言葉ですか。一體單數·複數などあるんですか』など反問して來ることがあり、私からそれを説明すると、默つて聞いてゐて、『さういふもんですか、アイヌ語といふものは、アハハハ』。逆なものだから自分で自分の言葉に失笑してゐたものだつた。

それが、どうであらう。暑中休暇で歸省する毎に、部落の人

人の間へ割り込んで、大部分をその中に逡るやうになり、一高を出る頃までには、驚くべき上達をし、更に大學へ進んでからは、ユーカラでも何でも解らないものが無い程勘能になり、殊にアイヌ文法には深い興味をもつて、私自身の組み立てたアイヌ文法を刻銘に吟味し、大體その組織とその觀方で、私に代つてアイヌ語法の理想的な教科書を書き下ろしてくれた。

私は詳細に閲讀したが、一字一句も改竄の必要を認めなかつたし、往々私の小過を是正してくれられた處もあつて、私の名で出しては濟まぬと思ふ程だつたのに、君はまた謙遜して、私の體系で說いてゐるのであつて、何等新味のあるものではないから、自分の著とは云ひ難いと云ふ。そこで二人で責任を負ふことにして二人の合著といふことにした。一字一句、知里君の書き起こしであつて、その爲めには大へんな辛勞と物質的な負擔さへ自ら負うて出來上つたものである。

凡そこの後、どういふアイヌ語の文法書が、若し現はれることがあらうとも、本書は永久に特筆さるべき重要性をもつものであることだけは信じて疑はない。本書が出來て、これで私も大方の讀者に一部の責任を果し得てホッとする。卽ち欣然記念すべき本書の始めにその次第を記して責任を明かにすと爾云。

昭和十一年六月十七日

病床から起きて　金田一京助識

目　　次

第I章 音韻論

I. 母音

1. 母音は a, i, u, e, o の五つで、その音價は大體日本語のに近いが、[1] アクセントある頭音（*initial*）に立つ時は所謂聲門閉止（*glottal stop*）を伴ひ、且つ原則として短音である。[2]

2. 重母音には ai, ui, oi, au, iu, eu, ou, ei, ae 等があり[3] 悉く下降式（*descending*）である。

II. 子音

3. 破裂音：k, t, p, g, d, b。無聲音 k, t, p とそれに對應する有聲音 g, d, b とはそれぞれ同一の音韻（*phonème*）に屬し、兩者を置換へても語義に影響は無い。tepa＝deba（褌）;

---

1) アイヌ語のウは（本書では便宜上 u で表はして置いたけれども）日本語のに似て脣のまるめが少い。但し日本語のに比べて幾分開いた音であるために、屢ゝ o に聽誤られる。アイヌ(人)がアイノに、カムイ(神)がカモイに、イナウ(木幣)がイナオに書かれる所以である。

2) 開音節の單綴語を一つだけ取上げて發音する時は幾分長めに聞える。ka·(絲); mi·(着る); nu·(聽く); ya·(網)等。併し乍ら一語を取立てゝ發音する時は區別意識が發音運動を特に丁寧に行はせるから自然長めに聞えるのであつて、それを意識的に短く發音したからとて些かの不都合も起らない。のみならず、他語と結び付いた際は必ず短く發音しなければならない。ka-eka (絲を縒る); a-mi-p (着物); nu-re (聞かす); ya-oshke-p (蜘蛛)等。アイヌ語には言葉の區別の手段となり得るやうな獨立音としての長音は存在しない。

3) 九種の重母音中 ou, ei, ae の用例が極めて少い。ou は kokou (婿) の一語だけ。ei は短母音 e を强調した時に成立する。pene (溶ける) > peine。ae は語頭にのみ成立する。第一人稱接頭辭 a- と指相の接辭 e- との結合を急言すれば大抵これになる。aeumashnu (我それをしまひこむ)。

ipokash＝ibogash（醜い）; kanto＝gando（天)。併し乍ら純正な發音では總べての破裂音が無聲なることを原則とする。[1] 尚末音（*final*）の k, t, p は悉く入聲（*implosive*）である。

4. 摩擦音： h, F, x, ç, s, sh, y, w。 h は i と結合する時は口蓋化（*palatalize*）して [ç] に、 u と結合する時は脣音化（*labialize*）して [F] に近づくけれども音韻としては同じものである。 [x]——但し i に續く時は [ç]——は樺太にのみ存在する。[2] 尚 s と sh も亦同じ音韻で後者は前者の少しく口蓋化した程度のものに過ぎない。

5. 鼻音：m, n。 n は i の前では幾分口蓋化する。また k の前では [ŋ] になる。併し乍らいづれも獨立の音韻として意識の中に實在するのではないから語義には無關係である。

6. 顫音：r。 これは稍々特殊で、（イ）舌尖は一度だけ齒槽に觸れ、（ロ）l よりは r に近く、（ハ）頭音に立てば「t, d の間の音」と r との中間音に聞え、（ニ）n の後へ續けば d に近づき、（ホ）k, p の後へ來れば無聲の r となり、（ヘ）t の後では無聲化すると同時に少しく摩擦を帶び、（ト）sh の後では全

1） 女よりは男に、子供よりは大人に、丁寧な發音よりはぞんざいな發音に、多く濁音が現はれる。醉つた人の發音では殆ど常に濁音である。之に反して婦女の丁寧な發音では必ず清音である。强ひて濁音の場合を求めるなら k, t, p が鼻音に續く場合で、これは有聲音 m, n がそれに續く無聲音 k, t, p を有聲化する順行同化（*progressive assimilation*）に他ならない。 tampe（これ）> tambe ; ante（置く）> ande ; ranke（取下す）> range 等。

2） 北海道方言の末音を構成する入聲の k, t, p 及び sh, r が樺太方言では悉くこれになる。tek（手）> tex ; itak（云ふ）> itax ; mat（女）> max ; at（楡）> ax ; nup（野）> nux ; rup（海氷）> rux ; upash（雪）> upax ; repunkur（外國人）> repunkux ; shik（目）> shiç > shish ; nit（串）> niç > nish ; rit（筋）> riç > rish ; chip（舟）> chiç > chish 等。但し母音が後續する時は原音が復活して北海道方言と同形になる。 tex（手）> te*k*umpe（手甲）; max（女）> ma*t*ax（妹）; chiç（舟）> chi*p*o（舟を漕ぐ）; rux（海氷）> ru*p*ush（氷る）; repunkux（外國人）> repunku*r*-atui（外洋）等。

く無聲摩擦の r となり、(チ) 末音に立てば五つの母音によつて五様にひゞく (p. 4)。併し乍ら、音韻としては同じものである。

7. 破擦音 (*affricata*) : ch, ts, dz, j(dʒ)。ルースな發音では ch が ts, dz, j 等にひゞく。併し乍らノーマルな發音では常に ch である。chacha (老翁)=tsatsa=dzadza=jaja。

III. 音　　節

8. アイヌ語には閉音節がふんだんにある。その末音を構成するものは入聲の k, t, p 及び m, n, sh, r の七つである。これらは母音で始まる音節が後續すればフランス語流に連音 (*liaison*) して開音節にひゞく。shik͡-o (生れる); mat͡-ak (妹); chip͡-o (舟を漕ぐ); hum͡-ash (音がする); an͡-an (我在り); ash͡-an (我立てり); par͡-o (生れる)等。尙アイヌ語の音節が頭音或は末音として許容する子音の數は唯一つに限られ、ch の他に拗音はなく、且つ濁音は無視し得るから、音節構造は比較的單純である:

	a	i	u	e	o
k(g)	ka	ki	ku	ke	ko
s(sh)	sa	shi	su	se	so
t(d)	ta		tu	te	to
ch(ts, dz, j)	cha	chi	chu	che	cho
n	na	ni	nu	ne	no
p(b)	pa	pi	pu	pe	po
m	ma	mi	mu	me	mo
w	wa			we	wo

y	ya		yu	ye	yo
r	ra	ri	ru	re	ro
h	ha	hi	hu	he	ho

(注意 i) 單母音と子音とによつて構成される音節數は上揭 56 と、それへ末音 -k, -t, -p, -m, -n, -sh, -r の 7 が添つて出來る 392 を加へた 56+56×7=448 であるが、[ŋ] が語中の音節末で n が k に先行する場合に起り得るから、それも勘定に入れると 448+56=504 になる。重母音と子音によつて構成される音節數は ai, oi, ui, ei, au, ou, iu, eu の 8 に、更に k-, s-, t-, ch-, n-, p-, m-, w-, y-, r-, h- の 11 が添つて出來る 88 を加へた 8+8×11=96 であるが、eu, iu, ou, ei だけの語は實際に存在せず、また tiu, wiu, yiu, wui も實在しないし、ou は kokou (婿) の一語に現はれるのみであり、ae の成立するのは語頭に限られるから、實際は 96−18+1=79 である。從つてアイヌ語の基本的な音節數の限度は 504+79=583 である。

(注意 ii) アイヌ語の r は l の如き續音 (*continuant*) でなく、舌尖が唯一度齒槽に觸れるだけで直ぐ離れて止む音であるから、聲が幾分尙續いてゐると、r に先行する母音の餘韻が耳に印象する。それ故、末音の r は五つの母音によつて五樣にひゞく。例へば kar は kar^{a} に、kir は kir^{i} に、kur は kur^{u} に、ker は ker^{e} に、kor は kor^{o} に聞える。これ末音としての r が長く一般的認識の外に置き去られてゐた所以である。從來の文獻に -ra, -ri, -ru, -re, -ro と表記されてゐるものゝ中には、實際には無い母音が上記の理由によつて有るかの如く誤認された場合が、相當に多かつたのである。

IV. アクセント

9. アクセントは高低アクセント (*pitch-accent*) でその山の位置は大體

(1) 語の主要部卽ち語根又は語幹にある：

nú-re（開かす），yá-un（陸の），án-an（我在り），ku-án（同口語）

（2） 最初の閉音節にある：
wákka（水），ápto（雨），hórkeu（狼），áshke（手）

（3） 最初の重母音又は重母音を含む音節にある：
áinu（人），táiki（蚤），páikar（春），úitek（召使ふ）

（4） 前から二番目の音節へ行く：
menóko（女），nupúri（山），netópake（體），supúya（煙）

（5） 合成語に在つては規定詞へ行く。但し規定詞多音節の時は上記諸則による：
rí-nupuri（高山），kú-sapa（弓の上端），kamúi-moshir（神界），áinu-moshir（人間界）。

（**注意 i**） 初めは單なる接尾辭又は語尾に過ぎなかつたものも、全體が熟成して一單位と感ぜられるに到ると、アクセントを要求することがある。例へば kaye「折る」(< kai「折れる」+e), tuye「斷つ」(< tui「斷れる」+e) 等は上則 (1) によつて當然 káye, túye とあるべき筈なのに、實際は (4) の支配を受けて kayé, tuyé である。合成語でも同様であつて、それが熟し切つてしまへば (4) に支配される。例へば hash-inau (條幣)は (5) によつて當然 hásh-inau とあるべき筈なのに、實際は hashínau である。yak a-ye (*Ger. man sagt, da*ß) も口語では yakáye 又は yakái である。閉音節の單綴語が具體化した場合も (4) に支配される。shik (目) > shikíhi ; mat (妻) > machíhi ; kap (皮) > kapúhu。[但し開音節の單綴語が具體化した場合は依然アクセントは (1) の支配下に在つて移動しない。pa (年) > páha; ko (粉) >kóho; re (名) > réhe 等。] 以上によつて最後に支配する最も有力なる法則は (4) なることを知る。

（**注意 ii**） 以上の法則に合はないものがあつたらそれには何か仔細がある。i) 語原に溯れば合法的なもの：cháhi (砦) < chi-áshi (我々が建てたもの)；wákataru (水汲路) < wakka (水) -ta (汲む) -ru (路)。ii)

日本語から入つたもの：túki（杯）; nómi（祈る）等。

（注意 iii） アクセントに依つて相互に獨立してゐる若干の單語。 hái（蕁麻）—haí（痛い！）; mónak（覺めてゐる）—monák（さらでだに）; nína（焚木こる）—niná（捏ねる）; nísap（突然の）—nisáp（脛）; útur（木尻座）—utúr（間）; yáiraike（自殺する）—yaíraike（感謝する）等。

V. 音 韻 變 化

10. 母音の脱落。

（a） 同母音が重出する時：

kera-an > keran おいしい（*nice to eat*）

haina-are > hainare 延繩釣をする（haina はハヘナハの東北訛）

shiso-otta > shisotta 右座に

harkiso-otta > harkisotta 左座に

（b） 異母音が重出する時——前者が落ちる：

in*e*-an-kur > inankur どの人

en*e*-an-kusu > enankusu なるほど！

noy*e*-a noy*e*-a > noyanoya 幾度も擦る

kan*e*-an > kanan であつた（*was in the state of*）

kashik*e*-un > kashikun あまつさへ

epos*o*-un > eposun 道理で

sh*i*-on-tak > sontak 嬰兒

ch*i*-ashi > chashi 砦

ch*i*-e-p > chep 魚

日高（ヒダカ）國沙流（サル）部の口語で第一人稱單數主格の接頭辭 ku- が k になるのも同様の場合である：

k*u*-aki > kaki 私の弟

k*u*-ani > kani 私

k*u*-o > ko 私乘る

k*u*-eyomne > keyomne 私懲りる

(c) 重母音の場合——末音が落ち易い：

uwekata*i*rotke > uwekatarotke 睦合ふ

ya*i*ramkomo > yaramkomo せつなく思ふ

ya*i*shitoma > yashtoma 恥ぢる

shikasu*i*re > shikasure 手傳つて貰ふ

ra*i*-chishkar > rachishkar 弔哭する

erampe*u*tek > erampetek 知らない

hehe*u*pa > hehepa 覗く

kashi-opi*u*ki > kashi-opiki 助ける

pashro*i*ta > pashrota 叱る

上のは雅語と口語の差であるが、これがまた方言の差をつくる：——

(膽振(イブリ)方言)		(日高(ヒダカ)方言)
aoka*i*	我等	aoka
echioka*i*	汝等	echioka
oka*i*	彼等	oka
shinna*i*	別の	shinna
kakencha*i*	衣桁	kakencha
soya*i*	蜂	soya
u*i*tek	召使ふ	utek
u*i*na	灰	una

(d) 無聲化した母音の脫落：

mat-hekachi > mate̥kachi > matkachi 女童

hekachi-utar > hekatu̥tar > hekattar 子ども

11. 子音の脱落。

(e) h 音の脱落：

kom-*h*am > komam 枯葉

tok-*h*om > tokom 瘤

hoku-kan-*h*au-ne > hokukanaune 男聲にて

mat-kan-*h*au-ne > matkanaune 女聲にて

この傾向は北部方言に於て特に著しい：

*h*eper > eper 熊の仔

*h*esuipa > esuipa 居眠する

(f) y 音の脱落——拗音の成立を嫌ふ結果とも見られる：

an-*y*akne > anakne は（助詞）

ne-*y*akka > nakka も（助詞）

nep ta an *y*a > nep ta ana? 何であるか？

ne nankor *y*a > ne nankora? だらうか？

語幹が r で終る動詞に使役相語尾 -yar が結び付く際も同様の理由で y が落ちる：

kor-*y*ar > korar 持たす

nukar-*y*ar > nukarar 見さす

(g) 長子音の短音化：

oshi*kk*ote > oshikote 惚れる

mu*nn*uipa > munuipa 塵を掃く

iyoku*nn*ure > iyokunure 驚き呆れる

yaiwe*nn*ukar > yaiwenukar せつぱ詰る

ipe-ka*nn*a > ipe-kana 食物をねだる

ka*nn*a-sui > kanasui 又候 (*again*)

12. 子音の挿入——母音の重出を嫌ふ結果とも見られる。語構成の關係上新に母音が重出すると、前の母音を落してしま

ふか、又はワタリの音 (*glide-sound*) に明確な存在を與へて重出母音の成立を避けようとする。それが外見上子音挿入の現象となつて現はれるのである。

(a) w 音の挿入：

u-at-te > u*w*atte 澤山ゐる

u-e-peker > u*w*epeker 昔噺

u-osurpa > u*w*osurpa 夫婦別れ

u-ok-ok > u*w*okok 縺れる、吃る

（注意） w は u のハナレ (*off-glide*) である。

(b) y 音の挿入：

eihok > eiok > ei*y*ok 賣る(hok, *Ger. kaufen*, eihok, *Ger. verkaufen*)

i-o-ikir > i*y*oikir 寶列

i-uta > i*y*uta 搗きものする

i-utari > i*y*utari 彼の親類

（注意） y は i のハナレである。

(c) h 音の挿入――開音節の語を具體形にするには末音節を强く發音する。その際語尾の母音は當然長くならうとする。それを更に强く發音する時 h が現はれる：

ona (父) > ona· > onaa > ona*h*a

unu (母) > unu· > unuu > unu*h*u

閉音節の語を具體形にしたものを更に强調する時も同樣である：

shik (目) > shiki > shiki· > shikii > shiki*h*i

tek (手) > teke > teke· > tekee > teke*h*e

(d) n 音の挿入：

(tá-okai) > ta*n*ókai これらの

(tó-okai) > to*n*ókai あれらの

(tá-un) > tá*n*un そちらへ

(tó-un) > tó*n*un あちらへ

(c) m 音の挿入：

shikari-pa > shikari*m*pa ぐるぐる廻る

tépatepa > te*m*pate*m*pa まさぐる

i-oma > i*m*oma 寳列 (＝iyoikir)

u-oma-re > u*m*omare 拾ひ集める

(注意) 後の二つは最初から m が入るのではなくて

i-oma > i-*w*-oma

u-omare > u-*w*-omare

の如く、前者に於てはカカリ (*on-glide*) の、また後者に於てはハナレ (*off-glide*) の渉音として、w が先づ入り、次いでそれが後出の m に對する先取的同化 (*vorgreifende Assimilation*) によつて

i-*w*-oma > i-*m*-oma

u-*w*-omare > u-*m*-omare

となるのである。

13. 音韻同化 (*assimilation*)。

(a) r の同化

i) n の前では n になる：

kotan-ko*r*-nishpa > kotan-ko*n*-nishpa 酋長

peke*r*-nupe > peke*n*-nupe 光る涙 (大粒の涙)

reta*r*-nan > reta*n*-nan 白い顔

e-ro*r*-ne > ero*n*ne 上座の方へ

ii) t の前では t になる：

a-ko*r* totto > ako*t* totto 我が母

peke*r*-chikap > peke*t*chikap 白鳥

reta*r*-chir > reta*t*chir 白鳥

ro*r*-ta > ro*t*ta 上座に

(b) 破裂音の同化——北見(キタミ)·釧路(クシロ)·十勝(トカチ)·石狩(イシカリ)の北部方言に著しい現象である：

a*k*-pe > a*p*pe おとし (*a trap*)

ma*t*-kosanu > ma*k*kosanu ぱつと起つ

sa*p*-te > sa*t*te 持出す

膽振·日高の南部方言では次の一語：

e*k*-te > e*t*te よこす

(c) 鼻音に續く w の m 音化——日高地方に限るやうである：

wen *w*a kusu > wen *m*a kusu 惡かつたから

isam *w*a kusu > isam *m*a kusu 無かつたから

an *w*a hetap > an *m*a hetap あつてのことか？

(d) n—→m

i) p の前で：

a*n*-pe > a*m*pe あること、本當のこと (*a fact*)

po*n*-pe > po*m*pe 小さいもの、赤ん坊

ii) m の前で：

ta*n*-moshir > ta*m*-moshir 此の世

po*n*-menoko > po*m*-menoko 少女

(e) t は i の前では ch になる (§ 19)：

ma*t*-i > ma*ch*i 彼の妻

ku*t*-i > ku*ch*i 彼の帶

ri*t*-i > ri*ch*i 彼の筋

(f) s は t の後では ch になる：

pet-*s*am > pet*ch*am 川端

pat-*s*e > pat*ch*e ぱつと散る

kitkit-*s*e > kitkit*ch*e くすくす笑ふ

(g) 母音の無聲化——無聲子音に挿まれる母音は無聲化し易い。この傾向は北部方言に於て特に顯著である：

chise > chi̮se > chse > che 家

shitaiki > shi̮taiki > shtaiki 撃つ

pon seta > poi se̮ta > poi sta > posta 小犬

14. 異化 (*dissimilation*)。

(a) r⟶n

i) r の前で：

ri*r*-rui > ri*n*-rui 波がひどい（波高し）

ru*r*-rui > ru*n*-rui 潮がひどい（鹽辛し）

a*r*-ramasu > a*n*ramasu 全く美しい

a*r*-rametok > a*n*rametok 眞の勇氣

ko*r* rametok > ko*n* rametok 彼の勇氣

ku-ko*r* ruwe-ne > kuko*n* ruwe-ne. 私持つてゐます。

ku-ka*r* rusui > kuka*n* rusui. 私作りたく思ひます。

ii) t の前で——樺太及び北部方言に：

ko*r*-te > ko*n*te 持たす

nuka*r*-te > nuka*n*te 見さす

a*r*-tek > a*n*tek 片手

南部方言では次の一語：

shi-a*r*-tokesh > shia*n*tokesh 全くの日暮れ

(b) 末音 n の母音化

i) s 及び y の前では i になる：

po*n* suyop > po*i* suyop 小筥

po*n* shintoko > po*i* shintoko 小行器

we*n* shisam > we*i* shisam 貧しい和人

we*n*-yuk > we*i*-yuk 羆

ho*n*-yaku > ho*i*yaku 流產する

Po*n*-yaunpe > Po*i*yaunpe 小內地人 (詞曲のヒーローの綽名)

a*n*-ye > a*i*ye (樺太) 我云ふ

ii) w の前では u になる——主として樺太方言に:

a*n*-wante > a*u*wante 我知る

a*n*-wente > a*u*wente 我壞す

a*n*-wen-tureshi > a*u*-wen-tureshi 我惡妹

15. その他の音變化。

(a) 母音の前進的同化:

ér*u*m > ér*e*m 鼠

ónt*a*ro > ónt*o*ro 大樽

oh*e*tu > oh*o*tu 水をあける

oh*e*we > oh*o*we 傾ける

kosont*e* > kosont*o* 小袖

men*o*ko > men*e*ko (樺太) 女

次の諸語に於ける e, o の對立は上の諸例に類推して生じたもの:

*e*top > *o*top 髪

*e*h*e*we > *o*h*o*we 傾ける

h*e*topo > h*o*topo 折返して

n*e*to > n*o*to 凪

(b) 音韻轉倒 (*metathesis*):

ash*k*e*p*et > ash*p*e*k*et 指

chu*pk*esh > chu*kp*esh 下腹

ichan*iu* > ichan*ui* 鱒

pu*y*a*r* > pu*r*a*i* 窓

*y*o*r*pui > *r*o*i*pui 肛門

r*u*ika > ri*u*ka 橋

(c) m←→n :

*m*iyanke > *n*iyanke 土産

(*m*imigane) > (*m*imigani) > *n*ingari 耳輪

*n*eko > *m*eko 猫

*n*itpo > *m*itpo 孫

*n*ima > *m*ima 木鉢

*n*imu > *m*imu 木登する

*n*ishmu > *m*ishmu 寂しい

(d) n←→r :

a*n*i > a*r*i で以て (*with*)

me*n*oko > me*r*oko 女

mimiga*n*e > ninga*r*i 耳輪

shi*r*oma > shi*n*uma 彼

eshi*r*oma > eshi*n*uma 汝

ashi*r*oma > ashi*n*uma 我

(e) p—→ch (北部方言に於て):

*p*ar > *ch*ar 口

*p*apush > *ch*apush 脣

ko*p*an > ko*ch*an 拒否する

u*p*ashkuma > u*ch*ashkuma 昔語り

南部方言では次の一語:

(san-*p*a) > san-*ch*a 脣

(f) s—→h :

*s*enne > *h*enne ない (*not*)

*s*emash > *h*emash ざつとした (*insignificant*)

*s*emkorachi > *h*emkorachi の如く (*like*)

(g) m—→p :

*m*akiri > *p*akiri 小刀

*m*ana > *p*ana 塵

*m*asa > *p*asa 開ける

(h) e—→i :

kán*e* > kan*i* 金

k*e*putur > k*i*putur 額

mimigan*e* > ningar*i* 耳輪

noŝhk*e* > noshk*i* 中央

(i) o—→u :

im*o*ma > in*u*ma 寶列

n*o*yan*o*ya > n*u*yan*u*ya 幾度も探る

*o*takararip > *u*takararip ヒトデ (*a starfish*)

shir*o*ma > shin*u*ma 彼

(j) u—→i :

h*u*nak > h*i*nak 何處

mausoro > maus*u*ro > maush*i*ro 口笛

sh*u*tu > sh*i*tu 棍棒

sh*u*kup > sh*i*kup 成長する

第II章 名　詞

I. 抽象形と具體形

16. 名詞は、それが純粋に概念のみを表はす場合と、概念を人稱關係に於て云ひ表はす場合とで、形を異にする。例へば「目」といふ概念は shik なる形で表はされるが、それが「我の目」「汝の目」「彼の目」といふやうに人稱關係をも併せ示す場合には、shiki 又は shikihi となつて次の如く人稱接辭*をとる。

i) 雅語に於て:

	(*sing.*)		(*pl.*)	
I.	a-shiki(hi)	我の目	a-shiki(hi)	我等の目
II.	e-shiki(hi)	汝の目	echi-shiki(hi)	汝等の目
III.	shiki(hi)	彼の目	shiki(hi)	彼等の目

ii) 口語に於て:

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ku-shiki(hi)	chi-shiki(hi) (*excl.*) a-shiki(hi) (*incl.*)
II.	e-shiki(hi) a-shiki(hi) (*honor.*)	echi-shiki(hi) a-shiki(hi) (*honor.*)
III.	shiki(hi)	shiki(hi)

さて shik の如く「純粋に概念のみを表はす場合の形」を抽象形 (*abstract form*) と呼び、それに對して shiki 又は shikihi の

* 人稱接辭に就いては代名詞及び動詞の章參照。

如く「概念を人稱關係に於て云ひ表はす場合の形」を具體形(*concrete form*)と呼ぶ。

(注意 i) shiki と shikihi とは發音上の少差である。アイヌ語の母音には本來長音がないので、それを強調すれば長くなる代りに重なる。takne「短い」> ta*a*kne ; tanne「長い」> ta*a*nne ; ponno「少し」> po*o*nno ; poronno「どつさり」> poro*o*nno 等。同じ要領で shiki が shiki*i* となり更に氣音の h が現はれて shiki*hi* となるのである。

(注意 ii) 第 III 人稱には「彼」(*he*)のみでなく「彼女」(*she*)も「それ」(*it*)もある。從つて shiki(hi) は「彼の目」であると同時に「彼女の目」でもあり「それの目(例へば猫の目だとか網の目だとか)」でもある。その譯語はそれが具體的に使用される環境によつて決定されて行くべきである。

II. 具體形の作り方

17. 母音に終る語はその母音を特に叮嚀に(結果としては少し長めに)發音すればよい：

(抽象形)		(具體形)
apa	「戶」	apa˙, apaha
unu	「母」	unu˙, unuhu
unarpe	「伯叔母」	unarpe˙, unarpehe
etu	「鼻」	etu˙, etuhu
ona	「父」	ona˙, onaha
ka	「絲」	ka˙, káha
ko	「粉」	ko˙, kóho
kuwa	「杖」	kuwa˙, kuwaha
kéra	「味」	kéra˙, keraha
sa	「姉」	sa˙, sáha

sapa「頭」　sapa·, sapaha
supuya「煙」　supuya·, supuyaha
tepa「褌」　tepa·, tepaha
to「乳房」　to·, toho
toma「苫」　toma·, tomaha
noka「像」　noka·, nokaha
pa「湯氣」　pa·, paha
pu「庫」　pu·, puhu
pe「水」　pe·, pehe
po「子」　po·, poho
ra「草の葉」　ra·, raha
re「名」　re·, rehe
hápo「母」　hapo·, hapoho
haru「肉」　haru·, haruhu
húra「匂ひ」　húra·, húraha
hoku「夫」　hoku·, hokuhu

18. 重母音に終る語は -e をとる（但し i+e > ye, u+e > we）:

ai「矢」　aye, ayehe
sai「群」　saye, sayehe
tai「林」　taye, tayehe
nai「澤」　naye, nayehe
mai「響」　maye, mayehe
hai「蕁麻」　haye, hayehe
atui「海」　atuye, atuyehe
kui「尿」　kuye, kuyehe
sui「穴」　suye, suyehe
tui「腹」　tuye, tuyehe

tokui	「親友」	tokuye, tokuyehe
nui	「焰」	nuye, nuyehe
pui	「孔」	puye, puyehe
mui	「束」	muye, muyehe
rui	「砥石」	ruye, ruyehe
soi	「戸外」	soye, soyehe
toi	「畑」	toye, toyehe
moi	「入江」	moye, moyehe
au	「木叉」	awe, awehe
inau	「木幣」	inawe, inawehe
kirau	「角」	kirawe, kirawehe
páhau	「噂」	páhawe, pahawehe
mau	「氣」	mawe, mawehe
hau	「聲」	hawe, hawehe
keu	「骸」	kewe, kewehe
ikkeu	「腰骨」	ikkewe, ikkewehe
shikkeu	「隅」	shikkewe, shikkewehe
kokou	「婿」	kokowe, kokowehe

19. 子音に終る語の多くは -i をとる:——

ak	「弟」	aki, akihi
ap	「釣針」	api, apihi
up	「魚の白子」	upi, upihi
utar	「親戚」	utari, utarihi
ur	「皮」	uri, urihi
op	「槍」	opi, opihi
otop	「髮」	otopi, otopihi
kur	「蔭」	kuri, kurihi
tur	「垢」	turi, turihi

chep「魚」　chepi, chepihi
non「唾」　noni, nonihi
nok「卵」　noki, nokihi
pok「下」　poki, pokihi
mur「糠」　muri, murihi
mon「手」　moni, monihi
yup「兄」　yupi, yupihi
hum「音」　humi, humihi
hon「腹」　honi, honihi

但し t+i > chi :——

mat「女」　machi, machihi
ramat「魂」　ramachi, ramachihi
shit「纖維」　shichi, shichihi
nit「串」　nichi, nichihi
pit「小石」　pichi, pichihi
rit「筋」　richi, richihi
ut「肋」　uchi, uchihi
kut「帶」　kuchi, kuchihi
set「巢」　sechi, sechihi

20. -i をも -u をもとり得るもの :——

am「爪」　ami(hi), amu(hu)
kam「肉」　kami(hi), kamu(hu)
yam「栗」　yami(hi), yamu(hu)
ham「木の葉」　hami(hi), hamu(hu)
ramram「鱗」　ramrami(hi), ramramu(hu)
mim「肉」　mimi(hi), mimu(hu)
nan「顏」　nani(hi), nanu(hu)
kotan「村」　kotani(hi), kotanu(hu)

por 「洞穴」 pori(hi), poru(hu)

rar 「眉」 rari(hi), raru(hu)

次の諸語は普通 -u をとるが、稀には -i をとることもある:——

at 「紐」 atu, atuhu

kap 「皮」 kapu, kapuhu

kat 「形」 katu, katuhu

tak 「塊」 taku, takuhu

ras 「木片」 rasu, rasuhu

ram 「心」 ramu, ramuhu

rap 「翼」 rapu, rapuhu

sep 「谷」 sepu, sepuhu

21. 最後の音節の母音を繰返すもの:——

sam 「側」 sama, samaha

asam 「底」 asama, asamaha

tumam 「胴體」 tumama, tumamaha

sermak 「蔭」 sermaka, sermakaha

kisar 「耳」 kisara, kisaraha

ikir 「列」 ikiri, ikirihi

chikir 「足」 chikiri, chikirihi

utur 「間」 uturu, uturuhu

tum 「中」 tumu, tumuhu

tek 「手」 teke, tekehe

kes 「端」 kese, kesehe

or 「內」 oro, oroho

etok 「前」 etoko, etokoho

kotor 「面(メン)」 kotoro, kotoroho

ipor 「顔色」 iporo, iporoho

tom 「中」 tomo, tomoho

(注意 i) 次のものは例外である:—

chi 「男根」 chiye, chiyehe

pi 「種子」 piye, piyehe

ru 「路・跡」 ruye(he), ruwe(he)

okkai 「男」 okkayo, okkayoho

par 「口」 paro, paroho

(注意 ii) 意味によつて具體形を異にするものがある:—

sar { 「尾」 > sara(ha)
「葦原」 > sari(hi)

not { 「口」 (*mouthful*) > nochi(hi)
「顎」 > notu(hu)

shut { 「祖母」 > shuchi(hi)
「根元」 > shutu(hu)

III. 抽象形及び具體形の用法

22. 概念のみの表示には抽象形を用ゐる:

shik ari a-ye-p ; *tek* ari a-ye-p
日 と いふもの 手 と いふもの

kamui ne an-pe ; *ainu* ne an-pe
神 として あるもの 人 として あるもの

(神なるもの、人なるもの)

hon ne kor-pe *yaro* shinne an.
腹 として 彼もつもの [illegible] の如く あり

(彼の腹たるや宛然ビール樽)

概念を人稱關係に於て表示する場合には具體形を用ゐる:

tekehe ari *shikihi* noyanoya.
彼の手 で 彼の目を 彼はこすつた

e-*shikihi* mana ush.
汝 の目に 塵が ついてゐる

(汝の目は曇つてゐる——節穴同然)

a-*honihi* arka. (*My stomach aches—I have a stomachache.*)
わ が腹 痛し

23. 合成語の中では——概念のみが表はれるのであるから——當然抽象形が用ゐられる：

shik-kap 「目ぶた」
shik-kes 「目尻」
shik-num 「目玉」
shik-nak 「盲目の」
shik-pui 「瞳」
shik-rap 「睫毛」
shik-tum 「目つき」
tek-un-kani 「腕輪」
tek-un-pe 「手甲」
tek-kotor 「掌」
tek-pisoi (*hypothenar eminence*)
tek-ru 「手相」
tek-uwekik 「拍手する」
tek-paruparu 「手招く」

24. 連語の中では具體形を用ゐる場合と抽象形を用ゐる場合とがある：

utat turano arki. = *utarihi* turano arki.
部下 と共に 彼等來た 彼等の部下 と共に 彼等來た

ainu *utur* wa soikosanu. = ainu *uturu* wa soikosanu.
人々 の間 から 彼飛び出した

Poropet *or*-wa shirawoi *or*-pakno = Poropet *oro*-wa
幌 別 から 白 老 まで

shirawoi *oro*-pakno

(注意) 具體形による表現は合理的ではあるが散文的だとされ、敍事詩などでは多く抽象形による表現を用ゐる。

25. 天然自然のもの——天 地 日月星晨風雨春夏秋冬等——は特に「誰の」といふことも出來ず、その必要もないので、普通は抽象形のまゝ用ゐられる：

kanto orowa erum nep ka sóhose.
天 から ねずみが 何 か 借りた

toitoi kata hachir.
地 上に 彼は墜ちた

mata an ko upash ash ; *paikar* an ko upash nin.
冬 になる と 雪が 降り 春 になる と 雪が 消える

yairaikep anakne *kamui* otta oman ko, *kamui*
自殺した者 は 神様 の許へ 行く と 神様が

panakte wa terkepi ne kar hine, hetopo *kan-*
罰 し て 蛙 に 化し そして 折返し こ

namoshir orun hoshippare.
の 世 へ 戻 す

但しこれらのものと雖も特別の場合は具體形をとり得る。例へば神が自領の天と他領のそれとを區別して云ふやうな場合は

a-kantoho「我が天」

e-kantoho「汝の天」

kantoho「彼の天」

等の如く具體形をとり、神それ自身も「我が憑神」「汝の憑神」「彼の憑神」などゝ云ふ時は

a-kamuye「我が憑神」

e-kamuye「汝の憑神」

kamuye「彼の憑神」

等の如く具體形をとる。

26. 呼び掛けの語は一般に抽象形のまゝ用ゐられる：

ekashi「祖父さん！」　　huchi「祖母さん！」

michi「父さん![1]」　　hapo「母さん!」

敍事詩などで、久しく別れてゐた兄弟が計らずもめぐり會つた時、屹度云ふセリフに次の如きものがある：

"akpo![2] sampe!"　　"yupo sampe!"
弟よ　ハートよ　　兄よ　ハートよ

但し敍事詞の「父よ!」「母よ!」は

a-ona「父さま!」　　a-unu「母さま!」

の如く具體形が用ゐられる。それに釣られてか日高地方では口語でも

ku-sapo「私の姉さん!」　k'aki「私の弟!」

等の具體形を用ゐた呼び掛けが聞かれる。

27. 抽象形を用ゐるのと、具體形を用ゐるのとで、文意の變る場合がある：

ainu itak「アイヌ語」(*the Ainu language*)

ainu itak*ihi*「アイヌの言つたこと」「アイヌの言葉」(*what an Ainu said*)

前者は寧ろ ainu-itak の如くツナギ (*hyphen*) を入れて書くべき合成語である。

Risa unarpe ek.「リサ伯母が來た」。(*Aunt Risa has come.*)

Risa unarpe*he* ek.「リサの伯母が來た」。(*Risa's aunt has come.*)

---

1) 口語の「父」は所によつてまちまちである。鵡川では iyapo, 厚眞では hapo, 白老・幌別・室蘭では michi, 有珠・虻田・豐浦では achipo。「母」は大抵の所で hapo であるが鵡川の奥では totto といふ。totto はもと「乳房」を意味する語で、それが「母」の意味に使はれるのは他の地方では雅語に限られてゐる。

2) -po はもと「子」の意に發した指小辭で「小さいもの」「可愛いもの」等を意味する。menoko-po「少女」; ku-sampe-po「私の可愛いひと」等。ak-po は敍事詩にのみ許される形で、幌別地方の口語で -po を親しいものに附ければ「死んだ」(*deceased*) の意になる。ku-aki-po「私の死んだ弟」; ku-kor oper-po「私の死んだ娘」等。

前者は同格、後者は所屬の關係である。

huchi utar「祖母たち」(*grandmothers*)

huchi utar*ihi*「祖母の親戚」(*grandmother's relations*)

IV. 具體形の崩壞

28. 旣に見て來たやうに具體形はその名詞がいづれかの人稱へ所屬してゐる關係を示す。この所屬の關係は所屬されるものが人格を有する時に限り* 領格代名詞を抽象形に配することによつても表現することが出來る：

A. (具體形による表現)	B. (領格代名詞による表現)
a-machi(hi)	akor mat「我が妻」
e-machi(hi)	ekor mat「汝の妻」
machi(hi)	kor mat「彼の妻」

29. 今 A, B 兩表現を比較して見るに、A に於ては一々の名詞に就いてその具體形を思ひ泛べ、それによつてその名詞を變化させて行かなければならない面倒があるのに對して、B に於ては領格代名詞を機械的に使用するだけであるから、遙かに少い勞力で濟む。そこで B の方がより多く歡迎され、漸次その領域を擴大して、竟には次の如き表現をも生むに到つた：

akor amachihi「我のわが妻」

ekor emachihi「汝のなが妻」

kor machihi「彼のその妻」

---

* このことから次の兩表現の區別も明瞭である。

kamui-ekashi kor kotan「神翁の領せし里」

kotan kor kamui「里を領する神」(梟)

前者は書換へれば kamui-ekashi kotan*ihi* で、kamui-ekashi は主格に立つてゐる。然るに後者に於ては kotan は非人格であるから主格に立つことが出來ず、從つて當然目的格である。

30. 然るにこの最後の例に於て混亂が始まつた。kor mat＝kor machihi なる等式に於て、たまたま mat＝machihi なる關係が成立するところから、逆に類推を他の人稱にも及ぼして akor machi, ekor machihi (いづれも非)[1] の如き表現が、邦人の間ではもとよりアイヌ自身の間にさへ用ゐられやうとするに到つた。斯くて今日のアイヌ語は具體形の用法に於て些か破綻を見せつゝあるが、古格を守る故老の言語に在つてはなほ絶對にそのことがない。

V. 名 詞 の 性

31. 名詞には文法的性 (*gender*) の現象はなく、あるのは唯自然の性 (*sex*) のみである：

ekashi「祖父」	huchi「祖母」
ona「父」	unu「母」
keusut「伯叔父」	unarpe「伯叔母」
yup「兄」	sa「姉」
hoku「夫」	mat「妻」
kokou「婿」	koshmat「嫁」
nishpa「紳士」	katkemat「淑女」
okkai「男」	menoko「女」
ritushpe「男兒」	oper「女兒」[2]
shiyuk「牡熊」	kuchan「牝熊」
apka「牡鹿」	momampe「牝鹿」

1) machihi は *his wife*, 從つて akor machihi は *my his wife*, ekor machihi は *your his wife* でとんちんかん。

2) *appellative* な名稱としては shion (糞), sontak (< shiontak) (糞の塊), tennep (< teinep) (濡れたもの), teine-shi (濡れた糞) 等がある。疱瘡神を避けるために故意に汚物を以て赤兒を呼ぶのである。

32. 若干の名詞は mat- を冠して女性を表示する：

ainu「男」	*mat*ainu「女」
karku「甥」	*mat*karku「姪」
ak「弟」	*mat*ak「妹」
hekachi「男童」	*mat*kachi「女童」

33. 人名に於ては男性の標識として -kur、女性の標識として -mat を用ゐる：

Kopisantok*kur* (男名)　　Chish*mat* (女名)

神名に於ても同様である。舟に就て之を云へば
舳の羽板の上に鎮座する神が

Kochararse*kur* (さらさら彦)
Kochararse*mat* (さらさら姫)

櫂枕の上に鎮座する神が

Kochichitche*kur* (きしり彦)
Kochichitche*mat* (きしり姫)

帆柱の所に鎮座する神が

Koreweuse*kur* (たわわ彦)
Koreweuse*mat* (たわわ姫)

帆綱の所に鎮座する神が

Koshiwiuse*kur* (ひうひう彦)
Koshiwiuse*mat* (ひうひう姫)

櫂の所に鎮座する神が

Tekkotchakor*kur* (手元彦)
Tekkotchakor*mat* (手元姫)

閼伽掻きの所に鎮座する神が

Kopechari*kur* (水掻き彦)
Kopechari*mat* (水掻き姫)

艫の羽板の上に鎮座する神が

Kopenoye*kur* (水うねり彦)

Kopenoye*mat* (水うねり姫)

34. 動物に在つては男性に pinne、女性に matne を冠して區別する：

pinne umma「牡馬」	matne umma「牝馬」
pinne seta「雄犬」	matne seta「雌犬」
pinne chikap「雄鳥」	matne chikap「雌鳥」

35. 神謠に於て或種の動物又は無生物が擬人化されてとる性は習慣に依つて一定してゐる：

pashkur keusut「鴉伯父」
eyami okkayo「かけす男」
shisoya okkayo「大蜂男」
iyutani ekashi「杵翁」
nimam katkemat「舟夫人」
chipni huchi「舟木媼」
ape huchi「火媼」
nisu huchi「臼媼」
shu katkemat「鍋夫人」

(注意) nina-acha「ミヅクサ」(鰈の一種) ushi-acha*「ヤマウルシ」等はその化石した形であるかも知れない。

VI. 名 詞 の 數

36. 名詞は單複に關して區別を有しない。*man* でも *men* で

---

* úshi < ússhi は日本語 *urushi* の變化である。r が s へ同化する例は極めて稀に存在する。ser-ser-ke > se*s*serke「しやくりあげて泣く」。tanto tu*r*se > tanto tu*s*se「今日の日も暮れた」。

も等しく ainu で表はす。一個の石でも十個の石でも常に shuma である：

yayan chashi たゞの　柵	*iwan chashi* 六つの　柵
kani chashi 金の　柵	*iwan chashi* 六つの　柵
shirat chashi 岩の　柵	*iwan chashi* 六つの　柵
uworushi 相 重 ね	onnaiketa その中に
yayan suyop たゞの　函	*iwan suyop* 六つの　函
kani suyop 金の　函	*iwan suyop* 六つの　函
shirar suyop 岩の　函	*iwan suyop* 六つの　函
uworushi 相 重 ね	onnaiketa その中に
anu ruwe-ne それを置いたのである	

37. 但し特に複數なることを示さうとする時は utar といふ助詞を用ゐる：

kamui utar「神々たち」
ainu utar「人間ども」
seta utar「犬ども」
chikap utar「鳥ども」

併し乍ら必ずしも常に同一物の *n* 倍を表はすのではない。例へば

acha utar arki.「伯父達が來た」。

と云つても幾人もの伯父が來たといふ意味ではなく、伯父及びその連中が來たといふ程の意味である。尚この用法は生物に限られ、無生物に在つてはそれが擬人的に考へられるのでない限

り、shuma utar「石ども」ni utar「木ども」などゝいふことは許されない。

(**注意**)「子」を意味する hekachi に utar が附いて hekattar「子ども」となり、今一度 utar が附いて hekattar utar「子どもら」となる。

38. 常に複數的に存在してゐるものは疊語法 (*gemination*) によつて表現される:

chaichai 「條」(*twigs*)
kaukau 「霰」(*hails*)
kaikai 「漣」(*breakers*)
kankan 「腸」(*intestines*)
merimeri 「火花」(*sparkles*)
paspas 「消炭」(*cinders*)
pisepise 「布海苔(フノリ)」
ramram 「鱗」(*scales*)
taktak 「塊」(*balls*)
tuntun 「鮫の胎子」(*embryos*)
toitoi 「土塊」(*clods*)

39. 名詞の複數は或場合にはその支配する動詞に於て示される:

ainu *arki*. 「人々來ぬ」。
ainu *at*. 「人さはにあり」。
chep *ot*. 「魚が多い」。
numa *ush*. 「毛深い」。

然るに或種の名詞は常に複數動詞を支配する:

supuya *at*. 「煙が立つ」。
pa *at*. 「湯氣が立つ」。
hura *at*. 「にほひがする」。
nupeki *at*. 「光がさす」。

heri *at.*	「光がさす」。
meri *at.*	「火明りがさす」。
imeru *at.*	「稻光りする」。
kem *ot.*	「血ばしつてゐる」。
pe *ot.*	「濕つてゐる」。
ye *ot.*	「膿んでゐる」。
kem *ush.*	「血が附いてゐる」。
pe *ush.*	「濕つぽい」。
ye *ush.*	「膿にまみれてゐる」。
asur *ush.*	「噂がある」。
upar *ush.*	「煤けてゐる」。
mana *ush.*	「塵が附いてゐる」。
tur *ush.*	「垢が附いてゐる」。
hau *ash.*	「聲がする」。
hum *ash.*	「音がする」。
apto *ash.*	「雨が降る」。
meni *ash.*	「雨が降る」。
ruyampe *ash.*	「雨が降る」。
upash *ash.*	「雪が降る」。
rera *ash.*	「風が吹く」。
asur *ash.*	「噂が立つ」。

at, ot, ush, ash* はいづれも複數觀念をもつ動詞であるから、それらを支配する上記の諸名詞——悉く一個二個と數へることを許さぬ抽象名詞又は物質名詞——は原始的な頭には複數として意識せられたものと考へられる。(*Cf. Lat. tenebrae*「闇」)。

* ash が複數觀念をもつことはそれが第 I 人稱複數の接辭となることに見て明かである。

40. 「互相」(*mutuality*) の接頭辭 u- が名詞に附いて古い「兩數」(*dualism*) の名殘を思はしめるものがある：

u-tek̩ 「兩手」；　　u-kema「兩足」；
u-shik「兩眼」；　　u-irwak「二人兄弟」等。

VII. 名　詞　の　格

41. 名詞そのものは凡ゆる格を通じて遂に無變化であり、たゞ概念のみの表示に抽象形を、人稱關係をも併示する時具體形を、そのまゝ用ゐるのみである。

格の機能は

(1) 主格 (*nominative*)・對格 (*accusative*)・呼格 (*vocative*) では語序環境等によつて示される：

pashkur　kokko　kamihi　soisoye.
鴉が(主格)　ゴツコ　の肉を(對格)　ほじり出す

(2) 屬格 (*genitive*) では所屬すべき名詞を具體形に置くことによつて示される：*

kokko　kamihi　(kamihi < kam)
ゴツコ　の肉

(3) 與格 (*dative*) では、i) 他動詞の間接目的なる時は語序、ii) 自動詞の補語なる時は *a*. 助詞、*b*. 動詞の語頭に於ける接頭辭、等によつて示される：

i) tampe　huchi　ku-kore　na.
これ　祖母さんに　私　上げる　わ

ii) *a*. huchi　matkachi　orun　upashkuma.
祖母が　少女　に　昔語りする

---

* 所屬されるものが人格を有する時に限り kor を以て表はすことも出來る (§ 28)：

Sanjiro kor michi = Sanjiro michihi「三次郎の父」
Sanjiro kor hapo = Sanjiro hapoho「三次郎の母」
menoko kor konchi = menoko konchihi「女の頭巾」

b. huchi matkachi ko-pashkuma.
祖母が 少 女 に 昔語りする

(4) その他の格も *a.* 格助詞、*b.* 接頭辭、等によつて表示される。(*a*) は分析的な語法で口語は主としてこれであり、(*b*) は綜合的な古めかしい語法で雅語に多く用ゐられる。

42. 處格 (*locative*)。

a. 助詞 ta :——

poro chise *ta* horari.
大なる 家 に 彼住めり

ru pishkani *ta* nupe chikka-p ?—niatush.
路 の兩側 に 涙を こぼす もの 手桶

iyoipe nupeki chise-upsor *ta* maknatara.
寶器 の光 家 内 に 煌々たり

b. 接頭辭 e-, o-, ko- による表現 :——

poro chise *e*-horari.

ru pishkani *o*-nupe-chikka-p ?

iyoipe nupeki chise-upsor *ko*-maknatara.

43. 「へ」の格 (*allative*)。

a. 助詞 ta 及び un :——

Poropet-kotan *un* arpa.
幌別 村 へ 彼行く

Kanesanta *ta* arki.
金 山 丹 へ 彼等來る

Tokyo *un* hekomo.
東京 へ 彼去る

b. 接頭辭 e-, o-, ko- による表現 :——

Poropet-kotan *e*-arpa.

Kanesanta *o*-arki.

Tokyo *ko*-hekomo.

44. 奪格 (*ablative*)。

a. wa, orwa, orowa 及びその各々に -no を附した形が用ゐられる：

ainu uturu *wa* soikosanu.
人々 の間 から 飛出した

sapa-kitaina *wano* wakka a-chari.
頭の てつぺん から 水を ぶつかけられる

Poropet *orwano* Shirawoi orpakno.
幌 別 か ら 白 老 ま で

orowa, orowano は尙所相形式に於ける行爲者 (*agent*) を表はすのにも用ゐられる：

meko seta *orowa* a-noshpa.
猫が 犬 に 追はれる

b. 稀には接頭辭 ko- も用ゐられる：

mat neyakka ikor tura i-*ko*-uina.
妻 さへも 寶器 と共に 我から奪つた

45. 以格 (*instrumental*)。

a. 日高地方では ani, その他の地方では ari :——

tek *ari* kar-pe
手 にて 作れるもの

kem *ari* kar-pe
針 にて 作れるもの

kaya *ari* terke.
帆 にて 走る

b. 接頭辭 e- による表現 :——

tek-*e*-karpe

kem-*e*-karpe

kaya *e*-terke.

46. 共格 (*comitative*)。

rap *tura* kikkik wa raike.
羽 ぐるみ 叩い て 殺す

né cheppo pone *tura* kuikui.
その 魚を 骨 まゝ 嚙る

nui *tura* tata. (火中人を斬る)
火焰 と共に 斬る

尙 *and* の意味で物を列擧する時には newa を用ゐる：

urki *newa* taiki upaekoiki.
虱　と　蚤が　口論した

erekush *newa* samampe *newa* supun ukookai.
鱈　と　鰈　と　石斑魚が　同棲した

b. 接頭辭 ko- による表現：——

rap *ko*-kik.

pone *ko*-kuikui.

nui *ko*-tata.

47. 經由格。

kari（「廻る」意の動詞から）：——

purai *kari* ahun.
窓　から　入る

peka（「目ざす」「向ふ」意の動詞から）：——

yá *peka* oman.
くが　より　行く

kari と peka とを重用することもある：——

pon chikkappo punkar *kari peka* terke.
小　鳥　が　蔓　を　傳　つ　て　跳ぶ

ekari（「そこを廻る」意の動詞から）：——

chise *ekari* oman.
家　を迂回して 行つた

okari（同上）：——

pu *okari* ainu apkash.
庫　のまはりを　人が　歩　く

akkari（「過ぎる」意の動詞から）：——

i-*akkari* kush wa oman.
私 のそばを　通つ　て　行つた

kama（「跨ぐ」意の動詞から）：——

iwan kotan *kama* apkash.
多くの　村　を通つて　歩　く

turashi (「登る」意の動詞から):——

pet *turashi* oman.
川 に沿つて上へ 行く

pesh, esor (「下る」意の動詞から):——

pet *pesh* san.
川 に沿つて下へ 下る

48. 「迄」の格。

pakno, orpakno :——

Poropet orwano Shirawoi *orpakno* (§ 44)

49. 「より」の格。

kasuno, akkari :——

menoko *kasuno* ainu okirashnu.
女 より 男が 强い

tampe *akkari* toampe pirka.
これ より あれが 美しい

50. 化成格 (*translative*)。

ne (「に成る」意の動詞から):——

shu ainu *ne* yaikar wa rimse.
鍋が 男 に 化け て 踊る

51. 不所有格 (*abessive*)。

sak, sakno (「を缺く」意の動詞から):——

epetchiu *sakno* paye yan! (*farewell!*)
障 り な く いらつしやい

VIII. 格類似の諸形式

52. 名詞に附いてその位置的關係——內·外·前·後·上·下·かみ·しも等——を表はす諸形式がある。悉く本來は名詞で、從つて抽象形と具體形とに分れ、自づと二種の型を呈する。一はその抽象形に -ta 又は -un の附いた形で、おもに助詞として用ゐられる。他はその具體形に上記の關係詞が附いた形で、助詞と

して用ゐられる他に、副詞として句頭にも立つ。今その關係を chorpok (下) を以て示せば次の如くである：

第 I 類(抽象形)——nisu *chorpok-ta* iyutani an.——
「臼の下に杵がある」 (助 詞)
——nisu *chorpoki-ta* iyutani an.——
第 II 類(具體形)
「臼の下に杵がある」
——*chorpoki-ta* iyutani an.——(副 詞)
「その下に杵がある」

この關係は次の諸形式に於ても同様である：

(第 I 類)		(第 II 類)	
or(-ta)	「内(に)」	oro(-ta)	「その内(に)」
tum(-ta)	「中(に)」	tumu(-ta)	「その中(に)」
noshki(-ta)	「中央(に)」	noshki(-ta)	「その中央(に)」
utur(-ta)	「間(に)」	uturu(-ta)	「その間(に)」
kopak(-ta)	「方(に)」	kopake(-ta)	「その方(に)」
ka(-ta)	「上(に)」	kashi(-ta)	「その上(に)」
pok(-ta)	「下(に)」	poki(-ta)	「その下(に)」
rapok(-ta)	「間(に)」	rapoki(-ta)	「その間(に)」
sam(-ta)	「側(に)」	samake(-ta)	「その側(に)」
soi(-ta)	「外(に)」	soike(-ta)	「その外(に)」
tukar(-ta)	「手前(に)」	tukari(-ta)	「その手前(に)」
kotcha(-ta)	「前(に)」	kotcha(-ta)	「その前(に)」
oshmak(ta)	「後(に)」	oshmake(-ta)	「その後(に)」
pa(-ta)	「かみ(に)」	pake(-ta)	「そのかみ(に)」
kes(-ta)	「しも(に)」	keseke(-ta)	「そのしも(に)」

53. これらの形式は總べて目的格支配である。從つて人稱に關係する時は目的格の人稱接辭をとる：

i) 雅語に於て：

	(*sing.*)		(*pl.*)	
I.	i-chorpokta	我の下に	i-chorpokta	我等の下に
II.	e-chorpokta	汝の下に	echi-chorpokta	汝等の下に

ii) 口語に於て：

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	en-chorpokta	un-chorpokta (*excl.*) i-chorpokta (*incl.*)
II.	e-chorpokta i-chorpokta (*honor.*)	echi-chorpokta i-chorpokta (*honor.*)

(注意) 第 III 人稱には人稱接辭がないからそのまゝ用ゐる。
suma chorpokta「石の下に」(助詞)
chorpokita「彼の下に」「彼女の下に」「それの下に」(副詞)

54. 「内」の關係。

i) or (本來「内」を意味する名詞で合成語の中ではその意味が明瞭である)：

ush-*or* kotan「灣內の村」——有珠(ウス)村·宇曾利村 (恐山の原名)

nup-*or* kotan「野中の村」——野幌(ノツポロ)の原名

次いで「内」の意味から出て單に「そこ」といふ位置的關係を示す：

not-*or* kotan「岬·そこ(にある)·村」——能登呂(ノトロ)の原名

sham-*or* moshir「傍·そこ(にある)·國」——隣國(日本)

or-ta > otta となつて依然「内に」「中に」の原義をもつ：

chikap *otta* iyotta uatte-p「鳥の中で一番多いもの」

次いで單に位置を示す助詞となる：

kampi *otta* anuye.「紙に書いてある」。

副詞として句頭へも立つ：

otta a-nuye-p anak ainu-itak ne.「そこに書かれてあるものはアイヌ語だ」。

or-un となつてやはり「中に」「中へ」の意味を保持する：

chise *orun* hum ash.「家の中に音がする」

次いで "*place to which*" を示す助詞として：

Endo *orun* oman.「江戸へ行く」。

副詞として句頭にも立つ：

orun oman-i ka isam.「そこへ行くべき所もない」(歸るに家なし)。

oro と具體化して「の中に」「の中へ」を意味する：

shu *oro* oma-p「鍋の中に入つてゐるもの」

shu *oro* wakka o!「鍋の中へ水を入れよ！」

原義を清算して單に位置的關係を示す助詞として用ゐられる：

shik *oro* kush-tek.「目の所をさつと通る」(目前を飛鳥の如く通過する)。

句頭へも立つ：

oro-ru-pirka-i「そこ(の)·路(の)·よい·所」(路のよい所)。

oro-ta となつて「の所に」「の所へ」を意味する：

a-yupi *orota* reushi.「我兄の所に泊つた」。

句頭へも立つて「そこに」「そこへ」を意味する：

orota Panampe ek.「そこへ下の者(パナンペ)が來た」。

ii) tui (腹)+or > tuyor (內部)：

mosem *tuyor* a-*o*-shiraye.「納屋の中へ我押入る」。

iii) upsor (ふところ)：

iyoipe-nupek chise-*upsor* *ko*-maknatara. (§ 42. *b.*)

iv) osh, oshi, oshke (内部):

chise *oshke-ta* an.「家の中にゐる」。

ram *oshi* wano「裏心から」

oshke poro.「内部が大」(子供など「賢い」)。

55. 「中」の關係。

i) tom(o):

atui *tom-ta*「海中に」

ru *tom-ta*「途中に」

ii) tum(u) とも:

yachi *tum-wa* soyoterke.「泥の中から飛出す」。

kotan *tum* peka hoyupu.「村の中を走る」。

iii) hon (腹)+tom(o):

ru *hontom-ta*「途中に」

ipe *hontom-ta*「食事中に」

「途端に」「するや否や」の意味にもなる:

shikiru *hontom-ta*「避ける途端に」

rawoshma *hontom-ta* soyoterke.「飛込んだかと思ふと飛出した」。

その他 attom (< ar+tom)「まつ只中」、kuttom (< kur+tom) (中) 等の形もある。

56. 「まん中」の關係。

noshki, noshkike:

kotan *noshki-ta*「村の中央に」

to *noshki-ta*「湖心に」

57. 「間」の關係。

utur, uturke, uturu:

ainu *uturu-wa* soikosanu. (§ 24)

repa chip kai *uturu ko*-shikarimpa.「漁舟は波間にクルクル廻つた」。

58. 「方」の關係。

i) § 54 の形式がそのまゝ用ゐられる：

ya *oro* ekatta.「陸の方へ引上げる」。

kotani *orun* hosari.「故鄉の方を振返る」。

ii) kopak, kopake, kopaksam, kopaksama :

ainu-kotan *kopakun* ek.「人里の方へ來る」。

iii) 合成語の中では -na がその意味を表はす：

rik-*na*-puni「上の方へ持上げる」

ra-*na*-ranke「下の方へ取下ろす」

sa-*na*-sanke「前の方へ取出す」

mak-*na*-raye「後の方へ押やる」

au-*na*-raye「內の方へ押込む」

soi-*na*-raye「外の方へ押出す」

ya-*na*-yanke「陸の方へあげる」

sapa-kitai-*na* wano「頭のてつぺんの方から」

kan*na* moshir「上方の國」(現世)

pok*na* moshir「下方の國」(冥府)

59. 「上」の關係。

i) 接觸して上 (*Eng. on*) の意味には ka :

nea poshta a-shike *kata* a-ante kane ek-an.
作の 小犬を 我が荷物 の上に 載せ て 來た

kenashso-*ka* apka topa chi-*o*-rapte.
木 原 の上に 牡鹿の 群が 降りて來た

san *ka-wa* shito hachir.
棚 の上から 粢が 落ちる

具體形は kashi 又は kashike となつて：

shu-puta *kashike* kikkik.「鍋蓋の上を叩く」。

ii) (tap「肩」+ka) > tapka, tapkashi, tapkashike :

kamui esani *tapkashike* a-*e*-horari.「神岬の上に我住む」。

iii) (kur「蔭」+ka) > kurka, kurkashi, kurkashike (「表面一帶」の意味) :

atuiso *kurkashi* teshnatara.
海面 一 帶 . 鏡の如し

poro chikuni ranke teke amtoi *kurka* *ko*-piraske.
大 樹 の 下 枝 地 表 に ひろがる

tapan ruyampe nupuri shinne chip *kurkashi* *ko*-tososatki.
大 波 山 の如く 舟 上 に 亂れそゝぐ

iv) (tui「中」+ka) > tuika, tuikashi, tuikashike (「同上」) :

tek *tuika-wa* tek tuipok-wa kem chik.
手 の上 から 手 の下 から 血が 滴る

kuwa *tuika-wa* nui apto shinne chiranaranke.
杖 の表 から 火焔 雨 の如く 降りそゝぐ

v) 比喩的に「しながら」の意になる :

apkash *tuikata* usaokaipe eyaihanokkar.
旅 行 しながら いろいろの事 を ま な ぶ

vi) 物から離れて上 (*Eng. over*) の意味には en-ka, en-kashi, en-kashike :

inuma *enka* nishpa mutpe *o*-ukaoma.
寶列 の上方に 首領の 佩刀 相重れり

kotan *enkashi* yatotta *ko*-shikarimpa.
村 の上空に 鳶が 輪 を 描 く

60. 「下」の關係。

i) pok, poki, pokke :

kor-*pok-un*-kur「蕗の下の人」

nupuri *pokta*「山の下に」

toi *pokun*「地下に」

ii) chorpok, chorpoki, chorpokke, chorpokike :

rorun puyar *chorpokta* shikehe ante.
上座の 窓 の下に 負ひ荷を 置いた

iii) kurpok, kurpoki, kurpokke, kurpokike :

ni-reu *kurpok* *ko*-reukosanu.
樹幹 の下へ さつと入る

iv) tuipok, tuipoki, tuipokke, tuipokike :

tek *tuipok* wa kem chik.
手 の 下 から 血が 滴る

v) mompok, mompoki, mompokke, mompokike :

ishi *mompok* e-rorpa.
尾翼 の下へ 首をさし入れる

vi) empok, empoki, empokke, empokike (*Eng. below*) :

aman-*empok* ampa kamui
梁 の下方を 領する 神

61. 「側」の關係。

sam, sama, samake :

apa-*sam* *e*-a. 「火の側に坐る」。

hekachi *sama* seta *e*-hoyupu. 「少年の側を犬が走る」。

62. 「外」の關係。

soi, soye, soike :

chise *soiketa* ainu ash. 「家の外に人が立つてゐる」。

63. 「手前」の關係。

tukar, tukari, tukarike :

sham *tukari* kotan 「日本の一つ手前の里」(詞曲に出て來る「松前」らしい城下町)

64. 「前」の關係。

kotcha, kotchake :

shu *kotchaketa* manaita an. 「鍋の前に俎あり」。

比喩的に「の代りに」「に代つて」の意味になる :

kotan-kon-nishpa kor utari *kotchake-ne* i-koyairaike.
村 の 首領が その 部下 を代表して 余に謝辭を述べた

michi *kotchaketa* oman.
父 の代りに 行く

etok, etoko (「前」「先」「突端」等の意味):

i-*etokta* pet san kanan.「私の行く手に川が流れてゐた」。

65. 「後」の關係。

oshmak, oshmake :

chise *oshmakta* ashinru an.「家の後に便所がある」。

sermak, sermaka :

kotan *sermakta* kamui horari.「村の背後に神住む」。

oka, okake :

ayai kor michi *okata* chish.「兒がその父を慕つて泣く」。

sempir, sempirke :

shi-*sempirketa* shikiru wa chish.「蔭へ廻つて泣く」。

66. 「上座」の關係。

ror, rorke :

i-*rorketa*「我の上座に」

67. 「下座」の關係。

útur, úturke :

i-*uturketa*「我の下座に」

68. 「かみ(のはづれ)」の關係。

pa, pake :

kotan-*pa*「村のかみのはづれ」(村の東端)

atui-*pa*「海のかみのはづれ」(東海)

moshir-*pa*「國土のかみのはづれ」(東國)

69. 「しも(のはづれ)」の關係。

kes, kese, keseke :

kotan-*kes*「村のしものはづれ」(村の西端)

atui-*kes*「海のしものはづれ」(西海)

moshir-*kes*「國土のしものはづれ」(西國)

IX. 轉 成 名 詞

70. 第 II 類の動詞 (§ 115) は多くそのまゝ名詞として用ゐることが出來る：

atu	「嘔吐する」	「嘔吐」
ipe	「食事する」	「食事」
uimam	「交易する」	「交易」
ekimne	「山狩に行く」	「山狩」
okuima	「小便する」	「小便」
osoma	「大便する」	「大便」
onne	「老死する」	「老死」
omke	「咳をする」	「咳」「風邪」
shinot	「歌舞する」	「歌舞」
sush	「沐浴する」	「沐浴」
tarap	「夢みる」	「夢」
tasum	「病む」	「病」
tapkar	「踏舞する」	「踏舞」
tusu	「巫術を行ふ」	「巫術」
nuwap	「呻吟する」	「呻吟」
mina	「笑ふ」	「笑」
mokor	「眠る」	「眠」
rai	「死ぬ」	「死」
rimse	「踊る」	「踊」
hayok	「武裝する」	「武裝」

71. 第 I 類の動詞 (§ 115) も目的格の名詞又は接頭辭と結合

すれば、第 II 類に轉ずるから (§ 116)、そのまゝ名詞として用ゐることが出來る：

	(第 I 類動詞)	(第 II 類動詞)	(名詞)
(A)	inau a-ke.	inauke-an.	inauke
	「木幣を我削る」	「木幣削りを我する」	「木幣削り」
(B)	sake a-ku.	iku-an.	iku
	「酒を我飲む」	「我飲酒す」	「飲酒」
(C)	chip a-nukar.	unukar-an.	unukar
	「舟を我見る」	「我等會見す」	「會見」
(D)	seta a-raike.	yairaike-an.	yáiraike
	「犬を我殺す」	「我自殺す」	「自殺」

72. (A) 「名詞＋他動詞」

hat-kar	「葡萄を採る」	「葡萄採り」
kutchi-kar	「コクワを採る」	「コクワ採り」
mat-kor	「妻をもつ」	「妻帶」
hoku-kor	「夫をもつ」	「夫帶」
hon-kor	「妊娠する」	「妊娠」
po-kor	「出產する」	「出產」
wakka-ta	「水を汲む」	「水汲み」
toi-ta	「畑を耕す」	「耕作」
turep-ta	「姥百合を掘る」	「姥百合掘り」
shirka-nuye	「刀鞘を彫る」	「刀鞘彫り」
kamui-nomi	「神に獻酒して祈る」	「獻酒」

73. (B) 「接頭辭 i＋他動詞」(§ 114)

i-uta (> iyuta)	「搗きものする」	「搗き物」
i-oshke (> iyoshke)	「編みものする」	「編み物」
i-ri	「皮剝ぎする」	「皮剝ぎ」

i-cha　「栗穂摘する」　「栗穂摘み」
i-humke　「子守唄を唄ふ」　「子守唄」
i-rara　「悪戯をする」　「悪戯」
i-rushka　「立腹する」　「立腹」

74. (C) 「接頭辭 u＋他動詞」(§ 146)

u-ekot (> uwekot)　「情死する」　「情死」
u-epeker(> uwepeker)　「昔噺する」　「昔噺」
u-eneusar (uwe——)　「四方山噺する」　「四方山噺」
u-koiki　「喧嘩する」　「喧嘩」
u-pa-ekoiki　「口喧嘩する」　「口喧嘩」
u-par-pakte　「口くらべする」　「口競べ」
u-kiror-pakte　「力くらべする」　「力競べ」
u-pashkuma　「昔語りする」　「昔語り」
u-chishkar　「相哭する」　「相哭」

X. 名詞法語尾

75. 動詞·形容詞から名詞をつくるには次の如き種々の語尾又は接尾辭を用ゐる：

i) -i (母音の後では -hi ともひゞく。「する事」「する處」「する時」等の意)：——

san「下る」「出る」san-i「子孫」wempe sani「悪者の子孫」

esan「そこを下る」「そこへ出る」esan-i「下る處(坂)」「出た處(岬)」

shinean「一つの」「或る」shinean-i「一所」「或時」

shirka-nuye ko-shineani-enitomomo.
鞘 彫り に 一所を 見つめる

（刀鞘の彫刻に沒頭する）

kar「造る」「爲す」kar-i「爲すこと」「仕樣」

ene a-kar-i ka isam. (*Fr. Il n'y a rien a faire.*)
どう しやう も ない

「曰く」といふ時は常にこの形式を用ゐる：——

nishpa ene itak-i :「子曰く」

副文章をこれで結べば「ものを」「のに」と反意的になる：——

sennekasui shiran kuni a-ramu a-i（寢耳に水）
よ も や 然らん とは 思はざり しに

somokaun shiriki kuni a-ramu rok-i（藪から棒）
よ も や さうしやう とは 思はなか つたのに

ii) -ike (hike とも)：——

pirka「よい」	pirka-ike	「よいこと」「よい物」「よい者」
wen「惡い」	wen-ike	「惡いこと」「惡い物」「惡い者」
poro「大きい」	poro-ike	「大きいこと」「大きい物」「大きい者」
pon「小さい」	pon-ike	「小さいこと」「小さい物」「小さい者」

副文章を導いて *as, when, while* 等の意味になる：——

ramma-kane katkor-kane okai-an ike
いつも 無事に 暮してゐる と

iii) -p, -pe（母音の後には -p, 子音の後には -pe.「物」「者」「事」）：——

poro-p 「大きいもの」

pon-pe 「小さいもの」

pirka-p　「よいもの」

wen-pe　「悪いもの」

副文章をこれで結べば反意的となる:——

nani　a-raike　ko　pirka-p
すぐ　殺せ　ば　よい のに

somoka　shiran　kuni　a-ramu　rok-pe
まさか　さうならう　とは　思はなか　つた のに

iv)　-kur :——

poro-kur　「大きいひと」(大人)

pirka-kur　「よいひと」(君子、長者、美人)

kotan-kor-kur　「村を領有するひと」(酋長)

ya-un-kur　「陸のひと」(本州人)

rep-un-kur　「沖のひと」(外國人)

(注意)　-p, -pe は動物にも無生物にも用ゐられるので、それを「人」の意味に用ひる時は幾分ぞんざいな語氣を有してゐる。それに對して -kur の方は常に尊敬の氣持を含み、或場合には「神」の意味にまでなる。

nupuripa-un-kur　「山の東端の神」(狼神)

nupurinoshki-un-kur「山の中央の神」(熊神)

nupurikes-un-kur　「山の西端の神」(罷神)

尙 ainu といふ語が kamui (神) に對しては「人」を意味するが menoko (女) に對しては「男」を意味するのと同様に、-kur も -mat に對しては「男性」を意味する (§ 33):

tush-erikin-kur*「綱で登る男」(雄蜘蛛)

tush-erikin-mat*「綱で登る女」(雌蜘蛛)

v)　-n, -iu (母音の後では -n, 子音の後では -iu.「人」):——

shine-n　「一人」

---

* 日高では次の如く云ふ:——
ka-erikin-kur「糸で登る男」(雄蜘蛛)
ka-erikin-mat「糸で登る女」(雌蜘蛛)

tu-n 「二人」
re-n 「三人」
ine-n 「四人」
ashikne-n 「五人」
iwan-iu 「六人」
arwan-iu 「七人」
tupesan-iu 「八人」
shinepesan-iu 「九人」
wan-iu 「十人」
hempak-iu 「何人」
pon-iu 「弟」
ichan-iu 「鱒」

第 III 章　代　名　詞

I. 人　稱　代　名　詞

76. 雅語の人稱代名詞

	(*sing.*)		(*pl.*)	
I.	a-shinuma	我	a-okai	我等
II.	e-shinuma	汝	echi-okai	汝等
III.	shinuma	彼	okai	彼等

(注意 i) 膽振(鵡川地方を除く)では第 I 人稱單數に aokai, 第 II 人稱單數に eani (口語の汝)、第 III 人稱單數に ani (口語の彼) を用ゐる。

(注意 ii) 神謠の中で神が自らを指して云ふ時は aokai の代りに chiokai を用ゐる。

(注意 iii) 日高及び膽振の鵡川地方では aoka, echioka, oka 等である。

(注意 iv) 樺太では anokai。

(注意 v) ashiroma(我)、eshiroma (汝)、shiroma (彼)等の形もある(p. 14)。

(注意 vi) 近文方言では第 II 人稱複數を eshiokai といふ。

77. 口語の人稱代名詞

	(*sing.*)		(*pl.*)	
I.	ku-ani	私	chi-okai	私達(對立的)
			a-okai	私達(包括的)
II.	e-ani	お前	echi-okai	お前達
	a-okai	あなた(敬稱)	a-okai	あなた方(敬稱)
III.	ani	彼	okai	彼等

(注意 i) 口語の第 I 人稱複數には *inclusive* (包括的) と *exclusive* (對立的) の區別が生じてゐる。卽ち相手をも含めて我々と云ふ時は aokai, 相手を前に置いてそれに對して我々と云ふ時は chiokai を用ゐる。

(**注意 ii**) 日語の第 II 人稱には敬稱も生じてゐて單複に aokai を用ゐる。

78. アイヌ語には別に人稱接辭 (*personal affixes*) があつて、それが動詞及び形容詞に附いて明確に人稱を表示するので、特に獨立の人稱代名詞なるものを必要とせず、從つて稀にしか之を用ゐない。アイヌ語が人稱代名詞を用ゐるのは「私なら」「私としては」「私こそ」などゝ特に主語を强調するやうな場合である。例へば

kuani ku-eraman.「私なら知つてゐる」。

なる文章はラテンの *ego scio.* 佛語の *Moi je sais.* などに相當し、英語で云へば *As for me I know.* の意味である。*ego, moi* がそれぞれの文に於て謂はゞ贅語 (*pleonasm*) である如く、kuani も亦アイヌ語の文に於ては贅語であり、從つて之を省いて

ku-eraman. (*scio. Je sais. I know.*)

とだけ云ふも一向に差支へないのみか、寧ろその方が斷然普通の形式である。

II. 人稱代名詞の格

79. 「は」の格。アイヌ語の人稱代名詞はもと "*to be*" を意味する an がそれぞれの人稱及び數に於て名詞化した形である。卽ち ku-an「我あり」e-an「汝あり」an「彼あり」等に名詞法語尾の -i が添つて出來た形であり、それが

ku-an-i, ainu ku-ne.
我あるやう アイヌにて 我あり

e-an-i, shisam e-ne.
汝あるやう 日本人にて 汝あり

an-i, nucha ne.
彼あるやう ロシヤ人にて 彼あり

等の如き構造に於て頻用せられてゐる間に一個の單語として成

立するに到つたものであり、本來副詞句として成立し、現在また副詞的にのみ使用せられるのであるから、これらの人稱代名詞は「が」の格 (*nominative*) と云ふより、寧ろ「は」の格 (*absolute case*) といふべきものである。

80. 領格。アイヌ語の人稱代名詞には「は」の格の他に「の」の格がある。前者が "*to be*" を意味する動詞の變化で出來てゐる如く、後者は "*to have*" を意味する動詞の變化で出來てゐる：

i) 雅語の領格代名詞

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	a-kor 我の	a-kor 我等の
II.	e-kor 汝の	echi-kor 汝等の
III.	kor 彼の	kor 彼等の

(**注意 i**) 神謠語法では第 I 人稱單複に chi-kor を用ゐる。
(**注意 ii**) 近文方言では第 II 人稱複數に eshi-kor を用ゐる。

ii) 口語の領格代名詞

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ku-kor	chi-kor (*excl.*) a-kor (*incl.*)
II.	e-kor a-kor (*honor.*)	echi-kor a-kor (*honor.*)
III.	kor	kor

III. 疑 問 代 名 詞

81. ne を語根とする一群：

né-kotan-un-pe「どの村の者」
né-moshir-un-pe「どの國の者」

ne-n「誰」

nen e-kik ya?「誰が汝を打つたか」「誰を汝は打つたか」

nen-ka*「誰か」nen ne-yakka「誰でも」

ne-p「何」

nep an ya?「何があるか」nep e-kor ya?「何を汝有するや」

nep-ka*「何か」nep ne-yakka「何でも」

ne-i「何處」

nei-ta「何處に」nei-un > né-un「何處へ」neun-ka*「何處かへ」

neita-ka*「何處かに」neita ne-yakka「何處にでも」

ne-kon(a)「如何」

nekona ikichi-an ko pirka ruwe-ta-an?「どうすればいいのです」

nekonka* (newa)「どうにかして」nekona-an「どのやうな」

i-ne「どの」

né seta ine?「その犬どうした」

ine seta「どの犬」

ine-an > inan「どの」

inan-pe「どのもの」inampe pirka ya?「どつちが美しいか」

---

* ka は本來「も」といふ意味の助詞である。これが疑問詞に附けば一般にその意味を不定にする :—

nen-ka「誰か」	(*Ger. irgend-welcher*)
nep-ka「何か」	(*Ger. irgend-was*)
neita-ka「何處にか」	(*Ger. irgend-wo*)
neun-ka「何處へか」	(*Ger. irgend-wohin*)
nekon-ka「何とかして」	(*Ger. irgend-wie*)

inan-hempar「いつ如何なる時に」

82. hem, hum, hun を語根とする一群：

hempar「何時」

hempar e-ek ya?「何時汝來たか」

hempar-ka「いつか」hempar ne-yakka「いつでも」

hempak「何程」

hempak rerko e-reushi ya?「何日程汝泊つたか」

hempakno atai ampe ne ya?「どの位値段のするものか」

hemanta「何」

hemanta e-nu rusui ya?「何を汝聞きたいのか」

hemanta ari a-ye-p「何とやらいふもの」

hem「何」

hem-tasumi, hem-shiyeye「何のやまひ」「何のわづらひ」

humna「誰」

humna ne ya?「誰であるか」

hunak「何處」

hunak-un e-arpa?「何處へ汝行く」

hunak-wa e-ek?「何處から汝來た」

83. mak を語根とする一群：

mak a-ye-p he?「何といふものか」

mak-an「どんな」

makan kat kor-pe「どんな形をしたもの」

makanak「どんな」

e-ki wa makanak?「汝がしてはどうだ」

makanak-an「どんな」

makanakampe「どんなもの」

kanak (makanak の *apheresis*)

kanak kat kor-pe「どんな形をしたもの」

kanakan「どんな」

kanakan kuni-p「どんなもの」

84. その他雅語にのみ用ゐられるものに inki「どの」がある。

inki nishpa「どの人」

inki moshir「どの國」

inki-ne-p 「どのやつ」

inki-an-kur 「どの人」

IV. 指 示 代 名 詞

85. i) 近稱 te「ここ」:——

té-ta ante! 「ここへ置け」

té-un ek! 「ここへ來い」

e-té-un hosari!「こつちィ向け」

té-or arka. 「こゝンとこが痛む」

ii) 中稱 ta「そこ」:——

tá-ta 「そこに」

tá-ta otta 「そこで」

tá an na! 「そこにあるよ」

tá-n-un terke. 「そつちへ飛ぶ」

tá-n-ta 「そつちに」

iii) 遠稱 to「あそこ」:——

tó an na! 「あそこにあるよ」

tó-n-un inkar! 「あつち見ろ」

tó-n-ta oman! 「あそこへ行く」

V. 指示形容詞

86. 指示形容詞は中稱及び遠稱の指示代名詞に "*to be*" を意味する動詞 an が添つて出來る。この an は複數に於ては okai に變ずる。尚近稱から出來た形容詞は無く、中稱から出來たものが之に代つてゐる：

	（指示代名詞）	（指示形容詞）
（近稱）	te ここ	（ta-án）> tan この ta-n-ókai これらの
（中稱）	ta そこ	（tá-an その） （tá-okai それらの）
（遠稱）	to あそこ	to-án あの to-n-ókai あれらの

（**注意 i**） 中稱指示形容詞はあまり用ゐられない。併し用ゐられる場合にはアクセントは ta にある。近稱指示形容詞 tan を强調すれば taánとなつて（§ 16, 注意 i）偶然中稱指示形容詞の táan と同形を呈するが兩者はアクセントによつて嚴重に區別されてゐる。複數でも同様である。尚 ta*n*ó-kai, to*n*ókai の n は音便で入つたものである。

（**注意 ii**） 近稱指示形容詞には tap-an「この」tap-okai「これらの」等の形も存在する。tap は「今」といふ意味の副詞である：

tapampe 「このもの」
tapokaipe「これらのもの」

（**注意 iii**） 指示形容詞の tan, tapan 等には身振を以て「こんなに」と指示するやうな氣持があり、そこから英語の *so* などに見るやうな *very* の意味を發達させてゐる：

tan poro chise「とつても大きな家」
tan poro pet 「ひどくでかい川」
tan rik peka 「恐ろしく高い所を」
tapan rui rera「恐ろしく烈しい風」

87. 以上の他に尚 ne がある。場合に應じて「この·その·あの·これらの·それらの·あれらの」と譯せるが、指さして示す方向的な意味はなくて、以前に何か曰くがあつた——その曰くを回顧しつゝ「その何々」と指摘する場合にのみ用ゐる。謂はゞ定冠詞的感じのする語である：

né shimke 「その翌日」
né seta ne. 「あの犬だ」。
né ainu utar「例の連中」
shine ainu an ; né ainu ene itaki :
一人の 男が あつた その 男が かう 云つた

88. ne は單複を通じて用ゐられるが、また區別した云ひ方も生じてゐる：

né-a, né-an 「その」(單)
né-rok, né-okai 「それらの」(複)

尚 ne は直接に名詞化することが出來ないので、名詞化する際には本條のものを用ゐる：

néa-p, néan-pe 「そのもの」「例の者」(單)
nérok-pe, néokai-pe 「それらのもの」「例の者ども」(複)

第 IV 章　數　　詞

I.　數詞の種類及び用法

89.　數詞は之を單純形 (*simple form*) と複合形 (*complex form*) とに分つことが出來る。前者は數詞本來の形態で、專ら形容詞として附加語的 (*attributive*) に用ゐられる：

shine ainu　「一人の男」
re erum　「三匹の鼠」
ashikne suma「五個の石」

後者は前者に助數詞を添へた形で

arwan-iu a-ne.「私達は七人です」。

の如く動詞の補語として用ゐられる他に

ainu tu-p an.「男が二人ゐる」。
erum ine-p a-raike.「鼠を四匹殺した」。
suma iwan-pe e-yapkir.「石を六個投げた」。

の如く副詞的修飾語として名詞の後に置いて用ゐられる。

II.　單　純　形（形容詞形）

90.

1	shine	6	iwan
2	tu	7	arwan
3	re	8	tupesan
4	ine	9	shinepesan
5	ashikne	10	wan

(注意) shi*ne* の *ne* は名詞から形容詞を作る時の語尾であるから shi- に意味があつたことは察せられる。shi- には「本」「眞」「自身」等の意味があるが、尙數へることは指に發足するから、この shi- は或は *shi*-mompet (拇指) に關係があるかも知れない。同様に re も或は *ri*-mon-pet (中指) に關係があるかも知れない。tu の語原は分らないが、ine は恐らく inne (多くの) に由來するものであらう。ashikne は明かに ashke (手) から來てゐる。iwan, arwan の -wan は「十」で、i- は *i*ne に、a*r*- は *r*e に關係してゐる。tup-e-san, shinep-e-san はそれぞれ「二つ足りぬ」「三つ足りぬ」である。卽ち「六」から「九」までの數は「十」を標準として 6＝10－4, 7＝10－3, 8＝10－2, 9＝10－1 の如く減法式の頭で計算して行つたのである。「十」の wan は恐らく u-an (兩方ある) で、兩手の指數に由來してゐるものと思はれる。

91.

11	shine ikashma wan	16	iwan ikashma wan
12	tu ikashma wan	17	arwan ikashma wan
13	re ikashma wan	18	tupesan ikashma wan
14	ine ikashma wan	19	shinepesan ikashma wan
15	ashikne ikashma wan	20	hotne

(注意 i) ikashma はもと「剩る」といふ意味の動詞から「あまり」といふ意味の助詞に化したもので、shine ikashma wan は宛も日本語の「とをあまりひとつ」「はたちあまりふたつ」などゝ云ふのに似てゐるが、小數を先に大數を後にする構造は、寧ろ獨逸語の *ein-und-zwanzig*, *zwei-und-dreißig* などに類してゐる。

(注意 ii) hotne の hot は「一揃」を意味する名詞 (具體形は hochihi) で、人間一人分の指數全體 (手足の指は全部で二十) を云つたものであらう。

92.

21	shine ikashma hotne	60	re-hotne
22	tu ikashma hotne	70	wan-e-ine-hotne
30	wan-e-tu-hotne	80	ine-hotne
40	tu-hotne	90	wan-e-ashikne-hotne
50	wan-e-re-hotne	100	ashikne-hotne

(**注意**)「二十」以上の數では先づその倍數が生じ

tu hotne 「二つの二十」卽ち「四十」($20\times2=40$)

re hotne 「三つの二十」卽ち「六十」($20\times3=60$)

ine hotne「四つの二十」卽ち「八十」($20\times4=80$)

次いでその各々を標準として中間の數が出來るのであつて

wan-e-tu-hotne 「十で二つの二十」卽ち「三十」($20\times2-10=30$)

wan-e-re-hotne 「十で三つの二十」卽ち「五十」($20\times3-10=50$)

wan-e-ine-hotne「十で四つの二十」卽ち「七十」($20\times4-10=70$)

こゝにも減法式の計算が見られる。尙 -e- は「で以て」「があれば」(*Eng. with*) の意味の接辭である。

III. 複 合 形 (名詞形)

93.

1	shinep	11	shinep ikashma wampe
2	tup	20	hot
3	rep	30	wampe-e-tu-hot
4	inep	40	tu-hot
5	ashiknep	50	wampe-e-re-hot
6	iwampe	60	re-hot
7	arwampe	70	wampe-e-ine-hot
8	tupesampe	80	ine-hot
9	shinepesampe	90	wampe-e-ashikne-hot
10	wampe	100	ashikne-hot

(**注意 i**) この形式は無生物にも動物にも人にも用ゐられる:

ainu shinep「人一人」

erum tup 「鼠二匹」

suma rep 「石三個」

(**注意 ii**) 二及び三はその上に尙 -pish をとることがある:

erum tuppish「鼠二匹」

suma reppish「石三個」

-pish はもと「數へる」意味の語根から發してゐる。同じ語根から發したものに次の諸語がある：

kotan *pish*no shirkush.「村ごとに寄る」。(助詞)
u*pish* iwan-sui「皆で六回」(副詞)
*pish*ki「數へる」(動詞)

これに依つて觀れば、上の形式は或は本來「二つづゝ」「三つづゝ」を意味する配分數詞 (*distributives*) であつたかとも思はれるのである。

94.

1	shinen	11	shinen ikashma waniu
2	tun	12	tun ikashma waniu
3	ren	20	hotnen
4	inen	21	shinen ikashma hotnen
5	ashiknen	30	waniu-e-tu-hotnen
6	iwaniu	40	tu-hotnen
7	arwaniu	50	waniu-e-re-hotnen
8	tupesaniu	60	re-hotnen
9	shinepesaniu	70	waniu-e-ine-hotnen
10	waniu	80	ine-hotnen

(注意) この形式は人にのみ用ゐる：

ainu shinen ek.「人が一人來た」。
arwaniu a-ne.「私達は七人です」。

95. 反復數 (*iteratives*) には -sui を用ゐる：

ar-sui	「一回」	iwan-sui	「六回」
tu-sui	「二回」	arwan-sui	「七回」
re-sui	「三回」	tupesan-sui	「八回」
ine-sui	「四回」	wan-sui	「十回」
ashikne-sui	「五回」	hempak-sui	「幾回」

96. 日數を數へるには特別の形式が發達してゐる：

shine-to 「一日」
tutko 「二日」
rerko 「三日」
ine-rerko 「四日」
iwan-rerko 「六日」
hempak-rerko 「幾日」

97. 序數 (*ordinals*) には otutanu を用ゐる：

hoshki 「最初の」
tu-otutanu 「二番目の」
re-otutanu 「三番目の」
ine-otutanu 「四番目の」

IV. 數詞に關する若干の注意

98. iwan「六」はアイヌの神聖數 (*sacred number*)で、極めて屡々「多數」(*many*) の意味を表はす：

iwan kotan o-ush nupuri
六 村 に跨る 山

(「多くの村に跨る山」の意味)

iwan kotan kama hawe a-nu-p?——kakkok.
六 村 越えて 聲の 聞えるもの カツコウ

(「多くの村を越えて遙々聲の聞えて來るもの」の意味)

iwan chikir ush korka ramma ash wa an-pe?——pu.
六 足 あり ながら いつも 立つ て ゐるもの 庫

(「腐るほど多くの足を持ちながら」の意味)

no-iwan となつて更に意味が強調される：

no-iwan-sui「幾回も幾回も」

99. tu「二」及び re「三」も相關聯して *many* の意味を表はすことが多い：

inau tup a-kore rep a-kore.
木幣を 二つ 與へ 三つ 與へた

(「幾つも與へた」の意味)

tu pinnai kama re pinnai kama terke.
二 谷 越え 三 谷 越えて 跳ぶ

(「谷を幾つも跳び越える」の意味)

tu-wan, re-wan ともなる。但し「二十」「三十」の意味ではなくて「十を幾つも」の意味である：

tu-wan wen-itak re-wan wen-itak suipa.
幾 十の 惡 口 幾 百の 惡 口を つく

tu-wan onkami re-wan onkami ukakushte.
幾 十の 拜禮 幾 百の 拜禮を 相重ねる

o-tu, o-re ともなる。意味は同じである：

nishpa mutpe o-tu santuka o-re santuka o-ukauiru.
首領の 佩刀 幾 柄 も 幾 柄 も そこに重つてゐた

100. アイヌ語の名詞は單複を通じて無變化であるが、動詞には單複の別がある。從つて名詞の數は一般にその關係する動詞に於て示される：

ainu an. 「人がゐる」。(*sing.*)

ainu okai.「人々がゐる」。(*pl.*)

ainu ek. 「人が來た」。(*sing.*)

ainu arki.「人々が來た」。(*pl.*)

併し乍ら名詞の數が數詞に於て明かに示されてゐる場合には、特に動詞に於て複數を示す必要がないので、動詞はそのまま單數に止まる：

tu ainu *an.* 「二人の人がゐる」。

ainu *tuppish an.*「人が二人ゐる」。

re ainu *ek.* 「三人の人が來た」。

ainu *reppish ek.*「人が三人來た」。

第V章 動詞

I. 人稱接辭

101. アイヌ語の動詞は常に人稱關係に於て取扱はれる。この人稱關係は人稱接辭 (*personal affixes*) によつて示される。人稱接辭には主格のものと目的格のものとがある：

i) 主格の人稱接辭

	雅語		口語	
	sing.	*pl.*	*sing.*	*pl.*
I.	a- -an } (我)	a- -an } (我等)	ku-	chi- -ash } (*excl.*) a- -an } (*incl.*)
II.	e- (汝)	echi- (汝等)	e- a- -an } (*honor.*)	echi- a- -an } (*honor.*)
III.	— (彼)	— (彼等)	—	—

(**注意** i) 名詞の具體形の場合と同じく何もつかぬ形 (*bare form*) が第 III 人稱で、單複同形である。併し乍ら特に複數なることを明示しようとする時は -pa を接尾させる。kar-pa「彼等が造る」。ki-pa「彼等が爲す」(§ 121)。膽振では稀に -chi を用ゐる。kar-chi。ki-chi。

(**注意** ii) 神謠語法では雅語第 I 人稱單複に chi- を用ゐる。

(**注意** iii) 近文方言では第 II 人稱複數に eshi- を用ゐる。

ii) 目的格の人稱接辭

	雅	語	口	語
	sing.	*pl.*	*sing.*	*pl.*
I.	i- (我に, を)	i- (我等に, を)	en-	un- (*excl.*) i- (*incl.*)
II.	e- (汝に, を)	echi- (汝等に, を)	e- i- (*honor.*)	echi- i- (*honor.*)
III.	— (彼に, を)	— (彼等に, を)	—	—

(**注意**) 神謡語法では雅語第 I 人稱に un- を用ゐる。

II. 第 I 人稱複數形の種々なる語法

1. a- の種々なる語法

102. 汎稱 (*universal person*)。「吾々」「吾々一同」から「人類一般」の意味に：

a-e-p「吾々が食ふもの」「人間が食ふもの」卽ち「食物」
a-mi-p「吾々が着るもの」「人間が着るもの」卽ち「着物」
a-e-ipe-p「吾々がそれで食事するもの」「食器」
a-e-ninui-pe「吾々がそこへ枕するもの」「枕」

103. 不定稱 (*indefinite person*)。「幸ひ住むと人の云ふ」などの「人」に當るが、日本語としては强ひて譯すに及ばない。(*Fr. on, Ger. man*)：

wempe an yak *a*-ye.「不幸があつたさうな」。
hemanta ari *a*-ye-kur「何某とやら申す仁」
ene *a*-kar-i ka isam.「どうしやうもない」。
ene *a*-ye-i ka isam.「どう云ひやうもない」。

104. 中相 (*middle voice*)。動詞の形が他動で意味は自動：

hawehe a-nu korka「その聲は聞えるが、

netopake somo a-nukar. その姿が見えぬ」。

105. 所相 (*passive voice*)。所相は不定稱を動主とする抱合形 (§ 123) を以て示される。すなはち

第 I 人稱は 「(人)我に與ふ」「我(人に)與へらる」
第 II 人稱は 「(人)汝に與ふ」「汝(人に)與へらる」
第 III 人稱は 「(人)彼に與ふ」「彼(人に)與へらる」

の如き構造に於て成立したものである：

i) 雅語の所相活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	a-i-kore「我與へらる」	a-i-kore「我等與へらる」
II.	a-e-kore「汝與へらる」	a-echi-kore「汝等與へらる」
III.	a-kore「彼與へらる」	a-kore「彼等與へらる」

ii) 口語の所相活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	a-en-kore「私與へられる」	a-un-kore「私達與へられる」
II.	a-e-kore「君與へられる」	a-echi-kore「君達與へられる」
III.	a-kore「彼與へられる」	a-kore「彼等與へられる」

(**注意 i**) 膽振(鵡川地方を除く)では抱合的活用に於ける第 I 人稱主格は接尾辭 -an で示されるが (§ 123, 注意 ii) これは所相活用に於ても同樣である：

a-i-kore = i-kore-an「我與へらる」「我等與へらる」(雅語)
a-en-kore = en-kore-an「私與へられる」(口語)
a-un-kore = un-kore-an「私達與へられる」(口語)
a-e-kore = e-kore-an「汝與へらる」(雅語及び口語)
a-echi-kore = echi-kore-an「汝等與へらる」(雅語及び口語)

(**注意 ii**) 神謠語法では第 I 人稱單複に a-un- を用ゐる。

106. 分詞形容詞 (*participial adjective*)。第 II 類の動詞はそのまゝ形容詞として用ゐられるが、第 I 類の動詞は a- を附して用ゐられる：

ekatnu 「嗜好する」 aekatnu 「好ましき」
eoripak 「に畏れる」 aeoripak 「畏れ多き」
shitoma 「を怖れる」 ashitoma 「恐ろしき」

この形式は一般に現在分詞であるが稀には過去分詞の場合もある：

tomte 「飾る」 atomte 「飾つた」(*ornate*)

2. chi-の種々なる語法

107. 汎稱

chi-mi-p 「吾々が着るもの」「着物」
chi-o-ipe-p 「吾々がそれで食事するもの」「食器」
chi-e-ninui-pe 「吾々がそこへ枕するもの」「枕」
chi-nunuke-i 「吾々が大事にする處」「陰部」

108. 中相。

maknaraye 「後へやる」 chi-maknaraye 「後へ行く」
sanasanke 「前へ出す」 chi-sanasanke 「前へ出る」
riknapuni 「上へ上げる」 chi-riknapuni 「上へ上る」
ranaranke 「下へ下げる」 chi-ranaranke 「下へ下る」

これは「自身」を意味する shi- で置換へることが出來る：

chimaknaraye＝shimaknaraye
chisanasanke＝shisanasanke
chiriknapuni＝shiriknapuni
chiranaranke＝shiranaranke

109. 不定稱。アイヌ語の動詞は常にいづれかの人稱に屬すべきであるが、それが所謂 *prolative infinitive* の如き構造に於て用ゐられる時に限り人稱は不定である：——

i) 第 II 類の動詞はそのまゝ用ゐる：

chish a-ki. 「泣くことを我する」。

toiko *irushka* a-ki.「烈しく怒ることを我する」。

mina ka somo a-ki.「笑ふことも我せず」。

koshne *terke* e-ki.「輕やかに跳ぶことを汝する」。

ash poka *a* poka e-eaikap.「立つことも坐ることも汝能くせず」。

rimse neyakka e-ashkai.「踊ることをも汝能くす」。

anramasu e-uwesuye.「好いなあと思ふことを汝する」。

ii) 第 I 類の動詞は chi- を附けて用ゐる:

chi-kosunke a-e-ekarkar.

「欺くことを我(等)汝にする」。

chi-kosunke a-echi-ekarkar.

「欺くことを我(等)汝等にする」。

chi-panakte e-i-ekarkar.

「罰することを汝我(等)にする」。

chi-panakte echi-i-ekarkar.

「罰することを汝等我(等)にする」。

110. 分詞形容詞。

kaye「折る」 chi-kaye (makiri)「折れた(ナイフ)」

perpa「割る」 chi-perpa (ni)「割つた(木)」(「薪」)

nuina「隱す」 chi-nuina (ape)「隱した(火)」(「埋み火」)

この形式は一般に過去分詞であるが稀には現在分詞もある:

omap「愛する」 chi-omap (pompe)「愛らしい(兒)」

3. i- の種々なる語法

111. 主格第 I 人稱單數の a- の代りに用ゐられた例がある:

i-kamiashi ka i-ronronke「私のどこやらがヒクヒク動き、

i-sampehe ka i-hochirkar. 私の心臓もとろけるばかり」

本來 a-kamiashi, a-sampehe とあるべきものが後出の i-ronronke, i-hochirkar に押韻して i-kamiashi, i-sampehe となつたものである。尙 i-ronronke, i-hochirkar はそれぞれ「私にまで痙攣する」「私にまで溶ける」の如き語調で、この場合の i-は所謂 *ethical dative* である。

112. 主格第 III 人稱接頭辭として。第 III 人稱は何も附かぬ形でよいのであるが、稀には i- が用ゐられる。この i- は *expletive* である：

i-yupi＝yupi 「彼の兄」
i-shiki＝shiki「彼の目」
i-teke＝teke 「彼の手」

113. 以上は名詞に附く場合であるが尙動詞にも附いて「それが」の意味を表はす。但しこの場合の「それ」は環境又は慣用によつて相互に了解し得る何物かである。i-pokash (醜い) といふ語は本來「それが劣つてゐる」の意味で、「それ」は此の場合暗默の裡に「容貌」を指してゐる。又 i-o-ikir > iyoikir は本來「それが詰つてゐる列」の意味で、「それ」は暗に寶物のことを指してゐる。尙 iyoikir と同意の語に imoma (> inuma とも) がある。これも本來は i-oma「それが詰つてゐる(所)」の義で、「それ」は矢張寶物のことである。

114. 上來說く所は總べて i- が主格に轉用された場合であるが、それが本來の位置卽ち目的格に用ゐられた場合は當然「それを」の意味になる。例へば i-ku (飲酒する) は本來「それを飲む」の意味で、この場合の「それ」は酒を指してゐる。卽ち i-ku＝sake ku の意味である。尙例を擧げるならば、

i-uta > iyuta「搗きものする」(shito uta「粢を搗く」などの意)。

i-oshke > iyoshke「編み物する」(ya oshke「網を編む」などの意)。

i-ri「皮剝ぎする」(kamui rushi ri「熊の皮を剝ぐ」などの意)。

i-cha「栗穗摘みする」(amam pushi cha「栗の穗を摘む」などの意)。

i-humke「それを子守唄で寢かす」(po humke「兒を子守唄で寢かす」の意)。

更に判然と何を指すといふこともなく、たゞぼんやり「物を」といふやうな意味になつて他動詞を自動詞化するに役立つ:

tak	「招く」	itak	「物語る」
nukar	「見る」	inkar	「見物する」
rara	「からかふ」	irara	「惡戲する」
rushka	「怒る」	irushka	「立腹する」

尙この種の動詞は全部名詞に轉成することが出來る(§ 73):

mi	「着る」	imi	「服裝」
kor	「持つ」	ikor	「寶物」
charpa	「撒く」	icharpa	「酒、煙草、粢等を撒いて祖先に供養する儀式」
omante	「行かせる」	iomante	「靈魂を故地に送り還す儀式」(「熊祭」)

III. 動　詞　の　種　類

115. 動詞はその活用の型によつて三つの種類に分たれる:

第 I 類) 雅語第 I 人稱主格の接辭が接頭 (*prefix*) するもの (a——型)。

目的語乃至補語を要求する動詞——他動詞及び不完全自動詞——が之に屬する。

第 II 類) 雅語第 I 人稱主格の接辭が接尾 (*suffix*) するもの (——an 型)。

目的語乃至補語を要求しない動詞——完全自動詞——が之に屬する。

第 III 類) 雅語第 I 人稱主格の接辭が接中 (*infix*) するもの (——a——型)。

合成動詞の或ものが之に屬する。

116. 他動詞が目的格の語又は接辭と結合してそれ自身に於て意味を完結させ何等目的語乃至補語を要求しなくなると當然第 II 類の活用に從ふ。例へば ku, uta, oshke, raike, nukar, ke 等は本來第 I 類に屬して A の如く活用するが、i-, u-, yai-, inau 等の接辭又は語と結合すると第 II 類に轉じて B の如く活用する:

A) sake *a*-ku. 「酒を我飲む」。
shito *a*-uta. 「粢を我搗く」。
ya *a*-oshke. 「網を我編む」。
chip *a*-nukar. 「舟を我見る」。
seta *a*-raike. 「犬を我殺す」。
inau *a*-ke. 「木幣を我削る」。

B) iku-*an*. 「我飲酒す」。
iyuta-*an*. 「我搗き物す」。
iyoshke-*an*. 「我編み物す」。
unukar-*an*. 「我等會見す」。
yairaike-*an*. 「我自殺す」。
inauke-*an*. 「我木幣削りす」。

117. 完全自動詞も種々の接辭を取つて補語乃至目的語を要求するに到れば第 I 類の活用に從ふ。例へば mina, kira, hoshipi は本來第 II 類に屬して C の如く活用するが、e- (*at, with, to* 等の意味) なる接頭辭を取ると第 I 類に轉じて D の如く活用する：

C) mina-*an*. " *I laugh.*"
kira-*an*. " *I run away.*"
hoshipi-*an*. " *I return.*"

D) *a*-emina. " *I laugh at.......*"
a-ekira. " *I run away with.......*"
a-ehoshipi. " *I return to.......*"

118. 合成動詞は一般に「前綴＋他動詞」の形に於て成立してゐるが、アイヌ語の合成動詞に於ける前綴は名詞に限られ、且つそれらは後續の他動詞に對して目的語の關係に立つてゐる。目的語を要求する動詞は總べて第 I 類に屬し、第 I 人稱主格の接辭は接頭するのが原則である。然るにもと獨立の目的語であつたものが、漸次動詞との結合の度を强めて行つて遂には前綴と化しながら、一方の動詞に就てはなほ第 I 類であるとの意識が殘つてゐる爲に、人稱接辭は合成動詞の語頭に來ずに他動詞の語頭へ來る。これが外から見れば「接中」の現象となるのである。卽ち文法が未だ論理を征服し切れない段階に立つもので、その征服が完成してしまへば、この類の合成動詞は第 I 類に還つて人稱接辭は合成動詞の語頭へ來る。例へば etok(o)-tuye「妨げる」、tom(o)-oitak「なだめる」は第 III 類であるが、tom(o)-tuye「横斷する」は第 I 類に屬して " Nupurpet *a*-tomotuye wa ek-an "「登別川を横切つて俺は來た」の如く活用する。

IV. 動 詞 の 活 用

1. 第 I 類動詞の活用

119. 主格活用 (*subjective conjugation*):

i) 雅語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	a-kor「我もつ」	a-kor「我等もつ」
II.	e-kor「汝もつ」	echi-kor「汝等もつ」
III.	kor「彼もつ」	kor「彼等もつ」

ii) 口語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ku-kor	chi-kor (*excl.*) a-kor (*incl.*)
II.	e-kor a-kor (*honor.*)	echi-kor a-kor (*honor.*)
III.	kor kor-pa (*honor.*)	kor kor(-pa)-pa (*honor.*)

(**注意 i**) 上のは他動詞の活用であるが、不完全自動詞 (例へば「に成る」意味の動詞 ne) の活用も全く同じである:—

i) 雅語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	a-ne, "*I become*"	a-ne, "*we become*"
II.	e-ne, "*thou becomest*"	echi-ne, "*ye become*"
III.	ne, "*he (she, it) becomes*"	ne, "*they become*"

ii) 口語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ku-ne	chi-ne (*excl.*) a-ne (*incl.*)
II.	e-ne a-ne (*honor.*)	echi-ne a-ne (*honor.*)
III.	ne ne-pa (*honor.*)	ne ne (-pa)-pa (*honor.*)

(**注意 ii**) この類に屬するものに次の諸動詞がある:——
ama, anu, are, ante (以上「置く」), ashi「立てる」, uitek「召使ふ」, unu「歛める」, uta「搗く」, e「食ふ」, ye「云ふ」, eiwanke「使用する」, eihok「賣る」, o「乘る」, omap「愛する」, oira「忘れる」, osura「捨てる」, kar「造る」, kaye「折る」, ki「爲す」, kik「打つ」, ku「飲む」, ta「汲む」, kokanu「聽く」, nu「聞く」, nuina「隱す」, nukar「見る」, nomi「祈る」, puni「持上げる」, ma「燒く」, mi「着る」, raike「殺す」, ri「剝ぐ」, rishpa「毟る」, ruki「嚥下する」, rewe「曲げる」, resu「育てる」, haita「外づす」, hewe「傾ける」, hok「買ふ」, hoppa「殘す」, 等々。

120. 目的格活用 (*objective conjugation*):

i) 雅語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	i-kore「我に與ふ」	i-kore「我等に與ふ」
II.	e-kore「汝に與ふ」	echi-kore「汝等に與ふ」
III.	kore「彼に與ふ」	kore「彼等に與ふ」

(**注意**) 主格を示すべき人稱辭のない場合は第 III 人稱である。從つて
i-kore には　(1) *He (she, it) gives me (us).*
　　　　　　(2) *They give me (us).*
e-kore には　(3) *He (she, it) gives thee.*
　　　　　　(4) *They give thee.*
echi-kore には (5) *He (she, it) gives you.*

(6) *They give you.*

kore には (7) *He (she, it) gives him (her, it, them).*

(8) *They give him (her, it, them).*

等の場合がある。但し第 II 人稱ではたまたま主格と目的格とが同形であるから

e-kore には (9) *Thou givest him (her, it, them).*

echi-kore には (10) *Ye give him (her, it, them).*

等の場合もあること勿論である。

ii) 口語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	en-kore	un-kore (*excl.*) i-kore (*incl.*)
II.	e-kore i-kore (*honor.*)	echi-kore i-kore (*honor.*)
III.	kore	kore

121. 目的物複數法。

目的物複數法は語幹に -pa を添へる。但しその際語幹の性質によつて多少の變化を生ずることがある：

(1) 他動詞の語幹 (*stem*) は大抵

語根 (*root*)＋形成素 (*formant*)

の形式に於て成立してゐる。この形成素が母音（悉く獨立性を有せず）の時は、それを落して -pa を添へる：——

(他動詞幹)		(自動詞幹)	(目的物複數)
kaye (折る)	[kai＋e]	kai (折れる)	kai-pa
kiru (轉ずる)	[kir＋u]		kir-pa
komo (折曲げる)	[kom＋o]	kom-ke (曲げる)	kom-pa
kote (結び付ける)	[kot＋e]	kot (附く)	kot-pa
suye (振る)	[sui＋e]	(sui「回」)	sui-pa
soso (剝ぐ)	[sos＋o]		sos-pa

tuku（突出す）	[tuk+u]	tuk（出る）	tuk-pa
turi（伸ばす）	[tur+i]		tur-pa
tuye（切る）	[tui+e]	tui（斷れる）	tui-pa
teye（押潰す）	[tei+e]	tei-ke（崩れる）	tei-pa
tesu（反らす）	[tes+u]	tes-ke（反る）	tes-pa
chari（撒く）	[char+i]	char-ke（散らばる）	char-pa
chupu（つぼめる）	[chup+u]	chup-ke（つぼむ）	chup-pa
nini（曳く）	[nin+i]		nin-pa
numu（瀝す）	[num+u]	(num「粒」)	num-pa
nuku（しやぶる）	[nuk+u]		nuk-pa
nuye（彫刻する）	[nui+e]		nui-pa
noye（綯ふ）	[noi+e]	noi-ke（綟れる）	noi-pa
patu（はねかす）	[pat+u]	pat-ke（はねる）	pat-pa
piru（拭ふ）	[pir+u]		pir-pa
puni（持上げる）	[pun+i]		pun-pa
pusu（押出す）	[pus+u]		pus-pa
pere（割る）	[per+e]	per-ke（割れる）	per-pa
petu（裂く）	[pet+u]	pet-ke（裂ける）	pet-pa
poso（とほす）	[pos+o]		pos-pa
poye（まぜる）	[poi+e]	poi-ke（まじる）	poi-pa
maka（開ける）	[mak+a]	mak-ke（開く）	mak-pa
muye（束ねる）	[mui+e]	(mui「束」)	mui-pa
mesu（もぐ）	[mes+u]	mes-ke（もげる）	mes-pa
mewe（缺き碎く）	[meu+e]	meu-ke（かける）	meu-pa
moso（覺ます）	[mos+o]	mos（覺める）	mos-pa
yaku（潰す）	[yak+u]	yak（潰れる）	yak-pa
yasa（裂く）	[yas+a]	yas-ke（裂ける）	yas-pa
yupu（緊める）	[yup+u]	yup-ke（強い）	yup-pa

yomo (縮める)	[yom+o]	yom-ke (縮れる)	yom-pa
rari (落着ける)	[rar+i]		rar-pa
raye (殺す)	[rai+e]	rai (死ぬ)	rai-pa
ruki (嚥下する)	[ruk+i]		ruk-pa
rutu (押す)	[rut+u]	(rut-ke「談判する」)	rut-pa
resu (育てる)	[res+u]	(res-ke「育てる」)	res-pa
rewe (曲げる)	[reu+e]	reu-ke (曲がる)	reu-pa
rori (沈める)	[ror+i]		ror-pa
hewe (傾ける)	[heu+e]	heu-ke (傾く)	heu-pa
ani (持つ)	[an+i]	an (ある)	an-pa
etaye (引く)	[e-tai+e]		etai-pa
ohetu (こぼす)	[o-het+u]	ohet-ke (こぼれる)	ohet-pa
osura (捨てる)	[o-sur+a]		osur-pa

(2) 形成素が獨立性を有する接尾辭又は語尾なる時はそのまま -pa を添へる:

tukka「生やす」	[tuk+ka]	tuk「生える」	tukka-pa
satke「乾かす」	[sat+ke]	sat「乾く」	satke-pa
nure「聞かす」	[nu+re]	nu「聞く」	nure-pa
ette「よこす」	[ek+te]	ek「來る」	ette-pa

(3) 語根の母音は落ちない。從つて單音節の語は語幹が語根であるから、其儘 -pa を添へる:

ki (爲す) > ki-pa ; ku (飲む) > ku-pa ; ke (削る) > ke-pa ; se (負ふ) > se-pa ; ta (汲む) > ta-pa ; cha (斬る) > cha-pa ; ni (啜る) > ni-pa ; nu (聞く) > nu-pa ; ma (炙る) > ma-pa ; mi (着る) > mi-pa ; ye (云ふ) > ye-pa ; ri (剝ぐ) > ri-pa, *etc.*

(4) 二音節以上の語でも語根に屬し又は屬すと意識せられる母音は落ちない:

kupa (銜へる) > kupa-pa ; kusa (舟で渡す) > kusa-pa ;

tura (伴ふ) > tura-pa ; ramu (思ふ) > ramu-pa, *etc.*

この最後の例は“$\sqrt{\text{ram}}$(心)+u”で、落ちてもよい母音であるが、全體が一つの語根と意識せられた爲に落ちないのである。また kari (廻す) といふ他動詞は“$\sqrt{\text{kar}}$+i”と意識せられる時は kar-pa となり、$\sqrt{\text{kari}}$ と意識せられる時は kari-pa 又は kari-m-pa となる。*e.g.* shi-karimpa「自身をたんと廻す」卽ち「ぐるぐる廻る」。

(5) 子音で終る語は其儘 -pa を添へる。但しアイヌ語の他動詞の大部分は自動詞から派生したもので、本來の他動詞と見られるものは至つて少い。且つその大多數は開音節に終る語で、子音に終る他動詞は極めて稀であり、その子音も k, r, t 等數種に限られてゐる：

uitek (召使ふ) > uitek-pa ; kik (打つ) > kik-pa ;
nisuk (賴む) > nisuk-pa ; hok (買ふ) > hok-pa ;
nukar (見る) > nukar-pa ; mut (佩びる) > mut-pa, *etc.*

(6) 自動詞から派生したものに在つてはその動主複數形 (§ 124–128) を其儘他動詞化して用ゐる：

ahun (入る)	ahup (*pl.*)	ahunke (入れる)	ahupte (*pl.*)
ashin (出る)	aship (*pl.*)	ashinke (出す)	ashipte (*pl.*)
kar (作る)	karpa (*pl.*)	kare (造らす)	karpare (*pl.*)
kor (持つ)	korpa (*pl.*)	kore (持たす)	korpare (*pl.*)
oman (行く)	paye (*pl.*)	omante (やる)	payere (*pl.*)

(7) 單複によつて語幹を異にする他動詞が稀にある：

uk (取る)	uina (*pl.*)
raike (殺す)	ronnu (*pl.*)

122. 目的複數法の -pa は

(1) 主語の複數をも示す：——

kor-pa「澤山持つ」「大勢が持つ」(*they have*)。
大勢で持てば結局澤山持つことになる。

(2) 敬相として用ゐられる:—
一つ持つても澤山持つてゐるかの如く云ひなすことが美稱であつた。

kor-pa.「あの方がお持ちになる」。

nukar-pa.「あの方が御覽になる」。

尙複數の -pa と敬相の -pa とが重用せられた際は後のが敬相である。

kor-pa-pa.「澤山お持ちになる」。

nukar-pa-pa.「澤山御覽になる」。

123. 抱合的活用 (*incorporating conjugation*):

i) 雅語の活用

I.[sing.] ⟶ II.[sing.]	a-e-kore	(我　汝に與ふ)	e-kore-an	(膽振)
I.[sing.] ⟶ II.[pl.]	a-echi-kore	(我　汝等に與ふ)	echi-kore-an	(膽振)
I.[pl.] ⟶ II.[sing.]	a-e-kore	(我等　汝に與ふ)	e-kore-an	(膽振)
I.[pl.] ⟶ II.[pl.]	a-echi-kore	(我等汝等に與ふ)	echi-kore-an	(膽振)
I.[sing.] ⟶ III.[sing.]	a-kore	(我　彼に與ふ)		
I.[sing.] ⟶ III.[pl.]	a-kore	(我　彼等に與ふ)		
I.[pl.] ⟶ III.[sing.]	a-kore	(我等　彼に與ふ)		
I.[pl.] ⟶ III.[pl.]	a-kore	(我等彼等に與ふ)		

II.[sing.] ⟶ I.[sing.]	e-i-kore	(汝　我に與ふ)
II.[sing.] ⟶ I.[pl.]	e-i-kore	(汝　我等に與ふ)

II. (pl.) ⟶	I. (sing.)	echi-i-kore	(汝等　我に與ふ)
II. (pl.) ⟶	I. (pl.)	echi-i-kore	(汝等我等に與ふ)
II. (sing.) ⟶	III. (sing.)	e-kore	(汝　　彼に與ふ)
II. (sing.) ⟶	III. (pl.)	e-kore	(汝　彼等に與ふ)
II. (pl.) ⟶	III. (sing.)	echi-kore	(汝等　彼に與ふ)
II. (pl.) ⟶	III. (pl.)	echi-kore	(汝等彼等に與ふ)

III. (sing.) ⟶	I. (sing.)	i-kore	(彼　　我に與ふ)
III. (sing.) ⟶	I. (pl.)	i-kore	(彼　我等に與ふ)
III. (pl.) ⟶	I. (sing.)	i-kore	(彼等　我に與ふ)
III. (pl.) ⟶	I. (pl.)	i-kore	(彼等我等に與ふ)
III. (sing.) ⟶	II. (sing.)	e-kore	(彼　　汝に與ふ)
III. (sing.) ⟶	II. (pl.)	echi-kore	(彼　汝等に與ふ)
III. (pl.) ⟶	II. (sing.)	e-kore	(彼等　汝に與ふ)
III. (pl.) ⟶	II. (pl.)	echi-kore	(彼等汝等に與ふ)

(**注意 i**) 「我が我に與ふ」「汝が汝に與ふ」「彼が彼に與ふ」の關係は再歸動詞によつて表はされる:——

irushka keutum a-yai-kore「怒りの情を我自身に與ふ」「怒りの情を我もつ」

ihoma keutum e-yai-kore「憐愍の情を汝自身に與ふ」「憐愍の情を汝もつ」

rayap keutum yai-kore「感嘆の情を彼自身に與ふ」「感嘆の情を彼もつ」

(**注意** ii) 膽振(鵡川地方を除く)では抱合的活用に於ける第一人稱主格は接尾辭 -an で示される:——

a-e-kore = e-kore-an「我汝に與ふ」「我等汝に與ふ」

a-echi-kore = echi-kore-an「我汝等に與ふ」「我等汝等に與ふ」

これは § 116 に述べたものに對する類推である。

(**注意** iii) 樺太方言の抱合的活用形(雅語並に口語)は次の如くである:——

I. *sing.* ——→ II. *sing.*	an-e-konte	(我　汝に與ふ)
I. *sing.* ——→ II. *pl.*	an-echi-konte	(我　汝等に與ふ)
I. *pl.* ——→ II. *sing.*	an-e-konte	(我等　汝に與ふ)
I. *pl.* ——→ II. *pl.*	an-echi-konte	(我等汝等に與ふ)
II. *sing.* ——→ I. *sing.*	e-i(n)-konte	(汝　我に與ふ)
II. *sing.* ——→ I. *pl.*	e-i(n)-konte	(汝　我等に與ふ)
II. *pl.* ——→ I. *sing.*	echi-i(n)-konte	(汝等　我に與ふ)
II. *pl.* ——→ I. *pl.*	echi-i(n)-konte	(汝等我等に與ふ)

ii) 口語の活用

I. *sing.* ——→ II. *sing.*	echi-kore	e-kore-ash	(膽振)
I. *sing.* ——→ II. *pl.*	echi-kore	echi-kore-ash	
I. *pl.* ——→ II. *sing.*	echi-kore	e-kore-ash	
I. *pl.* ——→ II. *pl.*	echi-kore	echi-kore-ash	
I. *sing.* ——→ II. *sing.(hon.)*	ku-i-kore	i-kore-ash	
I. *sing.* ——→ II. *pl.(hon.)*	ku-i-kore	i-kore-ash	
I. *pl.* ——→ II. *sing.(hon.)*	chi-i-kore	i-koré-ash	
I. *pl.* ——→ II. *pl.(hon.)*	chi-i-kore	i-kore-ash	

I. (*sing.*) ⟶ III. (*sing.*)	ku-kore
I. (*sing.*) ⟶ III. (*pl.*)	ku-kore
I. (*pl.*) ⟶ III. (*sing.*)	chi-kore
I. (*pl.*) ⟶ III. (*pl.*)	chi-kore
I. (*pl.(incl.)*) ⟶ III. (*sing.*)	a-kore
I. (*pl.(incl.)*) ⟶ III. (*pl.*)	a-kore
II. (*sing.*) ⟶ I. (*sing.*)	e-en-kore
II. (*sing.*) ⟶ I. (*pl.*)	e-un-kore
II. (*pl.*) ⟶ I. (*sing.*)	echi-en-kore
II. (*pl.*) ⟶ I. (*pl.*)	echi-un-kore
II. (*sing.(hon.)*) ⟶ I. (*sing.*)	a-en-kore
II. (*sing.(hon.)*) ⟶ I. (*pl.*)	a-un-kore
II. (*pl.(hon.)*) ⟶ I. (*sing.*)	a-en-kore
II. (*pl.(hon.)*) ⟶ I. (*pl.*)	a-un-kore
II. (*sing.*) ⟶ III. (*sing.*)	e-kore
II. (*sing.*) ⟶ III. (*pl.*)	e-kore
II. (*pl.*) ⟶ III. (*sing.*)	echi-kore
II. (*pl.*) ⟶ III. (*pl.*)	echi-kore
II. (*sing.(hon.)*) ⟶ III. (*sing.*)	a-kore

II. *sing.(hon.)*	——→ III. *pl.*	a-kore
II. *pl.(hon.)*	——→ III. *sing.*	a-kore
II. *pl.(hon.)*	——→ III. *pl.*	a-kore
III. *sing.*	——→ I. *sing.*	en-kore
III. *sing.*	——→ I. *pl.(excl.)*	un-kore
III. *sing.*	——→ I. *pl (incl.)*	i-kore
III. *pl.*	——→ I. *sing.*	en-kore
III. *pl.*	——→ I. *pl.(excl.)*	un-kore
III. *pl.*	——→ I. *pl.(incl.)*	i-kore
III. *sing.*	——→ II. *sing.*	e-kore
III. *sing.*	——→ II. *pl.*	echi-kore
III. *pl.*	——→ II. *sing.*	e-kore
III. *pl.*	——→ II. *pl.*	echi-kore
III. *sing.*	——→ II. *sing.(hon.)*	i-kore
III. *sing.*	——→ II. *pl.(hon.)*	i-kore
III. *pl.*	——→ II. *sing.(hon.)*	i-kore
III. *pl.*	——→ II. *pl.(hon.)*	i-kore

(注意 i) 日高及び膽振の鵡川地方では第 I 人稱を動主とする抱合形は崩れて次の場合を悉く echi-kore で代用する：——

I. *sing.*	——→ II. *sing.*	echi-kore	(私　お前にやる)

I.$\xrightarrow{}$II. (*sing.* → *pl.*)	echi-kore	(私　お前達にやる)
I.$\xrightarrow{}$II. (*pl.* → *sing.*)	echi-kore	(私達　お前にやる)
I.$\xrightarrow{}$II. (*pl.* → *pl.*)	echi-kore	(私達お前達にやる)

(**注意 ii**) 膽振(鵡川地方を除く)では口語に於ける抱合的活用の第 I 人稱主格は接尾辭 -ash で表はされる :——

I.$\xrightarrow{}$II. (*sing.* → *sing.*)	e-kore-ash	(私　　お前にやる)
I.$\xrightarrow{}$II. (*sing.* → *pl.*)	echi-kore-ash	(私　お前達にやる)
I.$\xrightarrow{}$II. (*pl.* → *sing.*)	e-kore-ash	(私達　お前にやる)
I.$\xrightarrow{}$II. (*pl.* → *pl.*)	echi-kore-ash	(私達お前達にやる)
I.$\xrightarrow{}$II. (*sing.* → *sing.*(*hon.*))	i-kore-ash	(私　　あなたに上げる)
I.$\xrightarrow{}$II. (*sing.* → *pl.*(*hon.*))	i-kore-ash	(私　あなた方に上げる)
I.$\xrightarrow{}$II. (*pl.* → *sing.*(*hon.*))	i-kore-ash	(私達　あなたに上げる)
I.$\xrightarrow{}$II. (*pl.* → *pl.*(*hon.*))	i-kore-ash	(私達あなた方に上げる)

2. 第 II 類動詞の活用

(a) 第 II 類第 i 種活用

124. 第 II 類動詞の内、單複を通じて語幹の變らないものを第 i 種とする。その全活用は次の如くである :——

i) 雅語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	itak-an「我云ふ」	itak(-pa)-an「我等云ふ」
II.	e-itak「汝云ふ」	echi-itak(-pa)「汝等云ふ」
III.	itak「彼云ふ」	itak(-pa)「彼等云ふ」

ii) 口語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ku-itak	itak(-pa)-ash (*excl.*) itak(-pa)-an (*incl.*)
II.	e-itak itak-an (*honor.*)	echi-itak(-pa) itak(-pa)-an (*honor.*)
III.	itak itak-pa (*honor.*)	itak(-pa) itak(-pa)-pa (*honor.*)

(注意) この種の活用をなすものに次の諸動詞がある :——
ak「矢を射る」, arka「痛む」, isu「生きる」, ipe「食事する」, ihoshki「醉ふ」, uimam「交易する」, uekot「情死する」, uepe「親交する」, uwokok「吃る」, uwosurpa「夫婦別れする」, ekimne「山狩に行く」, ese「諾す」, eshna「嚏する」, ewonne「顔や手を洗ふ」, okuima「小便する」, osoma「大便する」, onne「老死する」, opke「放屁する」, omke「しはぶく」, oripak「畏れる」, kira「逃げる」, shini「憩ふ」, shinu「膝行する」, shinot「遊ぶ」, sukup「成長する」, sush「沐浴する」, soine「外へ出る」, takar「夢見る」, tarap「同」, tóri「逗留する」, tasum「病む」, tapkar「踏舞する」, tusu「巫術を使ふ」, terke「跳ぶ」, topse「唾棄する」, nina「焚木こる」, nimu「木登する」, nisomap「案じ煩ふ」, nuwap「呻吟する」, pash「駈ける」, pokor「出産する」, ma「泳ぐ」, mina「笑ふ」, mokor「眠る」, monraike「働く」, mosh「覺める」, wakata「水を汲む」, yáiraike「自殺する」, yaíraike「感謝する」, yaiko-puntek「喜ぶ」, yaske「洗面する」, yastoma「愧ぢる」, yayapapu「詫びる」, yayashish「悔む」, yomne「懲りる」, rai「死ぬ」, rimse「踊る」, hayok「武裝する」, hachir「墜落する」, hokush「仆れる」, honkor「妊娠する」, hotke「寢る」, 等。

(b) 第 II 類第 ii 種活用

125. 第 II 類動詞の內、單複により語幹を異にし、複數語

幹は單數語幹の末尾の母音を除いて -pa を附するものを第 ii 種とする。その全活用は次の如くである：

i) 雅語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	hoshipi-an「我歸る」	hoshippa-an「我等歸る」
II.	e-hoshipi「汝歸る」	echi-hoshippa「汝等歸る」
III.	hoshipi「彼歸る」	hoshippa「我等歸る」

ii) 口語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ku-hoshipi	hoshippa-ash (*excl.*) hoshippa-an (*incl.*)
II.	e-hoshipi hoshippa-an (*honor.*)	echi-hoshippa hoshippa-an (*honor.*)
III.	hoshipi hoshippa (*honor.*)	hoshippa hoshippa-pa (*honor.*)

126. この種に屬する動詞は總べて § 121 (1) に列擧した類の他動詞を根詞とする複合の動詞である：——

(單數語幹)			(複數語幹)
heashi (始まる)	he (額を)	ashi < ash + i (立てる)	heashpa
oashi (同上)	o (尻を)	ashi < ash + i (立てる)	oashpa
hechaka (晴れる)	he (額を)	chaka < chak + a (ひらく)	hechakpa
hochaku (下痢する)	ho (尻を)	chaku < chak + u (?)	hochakpa
hechawe (弓銃等が發出する)	he (額を)	chawe < chau + e (解く)	hechaupa
hehewe (覗く)	he (額を)	hewe < heu + e (傾ける)	heheupa
shikari (廻る)	shi (自身を)	kari < kar + i (廻す)	shikarpa

hekatu （生れる）	he （顔を）	katu < kat + u （形造る）	hekatpa
hekiru （そつぽを向く）	he （顔を）	kiru < kir + u （轉ずる）	hekirpa
shikiru （向き變へる）	shi （自身を）	kiru < kir + u （轉ずる）	shikirpa
hekomo （歸る）	he （顔を）	komo < kom + o （曲げる）	hekompa
hekote （仕へる）	he （顔を）	kote < kot + e （結ぶ）	hekotpa
hematu （撥ね上る）	he （顔を）	matu < mat + u （擧げる）	hematpa
homatu （喫驚する）	ho （尻を）	matu < mat + u （擧げる）	homatpa
hemesu （登る）	he （顔を）	mesu < mes + u （もぐ）	hemespa
shimoye （搖れ動く）	shi （自身を）	moye < moi + e （動かす）	shimoipa
henene （つつかけて行く）	he （顔を）	nene < nen + e （向ける）	henempa
henoye （曲る）	he （顔を）	noye < noi + e （捩る）	henoipa
honoye （尻を振つて歩く）	ho （尻を）	noye < noi + e （捩る）	honoipa
hepeku （燃える）	he （顔を）	peku < pek + u （？）	hepekpa
hepita （發出する）	he （顔を）	pita < pit + a （解く）	hepitpa
hopita （走る）	ho （尻を）	pita < pit + a （解く）	hopitpa
hepoki （俯く）	he （顔を）	poki < pok + i （下げる）	hepokpa
hepuni （顔を擧げる）	he （顔を）	puni < pun + i （上げる）	hepunpa
hopuni （起つ）	ho （尻を）	puni < pun + i （上げる）	hopunpa
horari （住む）	ho （尻を）	rari < rar + i （落つける）	horarpa

horipi (踊る)	ho ripi < rip+i (尻を)(上げる)	horippa
horatu (ずれ落る)	ho ratu < rat+u (尻を)(下げる)	horatpa
hesuye (顔を振る)	he suye < sui+e (顔を)(振る)	hesuipa
hosari (振向く)	ho sari < sar+i (尻を)(?)	hosarpa
harupere (みのり過ぎて皮が破れる)	haru pere < per+e (肉を)(破る)	haruperpa
shiseipere (蟬脱する)	shi sei pere < per+e (自ら)(殻を)(破る)	shiseiperpa
hetari (顔を擧げる)	he tari < tar+i (顔を)(上げる)	hetarpa
hotari (仆れる)	ho tari < tar+i (尻を)(上げる)	hotarpa
hetuku (生ずる)	he tuku < tuk+u (顔を)(突出す)	hetukpa
hotuku (かゞむ)	ho tuku < tuk+u (尻を)(突出す)	hotukpa
hotuye (叫ぶ)	ho tuye < tui+e (尻を)(切る)	hotuipa
hoyupu (走る)	ho yupu < yup+u (尻を)(緊める)	hoyuppa
shiyupu (いきむ)	shi yupu < yup+u (自身を)(緊める)	shiyuppa
shinewe (訪ねる)	shi newe < neu+e (自身を)(?)	shineupa

(c) 第 II 類第 iii 種活用

127. 第 II 類動詞の内、單數語幹が n に終つて複數語幹が p に終るものを第 iii 種とする。その活用は次の如くである:——

i) 雅語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ahun-an「我入る」	ahup-an「我等入る」
II.	e-ahun「汝入る」	echi-ahup「汝等入る」
III.	ahun「彼入る」	ahup「彼等入る」

ii) 口語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ku-ahun	ahup-ash (*excl.*) ahup-an (*incl.*)
II.	e-ahun ahup-an (*honor.*)	echi-ahup ahup-an (*honor.*)
III.	ahun ahup (*honor.*)	ahup ahup-pa (*honor.*)

(注意) この種の活用をなすものに次の諸動詞がある:——
ashin, aship (外へ出る)。san, sap (前へ出る)。ran, rap (降る)。rikin, rikip (昇る)。yan, yap (上陸する)。

(d) 第 II 類第 iv 種活用

128. 第 II 類動詞の內、單複の語幹が全く異るものを第 iv 種とする。その活用は次の如くである:——

i) 雅語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	an-an「我在り」	oka-an「我等在り」
II.	e-an「汝在り」	echi-oka「汝等在り」
III.	an「彼在り」	oka「彼等在り」

(注意) 膽振(鵡川地方を除く)では複數語幹に okai を用ゐる。

ii) 口語の活用

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ku-an	oka-ash (*excl.*) oka-an (*incl.*)
II.	e-an oka-an (*honor.*)	echi oka oka-an (*honor.*)
III.	an oka (*honor.*)	oka oka-pa (*honor.*)

(注意) この種の活用をなすものに次の諸動詞がある:――
ek > arki (來る)。oman, arpa* > paye (行く)。a > rok (坐る)。
ash > roshki (立つ)。un > ush (附いてゐる)。

尚複數としてのみ存在する動詞に at, ot がある。これらは通常第 III 人稱にのみ用ゐられる:――
ainu at.「人が澤山居る」。
chep ot.「魚が澤山居る」。

(e) 形容詞の活用

129. アイヌ語に於ける動詞と形容詞の差は紙一重で、意味上前者は主として動作を表はすのに對して後者は屬性を表はし、機能上後者に命令法がないといふだけで、形態上には何等の區別がない。形容詞が人格に關係して人稱をとる時の活用は動詞の第 II 類と全く一致して次の如くなる:――

i) 雅語に於て

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	wen-an「我惡し」	wen-an「我等惡し」
II.	e-wen「汝惡し」	echi-wen「汝等惡し」
III.	wen「彼惡し」	wen「彼等惡し」

ii) 口語に於て

	(*sing.*)	(*pl.*)
I.	ku-wen	wen-ash (*excl.*) wen-an (*incl.*)
II.	e-wen wen-an (*honor.*)	echi-wen wen-an (*honor.*)
III.	wen wen-pa (*honor.*)	wen wen-pa (*honor.*)

* arpa は日高方言に限り、その他の地方では專ら oman が用ゐられる。

3. 第 III 類動詞の活用

(a) 第 III 類第 i 種の活用

130. 第 III 類の動詞に於ては主格の人稱接辭は全部接中し、目的格の人稱接辭のみ接頭する。次にその抱合的活用を掲げる:——

i) 雅語の活用

I. *sing.* ⟶ II. *sing.*	e-par(o)-a-oiki	(我　　汝を養ふ)
I. *sing.* ⟶ II. *pl.*	echi-par(o)-a-oiki	(我　汝等を養ふ)
I. *pl.* ⟶ II. *sing.*	e-par(o)-a-oiki	(我等　汝を養ふ)
I. *pl.* ⟶ II. *pl.*	echi-par(o)-a-oiki	(我等汝等を養ふ)
I. *sing.* ⟶ III. *sing.*	paro-a-oiki	(我　　彼を養ふ)
I. *sing.* ⟶ III. *pl.*	paro-a-oiki	(我　彼等を養ふ)
I. *pl.* ⟶ III. *sing.*	paro-a-oiki	(我等　彼を養ふ)
I. *pl.* ⟶ III. *pl.*	paro-a-oiki	(我等彼等を養ふ)

II. *sing.* ⟶ I. *sing.*	i-par(o)-e-oiki	(汝　　我を養ふ)
II. *sing.* ⟶ I. *pl.*	i-par(o)-e-oiki	(汝　我等を養ふ)
II. *pl.* ⟶ I. *sing.*	i-par(o)-echi-oiki	(汝等　我を養ふ)
II. *pl.* ⟶ I. *pl.*	i-par(o)-echi-oiki	(汝等我等を養ふ)
II. *sing.* ⟶ III. *sing.*	paro-e-oiki	(汝　　彼を養ふ)
II. *sing.* ⟶ III. *pl.*	paro-e-oiki	(汝　彼等を養ふ)

II.$^{pl.}$ ⟶ III.$^{sing.}$	paro-echi-oiki	(汝等　彼を養ふ)
II.$^{pl.}$ ⟶ III.$^{pl.}$	paro-echi-oiki	(汝等彼等を養ふ)
III.$^{sing.}$ ⟶ I.$^{sing.}$	i-par(o)-oiki	(彼　　我を養ふ)
III.$^{sing.}$ ⟶ I.$^{pl.}$	i-par(o)-oiki	(彼　我等を養ふ)
III.$^{pl.}$ ⟶ I.$^{sing.}$	i-par(o)-oiki	(彼等　我を養ふ)
III.$^{pl.}$ ⟶ I.$^{pl.}$	i-par(o)-oiki	(彼等我等を養ふ)
III.$^{sing.}$ ⟶ II.$^{sing.}$	e-par(o)-oiki	(彼　　汝を養ふ)
III.$^{sing.}$ ⟶ II.$^{pl.}$	echi-par(o)-oiki	(彼　汝等を養ふ)
III.$^{pl.}$ ⟶ II.$^{sing.}$	e-par(o)-oiki	(彼等　汝を養ふ)
III.$^{pl.}$ ⟶ II.$^{pl.}$	echi-par(o)-oiki	(彼等汝等を養ふ)

ii) 口語の活用

I.$^{sing.}$ ⟶ II.$^{sing.}$	e-par(o)-ku-oiki
I.$^{sing.}$ ⟶ II.$^{pl.}$	echi-par(o)-ku-oiki
I.$^{pl.}$ ⟶ II.$^{sing.}$	e-par(o)-chi-oiki
I.$^{pl.}$ ⟶ II.$^{pl.}$	echi-par(o)-chi-oiki
I.$^{sing.}$ ⟶ II.$^{sing.(hon.)}$	i-par(o)-ku-oiki
I.$^{sing.}$ ⟶ II.$^{pl.(hon.)}$	i-par(o)-ku-oiki
I.$^{pl.}$ ⟶ II.$^{sing.(hon.)}$	i-par(o)-chi-oiki
I.$^{pl.}$ ⟶ II.$^{sing.(hon.)}$	i-par(o)-chi-oiki
I.$^{sing.}$ ⟶ III.$^{sing.}$	paro-ku-oiki

I. *sing.* ⟶ III. *pl.*	paro-ku-oiki
I. *pl.* ⟶ III. *sing.*	paro-chi-oiki
I. *pl.* ⟶ III. *pl.*	paro-chi-oiki
I. *pl.(incl.)* ⟶ III. *sing.*	paro-a-oiki
I. *pl.(incl.)* ⟶ III. *pl.*	paro-a-oiki
II. *sing.* ⟶ I. *sing.*	en-par(o)-e-oiki
II. *sing.* ⟶ I. *pl.*	un-par(o)-e-oiki
II. *pl.* ⟶ I. *sing.*	en-par(o)-echi-oiki
II. *pl.* ⟶ I. *pl.*	un-par(o)-echi-oiki
II. *sing.(hon.)* ⟶ I. *sing.*	en-par(o)-a-oiki
II. *sing.(hon.)* ⟶ I. *pl.*	un-par(o)-a-oiki
II. *pl.(hon.)* ⟶ I. *sing.*	en-par(o)-a-oiki
II. *pl.(hon.)* ⟶ I. *pl.*	un-par(o)-a-oiki
II. *sing.* ⟶ III. *sing.*	paro-e-oiki
II. *sing.* ⟶ III. *pl.*	paro-e-oiki
II. *pl.* ⟶ III. *sing.*	paro-echi-oiki
II. *pl.* ⟶ III. *pl.*	paro-echi-oiki
II. *sing.(hon.)* ⟶ III. *sing.*	paro-a-oiki
II. *sing.(hon.)* ⟶ III. *pl.*	paro-a-oiki
II. *pl.(hon.)* ⟶ III. *sing.*	paro-a-oiki

$\overset{pl.(hon.)}{\text{II.}} \longrightarrow \overset{pl.}{\text{III.}}$ paro-a-oiki

$\overset{sing.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{sing.}{\text{I.}}$ en-par(o)-oiki

$\overset{sing.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{pl.(excl.)}{\text{I.}}$ un-par(o)-oiki

$\overset{sing.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{pl.(incl.)}{\text{I.}}$ i-par(o)-oiki

$\overset{pl.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{sing.}{\text{I.}}$ en-par(o)-oiki

$\overset{pl.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{pl.(excl.)}{\text{I.}}$ un-par(o)-oiki

$\overset{pl.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{pl.(incl.)}{\text{I.}}$ i-par(o)-oiki

$\overset{sing.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{sing.}{\text{II.}}$ e-par(o)-oiki

$\overset{sing.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{pl.}{\text{II.}}$ echi-par(o)-oiki

$\overset{pl.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{sing.}{\text{II.}}$ e-par(o)-oiki

$\overset{pl.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{pl.}{\text{II.}}$ echi-par(o)-oiki

$\overset{sing.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{sing.(hon.)}{\text{II.}}$ i-par(o)-oiki

$\overset{sing.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{pl.(hon.)}{\text{II.}}$ i-par(o)-oiki

$\overset{pl.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{sing.(hon.)}{\text{II.}}$ i-par(o)-oiki

$\overset{pl.}{\text{III.}} \longrightarrow \overset{pl.(hon.)}{\text{II.}}$ i-par(o)-oiki

iii) 以上の他不定法は par-chi-oiki となり次の如く活用する (§ 109, ii): —

par-chi-oiki a-e-ekarkar

「養ふこと我(等)汝にする」

par-chi-oiki a-echi-ekarkar

「養ふことを我(等)汝等にする」

par-chi-oiki　e-i-ekarkar

「養ふことを汝我(等)にする」

par-chi-oiki　echi-i-ekarkar

「養ふことを汝等我(等)にする」, *etc.*

(注意 i) この合成動詞は本來 par (口) といふ名詞と oiki (に工作す) といふ動詞の結合より成る。卽ち目的活用に於ける第 I 人稱第 II 人稱はそれぞれ「我に口に工作す」「汝に口に工作す」等の如き云ひ方で、「口に」を意味する par はそのまゝ抽象形が用ゐられる。但し具體形 paro を用ゐるも間違ひではない。然るに第 III 人稱に於てはそれ自身を示すべき何等の接辭もないので、「彼に口に工作する」といふ代りに「彼の口に工作する」の如く云ふ。從つて第 III 人稱の時は規定詞は必ず具體化して paro となるのである。尙この點に關して特に注意すべきは ka (上) を規定詞とする一群の合成動詞である。ka の具體形は ka· 又は kaha となるべくして實際は然らず、kashi の形をとる。從つてこの種の合成動詞の變化は稍不規則である。これらを特に第 ii 種とする (§ 131)。

(注意 ii) 第 III 類第 i 種に屬する合成動詞に次の如きものがある :——anrapok(i)-kari「負ける」, ashke-uk「招き入れる」, etok(o)-tuye「妨げる」, kat(u)-kar「ばかす」, kes(e)-ampa「追ふ」, kes(e)-kor「嗣ぐ」, par(o)-oshuke「煮て食はす」, ram(u)-horkare「斷念さす」, ram(u)-shitnere「惱ます」, ram(u)-ye「ねぎらふ」, ram(u)-suye「強ひる」, sam(a)-eanasap「を心許なく思ふ」, sam(a)-epash「伴走する」, tom(o)-oitak「なだめる」, tom(o)-kokanu「任せる」。

(b) 第 III 類第 ii 種の活用

131. 第 III 類動詞の內、ka(shi) を規定詞とするものを第 ii 種とする。次にその雅語に於ける抱合的活用の全形を示す :——

I. *sing.* ——→ II. *sing.*	e-ka-a-opiuki	(我　汝を助ける)
I. *sing.* ——→ II. *pl.*	echi-ka-a-opiuki	(我　汝等を助ける)

I. (pl.) ⟶ II. (sing.)	e-ka-a-opiuki	（我等　汝を助ける）
I. (pl.) ⟶ II. (pl.)	echi-ka-a-opiuki	（我等汝等を助ける）
I. (sing.) ⟶ III. (sing.)	kashi-a-opiuki	（我　　彼を助ける）
I. (sing.) ⟶ III. (pl.)	kashi-a-opiuki	（我　彼等を助ける）
I. (pl.) ⟶ III. (sing.)	kashi-a-opiuki	（我等　彼を助ける）
I. (pl.) ⟶ III. (pl.)	kashi-a-opiuki	（我等彼等を助ける）
II. (sing.) ⟶ I. (sing.)	i-ka-e-opiuki	（汝　　我を助ける）
II. (sing.) ⟶ I. (pl.)	i-ka-e-opiuki	（汝　我等を助ける）
II. (pl.) ⟶ I. (sing.)	i-ka-echi-opiuki	（汝等　我を助ける）
II. (pl.) ⟶ I. (pl.)	i-ka-echi-opiuki	（汝等我等を助ける）
II. (sing.) ⟶ III. (sing.)	kashi-e-opiuki	（汝　　彼を助ける）
II. (sing.) ⟶ III. (pl.)	kashi-e-opiuki	（汝　彼等を助ける）
II. (pl.) ⟶ III. (sing.)	kashi-echi-opiuki	（汝等　彼を助ける）
II. (pl.) ⟶ III. (pl.)	kashi-echi-opiuki	（汝等彼等を助ける）
III. (sing.) ⟶ I. (sing.)	i-ka-opiuki	（彼　　我を助ける）
III. (sing.) ⟶ I. (pl.)	i-ka-opiuki	（彼　我等を助ける）
III. (pl.) ⟶ I. (sing.)	i-ka-opiuki	（彼等　我を助ける）
III. (pl.) ⟶ I. (pl.)	i-ka-opiuki	（彼等我等を助ける）
III. (sing.) ⟶ II. (sing.)	e-ka-opiuki	（彼　　汝を助ける）

III.$\xrightarrow{sing.\ \ pl.}$ II.　echi-ka-opiuki　(彼　汝等を助ける)

III.$\xrightarrow{pl.\ \ sing.}$ II.　e-ka-opiuki　(彼等　汝を助ける)

III.$\xrightarrow{pl.\ \ pl.}$ II.　echi-ka-opiuki　(彼等汝等を助ける)

(注意) 第 ii 種に屬する合成動詞に次のものがある :——
ka(shi)-opash「救援する」, ka(shi)-oshike「物を持つて來て與へる」, ka(shi)-huye「看病する」, ka(shi)-eshina「をかばふ」, ka(shi)-kik「惡魔拂ひの爲に手草で打つ」。

(c) 第 III 類第 iii 種の活用

132. 以上の他に、主格活用の人稱接辭は接中するけれども、意義上第三人稱の他に目的格活用を缺き、從つて抱合形をとり得ないものがある。これを第 iii 種とする。tum(u)-ourepuni「襲ね着る」、etok(o)-oiki 等がこれに屬する :——

kosonte patek tumu-a-ourepuni.「小袖のみ我襲ね着る」。
sakekar-an kuni etoko-a-oiki.「酒を造るべく我準備す」。

V. 動詞の種々なる接頭辭

I. 充當相 (*applicative*) の接辭

(a) 接頭辭 "e-"

133. 位置を示す e-。靜止にも運動にも用ゐられる :——

(I) 先行の名詞を受けて「(そこ)に」(*thereat, at, therein, in* 等) の意味を表はす。

poro chise e-horari = poro chise ta horari.
大きな　家　(そこ)に彼住む

「大きな家に彼住む」。

harkiso e-a = harkiso ta a.「左座に彼坐る」。
左　座　(そこ)に彼坐る

kotan-pa e-kotan-kor.「村の東端を彼領有する」。
村の東端 (そこ)に村を彼もつ

Poropet e-punki(yo)-ne.「幌別を彼統治する」。
幌別 (そこ)にて率行と成る

utar e-sapa-ne.「連中を彼統率する」。
連中(そこ)に於て頭と成る

(2) 運動の方向を示す。「(そこ)へ」。*thereto, to* 等の意。

Poropet e-arpa=Poropet un arpa.「幌別へ行く」。
幌別 (そこ)へ行く

sopa e-hosari=sopa un hosari.「上座の方へ振向く」。
上座 (そこ)へ振向く

134. 「(それ)に就いて」。 *thereanent, thereof, of, about* 等の意。

e-mina.「それに就いて笑ふ」「それを笑ふ」。

neampe *e*mina.「その事に就いて笑ふ」「その事を笑ふ」。

e-yashtoma.「それに就いて羞ぢる」「それを羞ぢる」。

chish *e*yashtoma.「泣く事に就いて羞ぢる」「泣く事を羞ぢる」。

e-ashkai.「それに就いて可能である」「それが出來る」。

ek *e*ashkai.「來ることが出來る」。

e-aikap.「それに就いて不能である」「それが出來ぬ」。

arpa *e*aikap.「行くことが出來ぬ」。

hoshkino ukorachi opke awa, kamui-tono hene use-
以前 の様に 放屁すると お殿様 も 藩
tono utar hene tekehe kikkik kane *e*-nupetne
士 たち も 手を 拍つ て それを喜び
e-uminare.
それを笑ひ合つた

135. 「(それ)を以て」「(それ)に依つて」。 *therewith, with, thereby, by* 等の意。

a-e-ipe-p,「我々がそれを以て食事するもの」「食器」。

a-e-iku-p,「我々がそれを以て飲酒するもの」「酒器」。

a-e-shiko-p,「我々がそれに依て生れたもの」「親」。
a-e-paro-p,「我々がそれに依て生れたもの」「親」。
tek-e-kar-pe,「手もて作れるもの」「手工品」。
kem-e-kar-pe,「針もて作れるもの」「縫物」。
ka-e-rikin-kur,「絲にて登る男」「雄蜘蛛」。
ka-e-rikin-mat,「絲にて登る女」「雌蜘蛛」。
shutu-e-koiki,「棍棒にて闘ふ」。
emush-e-koiki,「劍にて闘ふ」。
pa-e-koiki,「口にて闘ふ」「口論する」。
shik-e-shitaiki,「目にて撃つ」「目撃する」。
hau-e-amkir,「聲にて知る」。
nukar-e-amkir,「見て知る」。
ai-e-kot,「矢にて死す」。
tashum-e-kot,「病にて死す」。
shinki-e-kot,「勞れて死す」。
shinki-e-hoshipi,「勞れて歸る」。
shinki-e-riwak,「勞れて歸る」。
emko-e-tup,
「半分で二つ」「半分あれば二つ」卽ち「一つ半」。
shito arke e-tu shito,
「粢半分で二つの粢」「一つ半の粢」。
emko-e-rep,
「半分で三つ」「半分あれば三つ」卽ち「二つ半」。
emko-e-inep,
「半分で四つ」「半分あれば四つ」卽ち「三つ半」。
emko-e-ashiknep,
「半分で五つ」「半分あれば五つ」卽ち「四つ半」。
emko-e-iwampe,

「半分で六つ」「半分あれば六つ」卽ち「五つ半」。
sonko emko e-iwan sonko,
「消息半分で六つの消息」「五つ半の消息」。
wampe-e-tu-hot,
「十で四十」「十あれば四十」卽ち「三十」。
wampe-e-re-hot,
「十で六十」「十あれば六十」卽ち「五十」。
wampe-e-ine-hot,
「十で八十」「十あれば八十」卽ち「七十」。
wampe-e-ashikne-hot,
「十で百」「十あれば百」卽ち「九十」。

136. その他の e-。

atu「嘔吐する」, atu-p「嘔吐者」, e-atu-p「吐瀉物」。
osoma「脫糞する」, osoma-p「脫糞者」, e-osoma-p「大便」。
kai「折れる」, e-kai ni「樹の切株」。
e-kai chish「切り立つた高い山」。
e-kai nupuri「同上」。
hau「聲」, kasu「超える, 過ぎる」, e-hau-kasu「聲が高い」。
hur「山」, turashi「登る」, e-hut-turashi「山を登る」。
pesh「下る」, e-hur-pesh＝hur-epesh「山を下る」。
ka「絲」, e-ka「縒る」, ka eka「絲を縒る」。

137. 第 II 類の動詞に此の e- が添へば、第 I 類に轉ずる (§ 117, C):——

{akor kotan ta shirepa-an.「我村へ我到着す」。
{akor kotan a-e-shirepa.「我村へ我到着す」。

{Poropet un arpa-an.「幌別へ我行く」。
{Poropet a-e-arpa.「幌別へ我行く」。

アイヌ語の形容詞はすべて第 II 類の動詞である。從つてそれに e- が附けば當然第 I 類の動詞に轉ずる:——

pirka「善い」「富む」, e-pirka「(それ)で儲ける」。

{pirka-an「我富む」。
{a-e-pirka「我それで儲ける」。

wen「悪い」, e-wen「(それが)し兼ねる」。

{wen-an「我悪し」。
{mokor a-e-wen「眠ることを我し兼ねる」「いねがてにする」。

nishte「固い」「强い」, e-nishte「(それ)に强い」「に耐へる」。

{nishte-an「我强し」。
{sake a-e-nishte「我酒に强し」。

hapur「柔い」「弱い」, e-hapur「(それ)に弱い」「にもろい」。

{hapur-an「我弱し」。
{chip a-e-hapur「我舟に弱し」。

(b) 接 頭 辭 "o-"

138. 位置を示す o-。「(そこ)に」,「(そこ)へ」。(*there*)*at*, (*there*)*in*, (*there*)*to* 等の意。

ru pishkani o-nupe-chikka-p?——niatush. (ta で置換へ得る。§ 42)
路 の兩側 に 涙を 落す もの 手桶

Kanesanta o-arki. (un で置換へ得る。§ 43)
金山丹 へ 來る

o-ainu-sakno「人まぜせずに」「水入らずで」。
そこに 人 無しに

o-shik-sakno「同上」。
そこに目 無しに

o-tek-sakno「無一文で」。
そこに手無しに

139. 出發點を示す o-。「(そこ)から」。(*there*) *from* の意。

tupesan kamimanit o-tumi-oshma.「八本の肉串が原因で戰が始つた」。
八本の　肉　串　(そこ)から戰が始つた

newaampe o-tumi-ne.「そのことが原因で戰に成つた」。
そのこと　から戰に成つた

pet o-hanke-ta「川の此岸に」。
川　から　近く　に

pet o-tuima-un「川の彼岸へ」。
川　から　遠く　へ

ni o-pichi＝o-ni-pichi.「樹を踏外す」。
樹 から踏外す

shik o-poso inkar＝o-shik-poso inkar.「目を細めに開けて見る」。
目　から通して　見る

toi o-poso oman＝o-toi-poso oman.「地を潜つて行く」。
地　を通して　行く

chip o-ika turse＝o-chip-ika turse.「舟から落つこちる」。
舟　から溢れ　落ちる

140. o- も亦第 II 類の動詞を第 I 類にする：——

{ Poropet-kotan ta ek-an.「幌別村に我來る」。
{ Poropet-kotan a-o-ek.「同上」。

{ Kanesanta un oman-an.「金山丹へ我行く」。
{ Kanesanta a-o-oman.「同上」。

(c) 接頭辭 "ko-"

141. 「(それ)と共に」「(それ)を以て」「(それ)に依て」「(それ)の爲に」。(*there*)*with*, (*there*)*by* 等の意。

nea chikap a-rap-ko-kikkik wa raike.
作つ　鳥を　我羽ぐるみ　叩い　て　殺した

nea chep a-pone-ko-kuikui.
作の 魚を 我 骨 まゝ 嚙つた

koshne terke a-ko-yaishikurka-omare. (ピョンピョン
輕き 跳躍 我それをば 自身の上に 入れる

跳ねる)。

kemeiki patek a-ko-kipshirechiu. (針仕事に脇目もふ
針仕事 のみ 我それにて 俯いてゐる

らぬ)。

shirka-nuye ko-shineani enitomomo. (刀鞘の彫刻に沒
鞘 彫り の爲に 一所 を見つめる

頭する)。

né wen hura a-nu aine a-ko-wenekot.
その 惡 臭を 嗅いだ あげく その爲に 惡死した

142. 「(それ)に」「(それ)に對して」「(それ)に向つて」。(*there*)*to*, (*there*)*unto* 等の意。

a-e-ko-sunke. 「我汝を欺く」。
我 汝 に 噓をつく

e-i-ko-sunke. 「汝我を欺く」。
汝 我 に 噓をつく

o-tu shi-wenpa o-re shi-wenpa i-ko-suyekar.
幾十の 大 惡口 幾百の 大 惡口を 我 に 浴せる

mat-ko-iwak. 「妻訪ひする」。
妻 に對して 行く

iku-ko-shiyuk. 「酒宴に對して裝ふ」「酒宴に對する裝ひ」「晴衣」。
酒宴に 對して 裝ふ

kamui ko-somo-yaikatanu-no, 「神をも畏れずに」
神 に對して 畏れ憚らず に

ainu utar a-ko-imoki-kor.
人 々 に 土産を 持つて行く

amipi ne-yakka i-ko-yashpa i-ko-pet-pa. 「我着物をも彼はズタズタに引裂いた」。
我着物 を も 我に對して裂き 我に對して破つた

143. 「(それ)に對して」の意味から「(それ)から」の意味も出て來る:——

shisam ko-tuima-kur,「日本から遠い地方の人」。
日本 に對して 遠い 人

mat ne-yakka ikor tura i-ko-uina.
妻 までも 寶物 と共に 我から奪つた

a-mi wa okai petetke-p i-ko-soshpa, ukotaptapu wa,
我着 て ゐた ぼろを 我から剝ぎ取り 一所にまるめ て

tuima iwa oshmak ko-eyapkir.
遠くの 小山 の後 へ投げ捨てた

144. 「(それ)に」「(それ)に於て」(*inessive*) の意味。

iyoipe-nupek chise-upsor ko-maknatara.
寶光 家内 に 煌然たり

itak-ko-moyo,「口數が少い」。
言葉 に於て 少い

itak-ko-inne,「口數が多い」「多辯の」。
言葉 に於て 多い

itak-ko-nitan,「口早の」。
言葉 に於て 早い

itak-ko-moire,「口の重い」。
言葉 に於て 遲い

145. ko- も亦第 II 類の動詞を第 I 類にする:——

{ sunke-an.「我嘘をつく」。
{ a-ko-sunke.「我人に嘘をつく」「人を欺す」。

{ onkami-an.「我拜禮する」。
{ a-ko-onkami.「我人に拜禮する」。

2. 互相の接辭

146. 「兩數」(*dualism*) を表はす接辭 u- (§ 40) が動詞へ附く時は、その動作を兩者が行ふことになつて、そこから「何々し合ふ」意味が出て來る:——

nukar「見る」, u-nukar「見合ふ」「相見る」「會見する」。
oshikote「惚れる」, u-oshikote「惚れ合ふ」「相惚れる」。
osura「棄てる」, u-osurpa「棄て合ふ」「夫婦別れする」。
koiki「撃つ」, u-koiki「撃ち合ふ」「喧嘩する」。

chishkar「弔哭する」, u-chishkar「哭き合ふ」「相哭する」。

pakte「競べる」, u-pakte「競べ合ふ」;

u-nupur-pakte「術競べする」。

u-kiror-pakte「力競べする」。

u-par-pakte「口競べする」。

三人以上に對しても用ゐる:——

kamui-tono hene use tono utar hene tek uwekik wa
お殿様 も 藩 士 達 も 手を 拍ち合つ て

e-u-nupetnere e-u-minare.
それに 興じ合ひ それを笑ひ合つた

ainu utar menoko utar u-tomta terke kane u-kirare.
男 達 女 達 相互の中に 跳び つゝ 逃げ合つた

(男女入り亂れて逃げ惑つた)

(注意 i) 上例に於て自動詞は之を特に他動化して u- を附することに注意を要する。

(注意 ii) u- は第 I 類の動詞を第 II 類に變ずる (§ 116)。

147. u-ko の結合。

(1) u- が動主に關係する場合。「一所に(なつて)」。

shinrit uko-kor,「先祖を一所にもつ」「先祖を共有する」「同じ先祖をもち合ふ」。

uko-re-kor = re uko-kor,「名を一所にもつ」「名を共有する」「同名をもち合ふ」。

uko-po-sak = po uko-sak,「子を一所に缺く」「お互の間に子が無い」。

(2) u- が動作の目的に關係する場合。「一所に(して)」。

uko-nukar,「一所にして見る」「見くらべる」。

uko-poye,「一所にまぜる」「まぜあはす」。

uko-raye,「一所によせる」「よせあはす」。

148. u-e (> uwe) の結合。

uwe-kote,「結び合ふ」「結婚する」。

uwe-neusar,「歡談し合ふ」。

uwe-shinoye,「からみ合ふ」。

uwe-shikarimpa,「互にぐるぐる廻る」。

ukotetterke wa tu-sui re-sui uweshikarimpa.
互に組んで 二度 三度 ぐるぐると廻つた

3. 再歸相の接辭

(a) yai-.

149. yai- は名詞にも附いて(1)「ただの」の意味を表はす。yai-itak「ただのことば」「ただごと」「そらごと」。yai-ramu「ただの考へ」「空想」「想像」等。(2)「ただひとつの」「自分だけの」の意味。yai-irwak kor, shine turesh-nu.「男の兄弟は自分だけで、妹が一人ある」。(3)「自分の」の意味。yai-utar「おのがうから」。yai-kotan-or「おのが古里」。(4) 動詞に附いて「自身に」「自身を」の意味を表はす。但し中相になることも多い。

150. raike「殺す」, yai-raike「自殺す」。

rikotte「上から吊す」, yai-rikotte「自身を上から吊す」「縊死する」。

ari「置く」, yai-ari「自身を置く」「住む」。

shinna chise e-yaiari.「別の家に彼住む」。

ashkannere「淨める」, yai-ashkannere「自身を淨める」「顔や手を洗ふ」。

Syn. yashke, ewonne.

ewen「そこなふ」, yái-ewen > yayéwen「自身をそこなふ」「不具(特に跛)になる」。

chiniani「赤兒を抱いて小便させてやる」, yai-chiniani「自分で小便する」。

kamui-ne-re「神にならしむ」, e-yai-kamuinere「それを以て自身を尊貴ならしむ」「それで以て尊ばれてゐる」「それを矜としてゐる」。 *Cf.* shikamuinere「お高く止まる」「高慢である」。

kar「爲す」, yai-kar「自身を爲す」「化ける」。

seta ne yaikar wa noshpa.「犬に化けて追つかける」。

kore「與へる」, yai-kore「自身に與へる」「持つ」。

irushka keutum a-yaikore.「怒りの情を我抱く」。

Cf. shi-kore「自身に生じさす」「子など產む」。

nuina「隱す」, yai-nuina「隱れる」。

nu「聽く, 嗅ぐ, 感ずる」, yai-nu「自身に感ずる」。

omap「愛する」, yai-omap > yayómap「自分を愛する」「情無く思ふ」「口惜しがる」。

pusu「出す」, yaí-pusu「出る」。shi-pusu もある。前者は意志的で後者は無意志的。

hekachi pet orun raukushte aine yaipusu.
童兒が 川 の中に くぐつて やがて 浮び出た

rai ainu shipusu ranke shipusu ranke mom.
死 人が 浮び出で つゝ 浮び出で つゝ 流れる

yai-shitoma > yashtoma「自身を怖れる」「羞ぢる」。

yai-wen-nukar「自身を悪く見出す」「せつぱ詰る」「進退谷まる」。

150. yai-ko の結合。「自身に對して」「自身に向つて」「自分ひとりで」。

yaiko-ta「自分で」「自ら」。

yaiko-an「自分ひとりでゐる」「獨居する」。

yaiko-itak「自分に向つて云ふ」「ひとりごつ」。

yaiko-noye「自分へ卷きつける」「纏ふ」。

earkaparpe e-yaikonoye. 「只一枚の薄衣を身に纏ふ」。

yaiko-ranke「自分ひとりで落す」。*Cf.* yai-ranke「落る」。

yaiko-sanke「自分ひとりで出す」。*Cf.* yai-sanke「出る」。

151. shi- も名詞に附いて (1)「本當の」「眞の」の意を添へる。shi-pet「本流」。shi-so「本座」「右座」。shi-chupka「眞東」。shi-chuppok「眞西」。(2)「大なる」。shi-apka「大牡鹿」。shi-soya「大黄蜂」。(3)「自分の」。shi-etu-uina, shi-par-uina「おのが鼻を摑み、おのが口を摑む」(驚嘆の身振)。(4) 動詞に附いて「自分に」「自分を」の意味を表はす。中相になつてしまふことも多い。

152. shi-etaye「自身を引く」「引退する」。

shi-suye「自身を搖ぶる」「搖れる」。

shi-moye「自身を動かす」「動く」。shir-shimoye「大地が動く」「地震」。

shi-kasui-re「自分に手傳はす」「手傳つて貰ふ」。

shi-ka-opiuki-re「自分を助けさす」「助けて貰ふ」。

shi-nomi-yar「自分を祭らす」「(神が人間に)祭つて貰ふ」。

ainu otta shinomiyar.「人間達に祭られる」。

shi-nukar-e「自分を見せる」「(容貌服裝等)人目を惹いてゐる」。

但し kamui-shinukare「神に自分を見せる」「酒・木幣等を以て神を祭る」。

rorumpe etokta yaikamui-shinukare「戰の前に自己の神を祭る」。

153. 使役動詞に附いて「云々のふりをする」「云々のまねをする」「云々を裝ふ」の意を表はす。

shi-ashpa-re「聾を裝ふ」「聞えぬふりする」。
shi-ihoshki-re「醉つたふりする」。
shi-rai-re「死んだまねする」。
shi-hachir-e「落ちるまねする」「わざと落ちる」。
shi-chish-re「泣くまねする」「わざと泣く」。
shi-ne-re「を裝ふ」「に化ける」。
shi-nishpa-nere「(貧者が)長者を裝ふ」。
shi-wempe-nere「(長者が)貧者を裝ふ」。
shi-okkai-nere「(女が)男を裝ふ」。
shi-menoko-nere「(男が)女を裝ふ」。

VI. 態 (*Aspect*)

1. 動作態を表はす動詞語尾

154. 一回態 (*instantaneous aspect*)。-kosanu (*pl.* kosampa).

humkosanu「ブンと一つ音がする」
kitkosanu「キチッと一つ音がする」
maikosanu「カチンと一つ音がする」
naikosanu「チャリンと一つ音がする」
patkosanu「パッと一つ音がする」
putkosanu「プッと一つ音がする」
rimkosanu「リンと一つ音がする」
serkosanu「ズブリと一つ音がする」
shiukosanu「シュウと一つ音がする」

(*N.B.*) hum, kit, pat, put, rim, shiu はそれぞれの音。mai, nai

は金屬の觸れ合ふ音。ser は横つ腹へ匕首を立てるが如き音。以上全部擬聲語 (*onomatopoeia*).

hetarkosanu「つと顔を上げる」
matkosanu 「ぱつと起つ」
raikosanu 「さつと青ざめる」
reukosanu 「すつと飛び下りる」
teshkosanu 「ぐつと反る」
tuikosanu 「プスッと斷れる」

(*N.B.*) hetar- < hetari「顔をあげる」。mat- < matke「起つ」。rai- < rai「死ぬ」。reu- < reu「とまる」。tesh- < teshke「反る」。tui- < tui「斷れる」。

155. 繼起態 (*successive aspect*)。-rototo, rototke.

humrototo, humrototke「ブンブンと頻りに鳴る」
kaurototo, kaurototke「ガラガラと頻りに鳴る」(煎餅など)
chairototo, chairototke「ワァワァと頻りに鳴る」(赤兒の泣聲)
meshrototo, meshrototke「グゥグゥと頻りに鳴る」(鼾聲)

156. 多囘態 (*multitudious aspect*)。-atki.

humumatki「ブンブン多量に音がする」
kururatki 「まつ暗に雲などかぶさつてゐる」
piwiuatki 「ヒゥヒゥ風など吹きつのる」
shiwiuatki 「シゥシゥ風など吹きつける」
sepepatki 「ハタハタはためく」
tununatki 「チチチチンと鳴りしきる」
tususatki 「ブルブルブル震へてゐる」

(*N.B.*) hum-um < hum「ブンといふ音」。kur-ur < kur「陰」。piu-iu < piu「ヒウといふ音」。shiu-iu < shiu「シュといふ音」。sep-ep < sep「ハタめく音」。tun-un < tun「チンといふ音」。tus-us (*Cf.* tus-us-ke「ブルブル震へる」)。

157. 持續態 (*durative aspect*)。-natara, -(h)itara.

humnatara「ブンブン鳴つてゐる」
kitnatara「キチキチ鳴つてゐる」
kinnatara「キラキラ光つてゐる」
kurihitara「欝然と暗くなつてゐる」
maknatara「はるばる打開(ウチヒラ)けてゐる」
matunitara「持上(モチアガ)つてゐる」
turihitara「ずうとのびてゐる」
tununitara「チンチン鳴つてゐる」

(*N.B.*) 子音に終る語幹には -natara, 母音に終る語幹には -(h)-itara を附けるのが原則であるが例外もある。matunitara, tunun-itara 等。

158. ......-a......-a.

chish*a*-chish*a*「泣きに泣く」「泣きつづける」
e*a*-e*a*「食ひに食ふ」「食ひつづける」
oman*a*-oman*a*「行きに行く」「行きつづける」
kik*a*-kik*a*「打ちに打つ」「打ちつづける」
noye*a*-noye*a*「揉みに揉む」「揉みつづける」

(*N.B.*) 動詞の反復形式に就ては § 223.

159. 瞬間態 (*momentary aspect*). -oshma.

rik-oshma「急に上る」
ra-oshma「急に下る」
soi-oshma「急に出る」

au-oshma 「急に入る」

160. 輕微態 (*trivial aspect*). -tek.

ash「立つ」, ash-tek「ちょつと立つ」

nu「聞く」, nu-tek「ちょつと聞く」

nukar「見る」, nukat-tek「ちょつと見る」

terke「跳ぶ」, terke-tek「ちょつと跳ぶ」

161. 强勢態 (*intensive aspect*). -ekatta.

rik-ekatta「ぐつと上る」「ぐいと上げる」

ra-ekatta「ぐつと下る」「ぐいと下げる」

soi-ekatta「ぐつと出る」「ぐつと出す」

au-ekatta「ぐつと入る」「ぐつと入れる」

2. 態 の 助 詞

(a) 將 然 態

162. anki (日高), anke (膽振)。「將に……せんとす」「今にも……しさうだ」。

tane chish anke humash.
今にも 泣き さう だ

anke を繰返すこともよくある:—

tane tane ku-rai anke anke ku-yainu.
今にも 今にも 私 死に さうに さうに 思つた

163. etokoiki, etokush.

tane chish *etokoiki.*「將に泣かんとしてゐる」。

tane rai *etokush.*「將に死なんとしてゐる」。

(b) 始 動 態 (*inchoative*)

164. oashi (日高), heashi (膽振)。

tane ukoiki *oashi.*「今喧嘩が始つた」。

tane chish *heashi.*「今泣き出した」。

(c) 持 續 態 (*durative*)

165. kane, kane-an, kane-okai.

a *kane*(-*an*).「坐つてゐる」。a *kane* okuima-p,「坐つてゐて小便する者」(女)。

ash *kane*(-*an*).「立つてゐる」。ash *kane* okuima-p,「立つてゐて小便する者」(男)。

mina *kane*(-*an*).「笑つてゐる」。mina *kane* iki.「笑つてする」。

(d) 進 行 態 (*progressive*)

166. kor, kor-an, kor-okai.

rayayaise *kor-an.*「泣叫びつゝある」。

ukoiki *kor-okai.*「(彼等)喧嘩しつゝある」。

rayayaise *kor* ukoiki *kor-okai.*「(彼等)泣き叫び乍ら喧嘩してゐる」。

(e) 完 了 態 (*perfective*)

167. nisa.

oman *nisa*?「行つてしまつたかい?」

oman *nisa* ruwe-ne.「行つてしまつたよ」。

168. wa-isam.

oman *wa-isam.*「行つてしまつた」。

a-ku *wa-isam.*「(我)飲んでしまつた」。

169. (wa-)okere.

kampi a-nuye *okere.*「手紙を書いてしまつた」。

opittano a-raike *wa-okere.*「全部やっつけてしまつた」。

(f) 反 復 態 (*iterative*)

170. ranke.

san kata an ranke. (きまつて棚の上にあつた)。
棚 の上に あり ありした

keshto oman ranke. (毎日行くのがきまりであつた)。
毎日 行き 行きした

keshto oman ranke ko san kata shito an ranke.
毎日 行き 行きする と 棚 の上に 粢が あり ありした

keshto oman ranke hoshipi.
毎日 行つ ては 歸る

shinep pishno uk ranke nukar.
一つ 毎 に 手に取 つては 眺める

VII. 動 詞 法 語 尾

1. 名詞から動詞が出來る時の語尾

171. -an. 本來は「在る」を意味する動詞。時の名詞に附いてそれを動詞化する:——

kunnewa「朝」, kunnewa-an「朝になる」「朝があける」。
to-noshki「晝」, tonoshki-an「晝になる」。
onuman「夕方」, onuman-an「夕方になる」。
anchikar「夜」, anchikar-an「夜中になる」。
nisatta「翌朝」, nisatta-an「翌朝になる」。
ashir-pa「新年」, ashirpa-an「新年になる」「新年が來る」。
paikar「春」, paikar-an「春になる」「春が來る」。
sak(-pa)「夏」, sak(-pa)-an「夏になる」「夏が來る」。
chuk(-pa)「秋」, chuk(-pa)-an「秋になる」「秋が來る」。
mata(-pa)「冬」, mata(-pa)-an「冬になる」「冬が來る」。

172. -ash, -ush, -at, -ot. (§ 39)。

173. -o. 本來「入る，附く，乘る，入れる，附ける，乘せる」等を意味する動詞。

itak「言葉」, itak-o「云ふ」。

chip「舟」, chip-o「漕ぐ」。

shik「目」, shik-o「目が附く」「生れる」。

par 「口」, par-o「口が附く」「生れる」。

174. -kar. 元來「作る，打つ」意味の動詞。

etu 「鼻」, etu-kar 「鼻をかむ」。

sapa「頭」, sapa-kar「頭を刈る」。

sake「酒」, sake-kar「酒宴をする」。

(*N.B.*) nukar「見る」はこれの化石 (*fossilize*) した形であらう。nu は「目」を意味する語根。 *Cf.* *nu*pe「涙」, e*nu*hup「目が泣き腫れる」, e*nu*tomomo「見つめる」。

175. -kor. 本來「もつ」意味の動詞。

mat 「妻」, mat-kor 「妻帯する」。

hoku「夫」, hoku-kor「嫁になる」。

hon 「腹」, hon-kor 「姙娠する」。

po 「子」, po-kor 「分娩する」。

kat 「形」, kat-kor 「振舞ふ」。

tumi「戰」, tumi-kor「戰ふ」。

(*N.B.*) mokor「眠る」も本來は「靜けさをもつ」である。 *Cf.* *mo*nak「靜けさを缺く」「覺めてゐる」。

176. -ne.「である」「に成る」意味の動詞。

sapa「頭」, sapa-ne「支配する」。

soi「外」, soi-ne「外へ出る」。

shumau「神の死體」, shumau-ne「(神が)死ぬ」。

marapto「客」, marapto-ne「客となる」(神が人界を訪れる)。

177. -nu.

kem「血」, kem*nu*「悼む」「同情する」。

shik「目」, shik*nu*「蘇生する」。

chop「チュッといふ音」, chop*nu*「チュッと音を立てる」(接吻)。

rim「ドシンといふ音」, rim*nu*「ドシンと音がする」。

turesh「妹」, turesh*nu*「妹がある」。

178. -ma.

kui「尿」, okui*ma*「放尿する」。

shi「糞」, oso*ma*「くそまる」。

ka「上」, ka*ma*「上を越す」「跨ぐ」。

osh「中」, osh*ma*「入る」。

hak「囁聲」, hak*ma*「さゝやく」。

o「入る」, o*ma*「入る」。

ika「溢れる」, ikash*ma*「剰る」。

179. -se.「云々の音を發する」意。

(1) 擬聲動詞をつくる:—

aiai*se* > ayaise「アィアィ泣く」。アィアィは赤ん坊の泣聲。*Cf.* ayai「赤ん坊」。

cham*se*「チャムチャムと音を立てる」「舌鼓を打つ」。

charar*se*「サラサラと流れる」「サラサラッとすべる」。

chop*se*「チュッと音を立てる」「キスする」。

e*se*「エヽと答へる」。e-ese「然諾す」。

hakak*se*「ヒソヒソとさゝやく」。

hap*se*「hap! と云ふ」。hap は感嘆詞「有難う」。

he*se*「息する」。he は呼氣の音。

het*se* > hetche「ヘイッ! ヘイッ! と合の手を入れる」。

ho*se*「ホゥと應答する」。

horop*se*「ホロホロと粥などを啜る」。

hum*se*「フム！ フム！ と云ふ」。

i*se*「(兎が)イと啼く」。isepo「兎」。

pau*se*「(狐が)パウと啼く」。

we*se*「(熊が) we！ we！ と吠える」。owewe「熊」。

wo*se*「(犬，狼が)ウォーと吠える」。wose-kamui「狼」。

yau*se*「(猫が)ヤゥと啼く」。

kak*se*「カッと痰を吐く」。

kitkit*se* > kitkitche「クスクス笑ふ」。

oioi*se* > oyoi*se*「オイオイ泣く」。

rim*se*「ドンと音を立てる」「踊る」。

sap*se*「チェツと舌打する」。e-sapse「あざ笑ふ」。

top*se*「トッと唾を吐く」。

tunun*se* > tunui*se*「チンチン鳴る」。

(2) 以下は最早擬聲ではなくて擬容である：——

karkar*se*「コロコロころがる」。*Cf. kar*i「廻す」，*kan-kar*i「クルクル廻す」。

parar*se*「(怒氣が)ムラムラと起る」。*Cf. par*u「あふぐ」。

reweu*se*「タワワに撓んでゐる」。*Cf. reu*ke「曲る」，*rew*e「曲げる」。

taktak*se*「マルマルしてゐる」。*Cf.* tak「塊」。

tok*se*「凸出する」。*Cf. tok*om「瘤」。e*tok*「先端」。

ninnin*se*「(螢光など)明滅する」。*Cf.* nin「消える」。

tawau*se*「ガタガタ震へる」。

yawau*se*「皹(アカギレ)がきれる」。*Cf. yau*ke「冷める」，*yau*tek「冷める」。

180. -ke.

(1) -se と同じく擬聲及び擬容の動詞をつくる：—

charke「(鈴など)チャラッと鳴る」。

hum*ke*, "*to lull.*" *Cf.* ihumke "*lullaby.*"

om*ke*「しはぶく」。

op*ke*「放屁する」。

pat*ke*「パッと撥ねる」。

purpur*ke*「猫がブルブル鼻を鳴らす」「水がボコボコ噴出す」。=purpurse.

sesser*ke*「シャクリあげる」。

tuntun*ke*「クスクス笑ふ」。

tusus*ke*「ブルブル震へる」。

uyui*ke*「同上」。

pispis*ke*「粥など煮えかけて表面に泡が立つ」。*Cf.* pise「泡」。

yawau*ke*「煇がきれる」。=yawause.

(2) 語根に附いて自動詞又は形容詞をつくる。§ 121, 1.

(3) 自動詞を他動詞にする。§ 181.

2. 他動詞語尾

181. -ke.

ahun「入る」, ahun*ke*「入れる」。

ashin「出る」, ashin*ke*「出す」。

ran「下る」, ran*ke*「下す」。

rai「死ぬ」, rai*ke*「殺す」。

san「前へ出る」, san*ke*「前へ出す」。

sat「乾く」, sat*ke*「乾かす」。

182. -ka.

hure「赤い」, hure*ka*「赤くする」。

retar「白い」, retar*ka*「白くする」。

isam「無い」, isam*ka*「無くする」。

sak「無い」, sak*ka*「無くす」。

ush「(火が)消える」, ush*ka*「消す」。

nin「(雪が)消える」, nin*ka*「消す」。

mom「流れる」, mom*ka*「流す」。

tuk「生える」, tuk*ka*「生やす」。

183. -re (語幹が母音で終るものに). -te (語幹が子音で終るものに)。

pirka「善い」, pirka*re*「善くする」「益す」。

wen「悪い」, wen*te*「悪くする」「毀す」。

arpa「行く」, arpa*re*「やる」「送る」。

oman「行く」, oman*te*「やる」「送る」。

ahup「入る」, ahup*te*「入れる」。

aship「出る」, aship*te*「出す」。

rikip「上る」, rikip*te*「上げる」。

rap「下る」, rap*te*「下げる」。

184. -a, -i, -u, -e, -o. § 121. § 126.

3. 使役相語尾

185. 語幹が母音で終るものには -re を附ける :——

e「食ふ」, e*re*「食はす」。

ku「飲む」, ku*re*「飲ます」。

kore「與ふ」, kore*re*「與へしむ」。

se「負ふ」, se*re*「負はす」。

ta 「汲む」, ta*re* 「汲ます」。
nu 「聞く」, nu*re* 「聞かす」。

186. 語幹が r で終るものには -e を附ける :——
kar 「作る」, kar*e* 「作らす」。
kor 「もつ」, kor*e* 「もたす」「與へる」。
nukar「見る」, nukar*e*「見せる」「見さす」。

187. 語幹が r 以外の子音で終るものには -te を附ける :——
ek 「來る」, ek*te* > et*te* 「來さす」。
oman「行く」, oman*te*「行かす」。
chish「泣く」, chish*te*「泣かす」。
kush 「通る」, kush*te*「通らす」。
mut 「佩ぶ」, mut*te* 「佩ばしむ」。
uk 「取る」, uk*te* 「取らす」。

188. 使役される者の複數を表はす形式に -yar がある。この -yar は r で終る語幹の後では y を脱落せしめて (§ 11, f) -ar となる :——
e-yar「(人々をして)食はしむ」。
ku-yar「(人々をして)飲ましむ」。
chish-yar「(人々をして)泣かしむ」。
kar-yar > karar「(人々をして)作らしむ」。
kor-yar > korar「(人々をして)持たしむ」。
nukar-yar > nukarar「(人々をして)見しむ」。

第 VI 章 形 容 詞

I. 形 容 詞 の 用 法

189. 形容詞には附加語的 (*attributive*) 用法と述語的 (*predicative*) 用法とがある。

A. 附加語的用法に於ては形容詞は必ずその修飾する名詞の前に來る:——

rui apto「烈しい雨」
yupke rera「强い風」
pirka keutum「善い心」
wen puri「惡い根性」
toan ri nupuri「あの高い山」
tan ram chikuni「この低い木」

B. 述語的用法に於ては形容詞は繋辭 (*copula*) なしにそのまゝ述語となる:——

apto rui.「雨が烈しい」。
rera yupke.「風が强い」。
keutum pirka.「心が善い」。
puri wen.「根性が惡い」。
toan nupuri ri.「あの山は高い」。
tan chikuni ram.「この木は低い」。

II. 形容詞の人稱變化

190. 述語的に用ゐられた形容詞は主語の人稱に應じて次の如く變化する:——

	雅語		口語	
	sing.	*pl.*	*sing.*	*pl.*
I.	pon-an 「我幼し」	pon-an 「我等幼し」	ku-pon	pon-ash (*excl.*) pon-an (*incl.*)
II.	e-pon 「汝幼し」	echi-pon 「汝等幼し」	e-pon pon-an (*hon.*)	echi-pon pon-an (*hon.*)
III.	pon 「彼幼し」	pon 「彼等幼し」	pon pon-pa (*hon.*)	pon pon-pa (*hon.*)

(*N.B.*) § 129.

III. 分詞形容詞

191. 第 I 類の動詞は a- 又は chi- を附して形容詞に用ゐる。§ 106. § 110.

192. 第 II 類の動詞はそのまゝ形容詞として用ゐることが出來る :——

hetuku「出る」, hetuku chup「さしいづる朝日」
rikoma「高く昇る」, rikoma chup「高く昇つた日」「眞晝の太陽」
honkor「孕む」, honkor menoko「孕み女」
mokor「眠る」, mokor humpe「眠れる鯨」
ipe「食事する」, ipe tam「食刀」(村正)

IV. 形容詞語尾

193. -an. 本來は「ある」意の動詞。

kera「味」, kera-*an* > keran「美味な」

me「寒氣」, me*an*「寒い」

ramu「心」, ramu*an*「賢い」

指示代名詞から指示形容詞をつくる。§ 86.

ta「そこ」, ta*an*「その」

to「あそこ」, to*an*「あの」

疑問代名詞から疑問形容詞をつくる。§ 81–84.

nekona「如何」, nekona*an*「どんな」

mak「何」, mak*an*「どんな」

194. -ash.

kut「喉」, kut*ash*「聲のよく出る」

mon「手」, mon*ash*「手ばやい」

pa「口」, paw*ash*「雄辯な」

tum「力」, tum*ash*「大力の」

(*N.B.*) § 38.

195. -un. 本來「はまつてゐる」「ついてゐる」意の動詞。

rik「上」, rik*un*「上の」

ra「下」, ra*un*「下の」

sa「前」, sa*un*「前の」

mak「奥」, mak*un*「奥の」

soi「外」, soy*un*「外の」

au「内」, au*un* > aun「内の」

kim「山」, kim*un*「山の」

pis「濱」, pis*un*「濱の」

ya「陸」, ya*un*「陸の」

rep「沖」, rep*un*「沖の」

196. -ush. *pl.* < -un. § 39.

asur「噂」, asur*ush*「評判の」
kem「血」, kem*ush*「血のついた」
numa「毛」, numa*ush*「毛深い」
pe「水」, pe*ush*「濕つぽい」

197. -o. 本來「はいつてゐる」「ついてゐる」意の動詞。
ik「節」, ik*o*「有節の」
ipe「實」, ipe*o*「實の入つた」
ki「虱」, ki*o*「虱たかりの」
kes「斑紋」, ke*so*「斑紋ある」

198. -nu.
chep「魚」, chep*nu*「魚が多い」
rur「潮」, run*nu*「鹽氣多き」「鹽からい」

これが § 194 の形容詞についてその意味を强める:——
kutash*nu*「音吐朗々たる」。
monash*nu*「手ばやい」。
pawash*nu*「雄辯な」。
tumash*nu*「强い」。

199. -ne. 本來は「である」意味の動詞。
mat「女」, mat-ne seta (女である犬)「女の犬」。
chise「家」, chise-ne shir (家をなせる山)「家狀の山」。

「……狀の」「……のやうな」の意味から廣く形容詞語尾になつたのである。
tar「負繩」, tan*ne*「長い」。
tak「塊」, tak*ne*「短い」。
ir「列」, in*ne*「多い」。
sup「卷いたもの」, sup*ne*「うづまける」。
ko「粉」, ko*ne*「粉末の」。

pe「水」, pe*ne*「ベトベトの」。
pin*ne*「雄の」。
ram*ne*「まるまいの」。

200. -kor. 本來は「もつ」意の動詞。
pa「口」, pawetok「口さき」, pawetok*kor*「雄辯の」。
shiretok「美貌」, shiretok*kor*「美貌の」。
teketok「手さき」, teketok*kor*「針仕事のうまい」。
tum「力」, tum*kor*「强い」。

201. -sak. 本來は「を缺く」意の動詞。
apa「身内」, apa*sak*「身内なき」「よるべなき」。
po「子」, po*sak*「子のない」。
tum「力」, tum*sak*「元氣のない」。
tur「垢」, tur*sak*「きれいな」。

202. -nak. < -sak.
shik「目」, shik*nak*「盲目の」。
mo「靜」, mo*nak*「覺めてゐる」。

203. -ke. § 180.
kap「皮」, kap*ke*「禿げた」。
pop「沸騰する(音)」, pop*ke*「暑い」。
nipop*ke*「饐えた」。
han*ke*「近い」。
iwan*ke*「達者な」。
sun*ke*「いつはりの」。

(*N.B.*) kat*ke*mat「淑女」の kat*ke* も恐らくはこれである。 *Cf.* kat「形」。

204. -no. 「よく」の意を添へる。
itak「云ふ」, itak*no*「能辯な」。

ipe「食事する」, ipe*no*「美食の」。

pash「走る」, pash*no*「よく走る」「疾き」。

tuk「成長する」, tuk*no*「すくすくとのびたる」。

205. -ko. 反對の意を添へる。

hanke「近い」, hanke*ko*「近くない」「遠い」。

tuima「遠い」, tuima*ko*「遠くない」「近い」。

setak「暫らくの」, setak*ko*「久しき」。

ohor「久しき」, ohorko「久しからざる」「暫時の」。

sep「廣き」, sep*ko*「廣からざる」「狹き」。

hutne「狹き」, hutne*ko*「狹からざる」「廣き」。

第 VII 章　副　　詞

I. 副 詞 の 成 立

206. 副詞は一般に他の品詞から轉成又は構成される。

A. 名詞から。

i) 時に關する名詞は多くそのまゝ副詞に用ゐられる。

tanto「本日」, numan「昨日」, hoshkanuman「一昨日」, hoshkanuman-etokoannuman「一昨々日」, ukuran「昨夜」, tanukuran「今夜」, shimke「翌日」, ishimke「その翌日」, oyashim「明後日」, oyashimshimke「明々後日」, keshto「毎日」, kesukuran「毎夜」, kespa「毎年」, irukai「暫時」, eshir「先刻」, tane (< tani)「今」, sui「又」, *etc.*

ii) 時に關する名詞の或ものには -ta「に」を附けて副詞に用ゐる。

shineanto*ta*「或日」, tanpa*ta*「本年」, tee*ta*「昔」, ottee*ta*「大昔」, nisat*ta*「明日」。

iii) 所に關する名詞には -ta 及び -un「へ」を附ける (§ 52)。

iv) 形容詞をつくる -ne (§ 199) が副詞をもつくる。

or「内」, kesh「末」, orkesh*ne*「内密に」, ar-orkesh*ne*「全く内密に」。

ir「ひとつゞき」, to「日」, itto*ne*「日歸りに」。

sem「無」, sen*ne*「決して……ない」。

shimke「翌日」, ishim*ne*「その翌日」。

nisatta「明日」, nisatta*ne*「明日」。

ekesh*ne*「あちこち」, e*ne*「然う, 斯う, 何う」, chiki-po*ne*(wa)「あやふく」, kooha*ne*po「笑止や」。

v) 方向を示す -na (§ 58, iii) がやはり副詞をつくる。

rik「上」, rik*na*-puni「上の方へ上げる」。

ra「下」, ra*na*-atte「下の方へ置く」。

kush「通る」, kush*na* nukar「通して見る」「透視する」。

ka「上」, kan*na*「その上に」「又」。

kan*na*-kan*na*「再三再四」。

kan*na*-sui「又候」(kanna も sui も同義——*tautology*.)

mata-sui の形もある。mata は邦語「又」——*hybrid*.

nekon「如何」, nekon*na*「如何に」。

ekushkon*na*「だしぬけに」。

vi) -ko (§ 141).

shir*ko* otke「地面と共に突刺す」「ぐさと刺す」。

shir*ko* kikkik「さんざんに打据ゑる」。

toi*ko* munin「土と共に腐る」「腐りはてる」。

toiko irushka「かんかんに怒る」。

toiko nupetne「すつかり悦に入る」。

toiko mina「につこり笑ふ」。

toiko oira「けろりと忘れる」。

207. B. 代名詞から。

i) 人稱代名詞は全部副詞的に用ゐられる (§ 78–79)。

ii) 指示代名詞の中稱及び遠稱はそのまゝ副詞に用ゐられる (§ 85 ; ii, iii)。

iii) 指示代名詞には尙 -ta 及び -un を附して副詞に用ゐる (§ 85 ; i, ii, iii)。

208. C. 數詞から。

i) 數詞の複合形（名詞形）は全部副詞的に用ゐられる（§ 89)。

ii) -ne をつけるもの。

shinen*ne*「ひとりで」, tun*ne*「ふたりで」, ren*ne*「三人で」, *etc.*

209. D. 動詞から。

i) そのまゝ用ゐられるもの。

rai (「死ぬ」から「非常に」の意味に)。

rai-ayaise > rayayaise「大聲で泣き叫ぶ」。

rai-paraparak「同上」。

rai patukuku「ひどく拗ねてゐる」。

rai nimakaka「同上」。

rai irushka＝toiko irushka (§ 206, vi)。

rai mina＝toiko mina (同上)。

hetopo (「引返す」から「折返して」の意味に)。

hetopo-horka「同上」の形もある。horka「逆に」。

ii) -no によつて副詞句をつくる。

kamui-eraman-*no* (「神が知りつゝ」から「いゝあんばいに」の意味に)。

o-ainu-sak-*no* (「あたりに人なくして」から「水入らずで」の意味に)。

o-shik-sak-*no*「同上」。

sama-shik-sak*no*「同上」。

o-ikkeu-sak*no*「理由もなく」「理不盡に」。

210. E. 形容詞から。

i) 形容詞は一般にそのまゝ副詞に用ゐられる。これは雅語に於て特に著しい。

{hoshki tuki「最初の杯」(主賓に獻ずる)。
{hoshki ek ainu「最初に來た男」。

{koshne suma「輕い石」。
{koshne terke「輕く跳ねる」。

{pirka menoko「美しい女」。
{itak-an chiki pirka inu.「我物申さんによく聞くべし」。

ii) -no を附して副詞をつくる。口語ではこれが副詞の標識として意識されてゐる。

hoshki*no* ek ainu.「最初に來た男」。
koshne*no* terke.「輕く跳ねる」。
pirka*no* inu!「よつく承はれ!」。
shi*no*「非常に, 本當に」, son*no*「同」, mashki*no*「餘りに」, okamki*no*「故意に」, earmatki*no*「一直線に」, poron*no*「どつさり」, pon*no*「少し」等。

211. 指小辭の -po (§ 219) 助詞の ka (「も」) 副詞の sui (「又」) 强勢の -un 等は屢〻副詞に附いてその意味を强める。

i) -po の例。

aneno*po*「辛うじて」
annokip*po*「そつくりそのまゝに」
ene*po*「斯う, 然う, あゝ」
koohane*po*「笑止にも」
puine*po*「獨りで」
shinenne*po*「同上」
tanneno*po*「長々しく」
tane*po*「今」
tam*po*ta「今回」

ii) -ka の例。

nani「すぐに，すぐさま」, nani*ka*「すんでのことに」「危く」

moteki「折角」, moteki*ka*「折角」

monak「さらでだに」, monak-*ka*「さらでだに」

chikipo*ka*「すんでのことに」「危く」

senne「……ない」, senne*ka*「よもや……ない」

somo「……ない」, somo*ka*「よもや……ない」

iteki「ゆめ……(する勿れ)」, iteki*ka*「ゆめ……(する勿れ)」

iii) -un の例。

nanika*un*, motekika*un*, monak-ka*un*, chikipoka*un*, sennekа*un*, somoka*un*, itekika*un*, 等。

iv) -sui の例。

nanika*sui*, nanikaun*sui*, motekika*sui*, motekaun*sui*, monak-ka*sui*, monak-kaun*sui*, chikipoka*sui*, chikipokaun*sui*, senneka*sui*, sennekaun*sui*, somoka*sui*, somokaun*sui*, itekika*sui*, itekikaun*sui*, kaakinam*sui*「苟くも……のくせに」等々。

II. 特殊の形態

212. 相對立する方向を示す副詞に一對づゝの特殊の形態がある。

A. 第 i 種の型。

rik (上，高處) :——

herikashi「上方へ」

horikashi「上方から」

ra (下，低處) :——

herashi「下方へ」

horashi「下方から」

kanna (上方) :——

hekannashi「上方へ」

hokannashi「上方から」

pokna (下方) :——

hepoknashi「下方へ」

hopoknashi「下方から」

sa (前，家の中では爐ばた，外では濱手) :——

hesashi「前へ」「濱手へ」

hosashi「前から」「濱手から」

mak (後，家の中では奥，外では山手) :——

hemakashi「奥へ」「山手へ」

homakashi「奥から」「山手から」

rep (沖) :——

herepashi「沖へ」

horepashi「沖から」

ya (陸) :——

heyashi「陸へ」

hoyashi「陸から」

pe (川かみ) :——

heperai「川上へ」

hoperai「川上から」

pa (川しも) :——

hepashi「川下へ」

hopashi「川下から」

B. 第 ii 種の型。

ror (横座) :——

erorun, eronne「横座へ」

ororun, oronne「横座から」

útur (木尻座) :——

euturun, eutunne「木尻座へ」

outurun, outunne「木尻座から」

shiso (右座) :——

eshisoun, eshisone「右座へ」

oshisoun, oshisone「右座から」

harkiso (左座) :——

eharkisoun, eharkisone「左座へ」

oharkisoun, oharkisone「左座から」

soi (外) :——

esoyun「外へ」

osoyun「外から」

kim (山) :——

ekimun, ekimne「山へ」

okimun, okimne「山から」

pish (濱) :——

epishun, epishne「濱へ」

opishun, opishne「濱から」

chupka (東) :——

echupkaun「東へ」

ochupkaun「東から」

chuppok (西) :——

echuppokụn「西へ」

ochuppokun「西から」

koika (北):——

ekoikaun「北へ」

okoikaun「北から」

koipok (南):——

ekoipokun「南へ」

okoipokun「南から」

pesh (川上にある崖):——

epeshne「川上へ」

opeshne「川上から」

(注意 i) he-, e- は「顏」、ho-, o- は「尻」を意味する接頭辭で、第 I 種は

he-kanna-ashi「顏を上方へ立てる」(尻は下)

ho-kanna-ashi「尻を上方へ立てる」(顏は下)

he-pe-rai「顏が川上にある」(尻は川下)

ho-pe-rai「尻が川上にある」(顏は川下)

第 II 種は

e-soi-un「顏が外にある」(尻は内)

o-soi-un「尻が外にある」(顏は内)

e-soi-ne「顏が外になつてゐる」(尻は内)

o-soi-ne「尻が外になつてゐる」(顏は内)

の如き構造に於て成立したものである。

(注意 ii) この他に尙專ら北部方言に於て用ゐられるものに enon (「何處へ」) 及び onon (「何處から」) がある。

enon e-oman ?「何處へ汝行くか ?」

onon e-ek ?「何處から汝來たか ?」

第 VIII 章 助　詞

I. 體言につくもの

213. (1) ta.

本來は「そこ」を意味する中稱の指示代名詞 (§ 85, ii)。この指示代名詞は副詞にも用ゐられる：

ta an.「そこにゐる」。

それが更に

chise *ta* an.「家そこにゐる」「家にゐる」。

の如き用法に於て格助詞化したものと思はれる：

i) 「に」(*local*)。 § 42.

ii) 「へ」(*terminal*)。 § 43.

iii) 「の」。慣用的な句にのみ許される用法である：

chise-*ta* turesh「家の妹」(血縁の妹)

au-*ta* weishisam「隣の貧乏和人」

kim-*ta* chikoikip「山のけだもの」

rep-*ta* chikoikip「沖のけだもの」

iv) 副詞をつくる。 § 206, ii, iii. § 207, iii.

v) 願望の係となる：

chikap ku-ne.「私は鳥である」。

chikap *ta* ku-ne!「鳥になりたや!」

rera ku-ne.「私は風である」。

rera *ta* ku-ne!「風になりたや!」

okai を以て結ぶこともある：

chikap *ta* ku-ne *okai*!

rera *ta* ku-ne *okai*!

v) 感動の助詞となる：

nep ka aerannakpe isam ruwe-an?

——「何か心配なことが無かつたのであるか」

この ruwe-an には「本當に何か凶いことが無かつたかしら?」といふ程の思ひ入れが既にこもつてゐる。今此の中に ta を割込ませれば感嘆の氣持が愈〻表面に確立して「本當にまあ……なのか」「一體全體……なのか」といふやうな氣持を表はす。次の例も同樣である：

nekona iki wa ene nishpa ne ruwe-*ta*-an?

——「一體まあ何うして斯んなに長者になつたのだらう?」

この ta は副詞及び感動詞の意味を強めることが多い：

nep-*ta*-an?「一體何だい?」

nekon-*ta* ne?「な，なんだつて?」

nekonka-*ta*「ぜひ何とかして」

kashi-un-*ta*「その上にまあ」「おまけにまあ」

hetak-*ta* usa「さあさ早く」

achikara-*ta*! ayakanna-*ta*!「うたてやな!おぞましやな!」

chopara! chopara-*ta*!「ざまア見ろ! 好い氣味だ!」

(2) un.

本來は「はまる」「はまつてゐる」意味の動詞。

tek-*un*-pe「手にはまるもの」(手甲)

sapa-*un*-pe「頭にはまるもの」(冠)

更に「にある」「にゐる」の意味に移つて

Tokyo *un* nishpa「東京にゐる旦那」「東京の旦那」

の如く助詞化したものと思はれる：

i) 「の」。

kim-*un* kamui「山の神」(熊)

rep-*un* kamui「沖の神」(鯱)

ya-*un*-kur 「陸の人」(內地人)

rep-*un*-kur 「沖の人」(外國人)

ii) 「へ」。 § 43.

iii) 副詞をつくる。 § 206, iii. § 207, iii.

iv) 感動の助詞となる：

" ruwe-he ?" " ruwe-*un* ! "

——「さうかい？」「さうだとも！」

" tampe he ? " " toampe *un* ! "

「これかい？」「それよ！」

これが副詞についてその意味を强めてゐることは旣に述べた。 § 211, iii.

(3) ne.

本來は「である」「に成る」意味の動詞である。

i) 「に成つて」「をなして」。(*in.*)

tup *ne* arpa, rep *ne* arpa. (淚で目が曇つて物が
二つ に成つて 行き 三つ に成つて 行く

幾つにもなつて見える)。

hokukanau-*ne*「男聲をなして」「男聲にて」

matkanau-*ne* 「女聲をなして」「女聲にて」

shinen*ne*, tun*ne*, ren*ne* 等 (§ 206, ii)。

ii) 「に」(*loc.*)

chise *ne* patek an.「家にばかりゐる」。

shiso *ne* a.「右座に坐る」。

arorkesh*ne*, ishim*ne* 等 (§ 206, iv)。

iii) 「に」(化成格)。(*into.*)

suma *ne* yaikar.「石に化ける」。

iv) 「として」。(*as.*)

sapa *ne* an-pe 「頭としてあるもの」

hon ne kor-pe「腹として彼もつもの」

(4) kor.

本來は「所有する」意味の動詞。

i) 「の」。但し所屬されるものが人格を有する時に限る。§ 28, 註 1.

ekashi *kor* amip「祖父の着物」

huchi *kor* shinotcha「祖母の唄」(祖母の十八番)

Sanjiro *kor* hapo 「三次郎の母」

ii) 領格代名詞をつくる。§ 80.

(5) ani, ari. 「で」(以格)。

ani は本來は「手に持つ」意味の動詞。ari は ani の變化である。§ 15, d.

(6) wa, wano.「から」(奪格)。 § 44.

(7) tura, turano.「と」(共格)。 § 46.

(8) newa.

ne は「に成る」意味の動詞, wa は接續助詞「て」,「に成つて」が原義である。

i) 「とも」。

tun *newa* oman.「二人とも行つた」。

ii) 「と」。 § 46.

urki *newa* taiki「ノミとシラミ」

(9) pakno.

pak は「量る」意味の動詞, no は副詞法語尾。

i) 「迄」。 § 48.

neita *pakno*「どこまでも」

ii) 「程」。

hem pakno「何ほど」

iii) 副詞にも。

pakno pirka-p isam.「それほど美しいものはない」。

(10) peka.「を通つて」(§ 47)。

(11) kari.「同上」(§ 47)。

(12) ekari.「を廻つて」(§ 47)。

(13) okari.「の周りに」(§ 47)。

(14) akkari.「を過ぎて」(§ 47)。「よりも」(§ 49)。

(15) kama.「を越えて」「を通つて」(§ 47)。

(16) turashi.「に沿うて上へ」(§ 47)。

(17) pesh.「に沿うて下へ」(§ 47)。

(18) esor.「に沿うて下へ」(§ 47)。

(19) kasuno.「よりも」(§ 49)。

(20) sakno.「無しに」(§ 51)。

(21) ikashma.「剩り」(§ 91)。

(22) pishno.「ごとに」(§ 93)。

(23) otutanu.

i) ruyeashkepet *otutanu* ashkepet「親指の次の指」(人差)。

ii) 「……番目の」(§ 97)。

(24) neno.
(25) nepkor, nepekor.
(26) shinne.
(27) kunne.
(28) korachi

} (の如く)

(29) unno.「にかけて」。sapa *unno* arka.「頭にかけて痛む」。

(30) epitta(no). (*all over.*) kotan *epitta*「村ぢゆうに」。

(31) opitta(no). (*all.*) ainu *opitta* paye.「男は皆行つた」。

(32) patek.「のみ」。 menoko *patek* okai.「女ばかりゐる」。

(33) takup(i)「同上」。 menoko *takupi* okai.「同上」。

(34) ka.

類似の形式 (*quasi-postposition*) の ka「上」(§ 59) が「その上に」から「も亦」の意味に移つて行つたものと思はれる。

i)「も」。

ona *ka* asak, unu *ka* asak.「父も無い、母も無い」。

raian kuni *ka* akopan.「死ぬのも嫌だ」。

ene akari *ka* isam.「どうしやうもない」。

ii)「か」。疑問及び否定の語につく。p. 54 參照。

nen *ka*「誰か」, nep *ka*「何か」, neita *ka*「何處にか」, néun *ka*「何處へか」, hempara *ka*「何時か」, nekon *ka*「どうにか」, senne-*ka*「まさか……しまい」, somo-*ka*「同」。

iii) 副詞について意味を强める。§ 211, ii.

(35) kaiki = ka.

(36) poka.「だけでも」「なりとも」。

shito *arke* poka a-e rusui.
粢 のかけらなりとも 我食べ 度し

(37) ne-yakka, nakka.「でも」「も」。

kamui *neyakka* kon rusui-pe mat ne kusu......
神様 で も 持ち 度いもの 妻 である から

ainu *neyakka* menoko *neyakka* okai.
男 も 女 も ゐた

(38) hene.「でも」。

eani *hene* ne kuni patek ku-ramu awa……
汝 でも である かと ばかし 私 思つ たら

kamui *hene* ainu *hene* pirka-p pirka, wen-pe wen.
神樣 でも 人間 でも 好い 者は よく 惡い 者は 惡い

(39) hemem. 「も」。

tampe *hemem* e-kore-ash. 「これも お前に上げる」。

(40) moshma. 「の他に」。

e-*moshma* nen ene itak ya?
汝 の他に 誰が さう 云ふ か

(41) kus(u). 「(の)故に」。

tampe *kusu* ukoiki heashi.
此 の故に 喧嘩が 起つた

(42) koekari(no). 「に限つて」。

to at pon wa hetapne, tanto *koekari*……
日 數が 少い でも あるまいに 今日 に限つて

(43) eashir. 語勢助詞。 e- は充當相 (§ 133–137), ashir は「新しい」といふ意味の形容詞,「やつと……した」といふやうな氣持を含む:

tanto *eashir* shir-pirka.
今日 やつと 晴れた

ekashi ku-koitak ko *eashir* mina.
老人は 私が話しかける と はじめて 笑ふ

e-ki yak *eashir* nekon hawash-pe ta an?
君がし たら それこそ どう 彼等は云ふ の だ らう

(44) eashtapne＝eashir.

(45) he.

i) 疑問の助詞。

tampe *he*? 「これか?」

ii) 反語の係。

rai niukesh-pe a-ne *he* ki?
死に たくない 者 で我あり やは する

(46) amun.
(47) somun. } (反語の係)
(48) hetap, hetapne.

raipe *amun* itak? (死んだものが口を利くか)
死者 やは 物言ふ

e-rai *somun* e-ash? (死んだといふお前がそんな所に立つてゐるか)
汝死し てやは 汝立てる

ainu *hetapne* ene pirka? (人間とも思はれぬ美しさ)
人 たこれ かくも 美しき

(49) tashi.
(50) neshi, nesun (< neshi-un). } (語勢助詞)

i) 推量の係。an-ne (*sing.*) 又は okai-ne (*pl.*) で結ぶ:

pon horkeu sani e-ne ruwe *tashi an-ne.*

——「小狼子にてこそ汝はあんめれ」(アイヌ神謡集 p. 78)。

wakka ewen hawe *nesun okai-ne.*

——「水が無くて苦しんでゐるんだな」(同上書 p. 122)。

ii) 日高地方では反語の係として結びには nek を用ゐる:

ampe *tashi* a-ye hawe-an *nek*?

——「本當のことなんぞ俺は云つたのでないのに」。

a-e-oira wa *tashi* iki-an *nek*?

——「我汝を忘れてやはかくせん」。

(51) tap.
(52) taptap. } (語勢助詞)「ぞ」「なん」「こそ」。
(53) tapne.

(54) anakne.「は」。

isepo kisara tanne.

この文が若し「兎は耳が長い」の意味であるならば isepo

の次に休止を置いて

isepo, kisara tanne.
兎は 耳が 長い

の如く發音される。然るにそれが若し「兎の耳は長い」の意味であるならば

isepo kisara, tanne.
兎の 耳は 長い

の如く isepo kisara は一息に發音し、kisara と tanne の間に休止を置く。この休止をはつきりさせるものとして anakne がある：

isepo *anakne* kisara tanne.「兎は耳が長い」。

isepo kisara *anakne* tanne.「兎の耳は長い」。

anakne は對格にもつくこと勿論である：

sake *anakne* somo a-ku.「酒は我飲まず」。

(注意) 體言につくものにはこの他に向格類似の形式がある。(§ 52-69)

II. 用言につくもの

1. 接 續 助 詞

214. (1) wa.

奪格の wa (§ 46) が「それから」の意味を以て時間關係に轉用せられたものかと考へられる。

i) 「て」。或動作が終つて他の動作が之に續くことを示す：

oman *wa* nukar!「行つて見よ!」

nukar *wa* ek!「見て來い!」

北部方言では之を tek で表はすことがある：

oman *tek* nukar!

nukar *tek* ek!

これは樺太に於ても行はれる：

oman *tex* nukara!

nukara *tex* ex!

wa は一般に異時並列の關係であるが、次の場合は同時である：

kotan epunkine *wa* an.「村を守つてゐる」。

膽振地方の口語では次の場合に限つて wa を省く：

rai (wa) oman.「死んで行く」。

kor (wa) oman.「持つて行く」。

kor (wa) ek.「持つて來る」。

ii) 感嘆の助詞となる：

pirka *wa*! pirka *wa*!「いゝよ！いゝよ！」

kuani ne *wa*!「俺だよ！」

(2) hine＝wa.

nea itanki uk wa e *hine* hoshipire.
その 椀を 取つ て 食べ て 戻した

(3) aine (a-hine). 動作が若干時繼續したその結果を示す。「……するほどに」「あげくに」等の意味である：

oman *aine* kotani ta shirepa.
行く ほどに おのが村 へ 着きにけり

ipe-a ipe-a *aine* honihi yaro shinne an.
食べに 食べた あげく 腹が 詰叺 の如 し

(4) kor.

i) 「つゝ」(同時並列)。§ 166.

rayayaise *kor* ukoiki *kor* okai.
泣き叫び 乍ら 喧嘩し つゝ あり

ii) 「と」(條件)。＝ko. p. 147(11).

(5) kane.「ながら」。§ 165.

mina *kane* ene itaki：「笑ひながら云ふやう」

(6) yak.

i) 「なら」(假定條件)。

poronno e-kor *yak* ponno en-kore!
たくさん 君もつてゐる なら 少し 僕に くれ

ii) 「と」=sekor, ari.

wempe an *yak* a-ye.
不幸が あつた と いふ

(7) yakun ⎫
(8) yakne ⎭ =yak.

(9) chiki.

i) 「なら」=yak.

poronno okai *chiki* ponno ette!
たんと ある なら 少し よこせ

ii) 「……するから」=kusu.

itak-an *chiki* pirka *inu*!
我云ふ から よつく 聞け

iii) 「……たから」=wa-kusu.

amset kata shine okkaipo shirka-nuye ko-kip-shirechiu
高床 の上で 一人の 青年が 刀鞘の彫刻 に 夢中になつ

kane okai *chiki* chi-rara kusu tonchikamani kata
て ゐた ので 我惡戯し ようとて 敷 居 の上に

rok-ash kane "tōroro hanrok hanrok!" ari rek-ash.
坐 つ て トーロロ ハンロク ハンロク と 我鳴いた

(10) ita.「……時に」。

e-ekimne *ita* tan seta tura wa oman!
汝山狩に行く 時 この 犬を つれ て 行け

(11) ko.「……すれば」「……すると」。

paikar-an *ko* upash nin wa mun tuk.
春され ば 雪 消え て 草 萌ゆ

(12) awa.「……したところが」「……したら」。

Panampe ipe kor an *awa*, orota Penampe ek.
パナンペが 食事し て ゐ たら そこへ ペナンペが 來た

ainu ne kuni a-ramu *awa*, seta ne awan.
人間 だ と 思つ たら 犬 だ つた

(13) ike, hike.
(14) aike, ahike.
(15) akusu (單) rokkusu (複)
} =awa.

(16) korka.「けれども」。

tan hekachi pon *korka* ramuan.
この 少年は 小さい けれども かしこい

(17) yakka.「……しても」。

né-pakno yainita *yakka* wen.
どんなに がまんし ても だめ

a-kikkik *yakka* irushka ka somo ki.
たゝかれ ても 怒り も しない

(18) apkusu.
(19) kokusui.
} =yakka.

(20) kotom(no)
(21) noine
} (……らしく)

wen-kur poho ne *kotomno* yarpeshit mi kanan.
貧乏人 の子 だ と見えて ぼろを 着て ゐた

teeta nishpa ne, tane wenkur ne *kotom* shiran.
むかしは 金持 で 今は 貧乏人 である らしく 見える

tuima apkash-pe ne *noine* shinki-ipor eun kane.
遠く 歩いて來たもの である らしく 疲勞の色を 浮べ てゐた

(22) pokor, apkor (膽振)
(23) pekor, apekor (日高)
} (……かの如く)

......ari itak *pokor* yainu-an awa mosh-an.
と 彼云つた かと 我思つた ら 目がさめた

apto ash *apkor* nupe rapapse.
雨 ふる 如く 淚 ふる

(24) ari (膽振)
(25) sekor (日高)
} (……と)

"Poropet" *ari* a-ye kotan ta "Sampe" *ari* a-ye
幌別 と いふ 村 に 三平 と 申す

nishpa an.
長者が ゐる

terkepi anakne "tōroro hanrok hanrok!" *ari* rek.
蛙 は トーロロ 半六 半六 と なく

(26) manu.

i) 「……と」(間接敍法)

an *manu* a-ye awa nupetne.「あると我云つたら彼よろこんだ」。

ii) *expletive.*

a-ye-*manu* Poropet-kotan (名にし負ふ……)
人の云ふ 幌別の里

(27) kuni. (p. 194)

(28) kunak (< kun-yak)=kuni (iv)

(29) kusu.

i) 「……から」「……ので」(原因又は理由)

kamui ne *kusu* kamui-ipor eun kane.
神様 である から 神 祭を 備へ てゐる

ii) 「……せんとして」「……するために」

ekashi nina *kusu* ekimun oman
爺さんは 柴刈り に 山へ 行き

huchi ihuraye *kusu* pet otta san.
婆さんは せんたく に 川 へ 行つた

iii) 感嘆の助詞

ene-an *kusu* > enan*kusu*!「なるほどねえ」

ine-ap-*kusu*, ine-ap-*kusu*-un > ineap*kusu*n「何てまあ……」

inkar *kusu*!=inkar!「これこれ!」「もしもし」「ちょいと」(*Eng. lo*!)

iv) 命令の間接敍法

"ahun!" ari itak.=*i*-ahun-*ke* *kusu* ye.
(汝)入れ と 彼云つた 我を入れる べく 彼云つた

"oman!" ari itak.=*i*-oman-*te* *kusu* ye.
(汝)行け と 彼云つた 我を行かす べく. 彼云つた

(30) katu.「様子」「有様」「狀態」

tam eok *katu* oarar-isam. (縦横無盡に刀を振廻せど)
刀の ひつかゝる様子 更に なし

(31) ruwe. 事實に就いて確説する (確説法)

ek *ruwe* oarar-isam.
彼來る 形跡 更に なし

oman *ruwe* ka a-eramishkare.
彼行つた こと も 我 知らなかつた

(32) humi. 主觀的な判斷を示す (感説法)

ek *humi* ka isam.
彼來る けはひ も ない

orun yaishikarun-an; wentarap-an *humi* ne awan.
とたんに 目がさめた 夢を見た の で あつた

(33) hawe. 聞いたことに就いて述べる (聞説法)

ek *hawe* a-nu.
彼來る 由 我聞いた

ene ne *hawe* ne yakun, i-tom-kokanu yan!
さう いふ 次第 でした ら 私に まかせなさい

(34) shiri. 目で見てゐる様子に就いて述べる (見説法)

oman *shiri* a-nukar.
彼行く のが 見える

ene a-raike-p orake *shiri* oarar-isam.
あんなに 殺されたのに 減る 様子 更に なし

「……のに」

chisautari shinki *shiri* suke ki wa unkopunpa. (神謠集 86 頁)
我姉たち 疲れてゐる のに 炊事 し て 我に捧げた

wen-ash *shiri* chi-wen-chisehe koshirepa *shiri* iyairaikere.
我々貧乏してゐるのに 我々の粗末な家 にお出で のこと 感謝の至り

2. 終　助　詞

215. (1) ya. 疑問の助詞

an *ya* somo *ya*?「ありやなしや?」

nen ene itak *ya*?「誰がさう云つたか?」

(2) hani (*sing.*) } (命令の助詞)
(3) yan (*pl.*) }

oman *hani*!「行けよ!」(*sing.*)

paye *yan*!「同上」(*pl.*)

單數には hani 複數には yan を用ゐるのが原則であるが、丁寧に云ふ時は唯一人に對しても yan を用ゐ、又大勢に對しても yan に添へて hani を用ゐる:

echi-eaikap chiki kamui tomo-kokanu *yan hani*!

——「貴方がたに出來ない時は神様にお委せなさい!」

(4) ro. 第一人稱複數に對する命令。*let us*……

paye-an *ro*!「行きませう!」

hokure ipe-an *ro*!「さあ食事しませう!」

(5) rusui 願望の助詞

kerampe ne yakun a-e *rusui*.
うまいもの である なら 食べ たい

pirka-p ne chiki a-kon *rusui*.
よいの である なら 持ち たい

(6) nankor

i) 想像の助詞

e-kikkik ko nani rayayaise *nankor*.
汝 叩け ば すぐ 彼泣く だらう

ainu somo ne, kamui ne *nankor*.
人 では なく 神 である だらう

ii) 柔かな命令

echi-ki *nankor* na.「お前達するんですよ」。

iii) 反語

"achikara-ta wenkur hekachi toan chikappo kamui
あらをかしや 貧乏人の 子 あの 小鳥 神様の

chikappo akor konkani-ai ka somo uk ko, e-nepkor-an
小鳥は 俺達の 黄金の 矢 でさへもお取りにならないのに お前 のやうな

wenkur hekachi kor yayan ai munin-chikuni-ai toan
貧乏人の 子 の たゞの 矢 朽ち 木の 矢を あの

chikappo kamui chikappo shino shino uk *nankor* na!"
小鳥 神様の 小鳥が さぞ さぞ お取りになる だらう よ

(7) kasui.「……し過ぎる」

pon *kasui*.「小さすぎる」。

wen *kasui*.「悪すぎる」。

(8) raike「……しすぎる」

nishmu *raike*.「さびしすぎる」。

(9) na 指定（或は感嘆）

teta an *na*.「こゝにあるよ」。

ek *na* ek *na*.「來たよ來たよ」。

(10) kus(u)-ne (p. 195-197)

(11) ruwe
(12) ruwe-an (*pl.* ruwe-okai)
(13) ruwe-ta-an (*pl.* ruwe-ta-okai)
}（確說法）

i) 疑問 ii) 感嘆

pirka *ruwe*?

=pirka ruwe-an?

=pirka ruwe-ta-an?
美しい のかい

nep pirka *ruwe*!

=nep pirka ruwe-an!

=nep pirka ruwe-ta-an!
何と 美しい ことよ

(14) ruwe-ne （確說法）

事實に就いて念を押す氣持である：

tampe ku-kor-pe ne *ruwe-ne*.
これ 私のもの な のよ

ukuran ek *ruwe-ne*.
昨夜 彼來た のである

(15) humi-ash
(16) humi-an } (感説法)
(17) humi-ne

apto ash *humi-ash*.「雨が降つてるやうだ」(傍觀的)
keran *humi-an*.「まづくもないやうだ」(一口食べて見て)
ukoiki *humi-ne*.「喧嘩だよ、きつと」(想像)

(18) hawe
(19) hawe-an (*pl.* hawe-okai) } (聞説法)疑問(或は感嘆)
(20) hawe-ta-an (*pl.* hawe-ta-okai)

a-kore ko nekon ne hawe?
=a-kore ko nekon ne hawe-an?
=a-kore ko nekon ne hawe-ta-an?
我彼に與へたら どう だ といふのか

(21) hawe-ash } (聞説法)「……といふ話である」
(22) hawe-ne

Iyochi-un-kur tureshi turano a-tak a *hawe-ash*.
余 市 人 が 妹 と共に 招かれ た 由

hattar oro oshma wa rai *hawe-ne*.
淵 へ はまつ て 死んだ とさ

(23) shiri
(24) shiri-an (*pl.* shiri-okai) } (見説法)
(25) shiri-ta-an (*pl.* shiri-ta-okai)

問又は驚きを表はす:

nep-sui pom-menoko pirka *shiri*?!
=nep-sui pom-menoko pirka *shiri-an*?!
=nep-sui pom-menoko pirka *shiri-ta-an*?!
何とまあ 少 女の 美しい こ と よ

(26) shiri-ne (見説法)

目前の現象又は事實に就いて「……である」「……した所

である」とことわる氣持:

Shinutapka-un-kur a-ko-asur-ani kusu ek-an *shiri-ne.*
シヌタプカびとに 我知らせん とて 我來れる 所なり

(27) okai. 強い願望を表はす (pp. 137-138)

「鳥に成りたや」なる文は三つの形式によつて表現される:

i) chikap *ta* ku-ne!

ii) chikap *ta* ku-ne *okai*!

iii) chikap ku-ne *okai*!

(28) an-ne (*sing.*), okai-ne (*pl.*) 推量の結び (p. 144)

(29) nek. 反語の結び (p. 144)

(注意) この他に倚態の助詞がある (§ 162-170)。

第IX章　感歎詞

216. ayo ⎫ (苦痛)
ayapo ⎭

ainupata ⎫
ainupotaun ⎬ (羨望)「いゝなあ!」
ampotaun ⎭

achikara (厭惡)「きたない! けがらはしい!」

ayakanna (愕き)

ayakatcha (厭惡・意外)

chopara「ざまア見ろ! 好い氣味!」

haí (苦痛)

haí ku-sapa!「頭が痛い!」

haí ku-shiki!「眼が痛い!」

haí ku-teke!「手が痛い!」

haí ku-ramu!「アヽびつくりした!」

hap (食物の感謝)「ご馳走さま!」

hetak ⎫
keke-hetak ⎬ (誘ひ)「さア! いざ!」
hokure ⎭

kanna＝ayakanna

katcha＝ayakatcha

mamta (愛撫)

(ko) nepkeukata ⎫ (なさけなや!)
(ko) nepkashita ⎭

oi oi　(物を貰つた時の感謝)
oyoyo　(苦惱)「苦しや！」
ononno　「ばんざい！」
shipakar　(愛撫・憐憫)

217. iram(h)ayaisere「かあいさうに！」
iramasure　「きれいだなあ！」
iramishka(re)「知りませんねえ！」
iramkittarare, iramkittarara「氣味が悪いなあ！」
iramkursere「おそろしや！」
iramkoiki　「氣の毒な！」
irammakaka「心地よや！」
iramnukuri　「お氣の毒な！」
irampatekka「氣まづいなあ！」
irampekamama「不愉快だ！」
irampottarare, irampottarara「やかましい！」
iramsarakka「せつなさよ！ やるせなや！」
iramshitnere「うるさいなあ！」
iramtuipa　「おどろいたな！」
iramtoinere　「おどろいたな！」
ichakkere　「きたない！」
ikarashki　「惜しいなあ！」
inunukashki「かあいさうに！」
irankarapte　「なつかしや！」
isshirkuran(tere), isshikan「たまげた！ あきれた！」
iyainumare　「おどろくべし！」
iyairaikere　「ありがと！」
iyosserkere　「おどろいた！ あきれた！」

第 X 章　成語論 (*word-formation*)

I. 派 生 法 (*derivation*)

218.　接頭辭

(1)　a-　i)　雅語第一人稱主格單數及び複數 (§ 101)

ii)　口語第一人稱主格複數包括形 (§ 101)

iii)　口語第二人稱敬相主格單數及び複數 (§ 101)

iv)　汎稱 (§ 102)

v)　不定稱 (§ 103)

vi)　中相 (§ 104)

vii)　所相 (§ 105)

viii)　分詞法 (§ 106)

(2)　am-　平面狀の物に附いて「ひろやかな」といふ氣持を添へる：

am-set＝set「臺座」

am-so＝so「床」

am-sokkar＝sokkar「敷蓙」

am-toi＝toi「大地」

(3)　an-＝a-

(4)　ar-　i)「一」

ar-sui「一囘」

ii)「半」「片」

ar-nan > *an*nan「半顏」

ar-shik「片目」

ar-tek > *an*tek「片手」(北部方言)

iii)「反對側の」

ar-rur > *an*rur「反對側の海」(日本海から云へば太平洋、及びその逆)

ar-so「反對側の座席」(右座から云へば左座、横座から云へば木尻座、及びその逆)

iv)「全く」(*intensive*)

ar-onuman「全くの日暮れ」(名詞)

ar-ramasu > *an*ramasu「全く好いなと思ふ」(動詞)

ar-wen「全く悪い」(形容詞)

ar-ekushkonna「全くだしぬけに」(副詞)

(5) chi- i) 雅語第一人稱主格 (神謠) (§ 101)

ii) 口語第一人稱主格複數對立形 (§ 101)

iii) 汎稱 (§ 107)

iv) 不定稱 (§ 109)

v) 中相 (§ 108)

vi) 分詞法 (§ 110)

(6) e- 第二人稱單數主格及び目的格 (§ 101)

(7) e- 指相 (§ 133-137)

(8) e-=he-「顔」(§ 212, B, 注意)

(9) ear=ar (i, ii, iv)

*car*saineno「一巻きに」

*car*matkino「一直線に」「どこへも寄らずに」

*car*kaparpe「一枚の薄物」

*can*nan「半面」

(10) echi- 第二人稱複數主格及び目的格 (§ 101)

(11) en- 口語第一人稱單數目的格 (§ 101)

(12) en- 間隔を示す

ka「(接觸して)上」(*on*): *en*-ka「(離れて)上」(*over*) (§ 59)

pok「(接觸して)下」(*under*): *en*-pok「(離れて)下」(*below*) (§ 60)

(13) he- i)「顏」(§ 126)

ii) 方向を示す副詞をつくる (§ 212, A)

(14) ho- i)「尻」(§ 122)

ii)「陰部」

iii) 方向を示す副詞をつくる (§ 212, A)

(15) i- i) 雅語第一人稱目的格單數及び複數 (§ 101)

ii) 口語第一人稱目的格複數包括形 (§ 101)

iii) 口語第二人稱敬相目的格單數及び複數 (§ 101)

iv) 汎稱目的格 (感歎詞の接頭辭) (§ 217)

v) 第一人稱單數主格 (§ 111)

vi) 第三人稱領格 (§ 112)

vii)「それが」(§ 113)

viii)「それを」(§ 114)

(16) in- 第一人稱目的格 (樺太方言) (§ 123, i, 注意 iii)

(17) ir- 「ひとつゞき」

ir-humse hau「一齊に huō hum! と雄誥びをあげる聲」

ir-hetche hau「一齊にヘイッ! ヘイッ! と和する聲」

*ir*pe (ひとつゞきのもの)「兄弟」mach*ir*pe (< mat-irpe)「姉妹」

*in*rur-peka (ir-rur-peka)「海ばかり通つて」

*ir*wak (< ir-u-ak)「兄弟」

(18) kan- 「上部·表面」

kan-ipor「顔色」

kan-kap「皮」

kan-kitai「頭のてつぺん」

kan-pasui「箸の上部」

kan-toi「地表」

(19) ku- 口語第一人稱單數主格 (§ 101)

(20) kur-

*kur*ka=ka「上」(§ 59)

*kur*pok=pok (§ 60)

*kur*tom (< kur-tom)=tom「中」(§ 55)

(21) ko- 指相 (§ 141–145)

(22) kot-

*kot*cha (< kot-sa)=sa「前」

*kot*pok=pok「下」

(23) no- 「美稱」

*no*yuk「良熊」

*no*shki (< no-oshke)「まん中」

*no*nukar「よく見る」

*no*hankeno「ずうと近く」

(24) o- 指相 (§ 138–140)

(25) o-=ho- (§ 212, B, 注意)

(26) oar-=ar- (ii, iv)

i) 「半」「片」

oar-nan > oannan「半顔」

oar-shik「片目」

oar-tek > oattek「片手」

ii) *intensive.*

oar-isam 「全然ない」

oar-oira 「すつかり忘れる」

oar-wen 「とても駄目」

(27) oarar-＝oar-＝or-＝ar-

(28) or- *intensive.*

or-hetopo 「すぐ折返して」

or-oyachiki 「全く案に相違して」

or-setakko 「随分永らく」

or-teeta 「大昔」

(29) pi- 「微」「小」

pi-chish 「忍び泣き(する)」

pi-itak 「ひそひそ話(する)」

pi-mina 「忍び笑ひ(する)」

pi-opke 「かすかな屁(をひる)」

(30) ru- 「半」

ru-chi 「半熟の」

ru-haita 「半馬鹿の」「一寸足りない」

ru-mokor 「半眠り(うとうとしてゐる)」

(31) san- 「出てゐるもの」

san-cha＝cha 「口」

san-nan＝nan 「顔」

san-par＝par 「口」

san-ota＝ota 「砂濱」

(32) sem-

i) *privative.*

setakno 「暫時」, sem-setakno 「久しく」

ohonno「久しく」, sem-ohonno「暫時」

ii) *pejorative*（或は *expletive*）

sem-iporkan toine kane「面色土色になつて」（神謠集 86 頁）

kanantano-kane a-*sem*-shiksama chikurure.（ユーカラの研究 875 頁）
ふ と 我 目の前 陰つた

（前者は「顔色つたらまるで無い」の氣持、後者は「見るともなく見ないともなく」の氣持）

sem-korachi = korachi

(33) shi-

i)「本當の」「眞の」（§ 151）

ii)「大なる」（§ 151）

iii) 再歸相（§ 151–153）

(34) shir-

i)「天候」「氣候」

shir-pirka「天氣がよい」（晴天）

shir-wen「天氣が惡い」（嵐）

shir-peker「夜が明ける」 shir-kunne「日が暮れる」

shir-sesek「時候が暑い」 shir-nam「時候が冷い」

shir-apa「雨が漏る」

ii)「大地」

shir-shimoye「大地が搖れる」（地震）

shir-rupush > shinrupush「大地が凍てつく」

shir-uhui「大地が燃える」（野火・山火）

shir-uwante「國見をする」

iii)「目前の空間」

shir-hutne「場所が狭い」「ま狭な」「て狭な」

shir-sep「場所が廣い」「ま廣い」「て廣い」

iv) *intensive.*

shir-kupa 「がぶりと嚙みつく」

shir-kuta 「ぶちまける」

shir-oterke「ぶち踏む」

shir-otke 「ぶち刺す」

(35) tui-

tui-ka=ka「上」, tui-pok「下」=pok, tui-sam「側」=sam

(36) u- 兩數 (§ 40)

互相 (§ 146-148)

(37) un- 雅語第一人稱目的格 (神謠) (§ 101)

口語第一人稱目的格複數對立形 (§ 101)

(38) yai- 「たゞの」(§ 149)

再歸相 (§ 149-151)

(39) kes-

kes-to「每日」, kes-ukuran「每夕」, kes-pa「每年」

219. 接尾辭又は語尾

(1) -a 形容詞接尾辭 (§ 88)

(2) -a 他動詞法接尾辭 (§ 121, 126)

(3) -a(ha) 名詞具體形語尾 (§ 21)

(4) -an 人稱接尾辭 (§ 101)

(5) -an 動詞法接尾辭 (§ 174)

(6) -an 形容詞法接尾辭 (§ 193)

(7) -ash 人稱接尾辭 (§ 101)

(8) -ash 動詞法接尾辭 (§ 39)

(9) -ash 形容詞法接尾辭 (§ 39)

(10) -at 形容詞法接尾辭 (§ 39)

(11) -atki 動詞多回態語尾 (§ 156)

(12) -chi 複數 (§ 101, 注意 i)

(13) -e 他動詞又は使役相 (§ 186)
(14) -e 他動詞法語尾 (§ 121, 126)
(15) -e(he) 名詞具體形語尾 (§ 17, 18, 21)

(16) -ha 名詞具體形語尾 (§ 17)

(17) -hi 名詞法語尾 (§ 75, i)

(18) -hi 名詞具體形語尾 (§ 17)

(19) -hitara 動詞持續態語尾 (§ 157)

(20) -hu 名詞具體形語尾 (§ 17)
(21) -he 名詞具體形語尾 (§ 17)
(22) -ho 名詞具體形語尾 (§ 17)

(23) -i=-hi 名詞法語尾 (§ 75, i)
(24) -i(hi) 名詞具體形語尾 (§ 19, 20, 21)
(25) -i 他動詞法語尾 (§ 121, 126)

(26) -ike=hike 名詞法語尾 (§ 75, ii)

(27) -itara=hitara 動詞持續態語尾 (§ 157)

(28) -ka 他動詞法接尾辭 (§ 182)
(29) -ka 副詞接尾辭 (§ 211)

(30) -kar 動詞法接尾辭 (§ 174)
(31) -kar *expletive*
nuina*kar*=nuina「隠す」

hotanu*kar*＝hotanu「訪ねる」
hotuye*kar*＝hotuye「呼ぶ」
turi*kar*＝turi「伸ばす」

(32) -ki 動詞法接尾辭
hap「感謝」hap-ki「hap！ hap！と感謝する」
saimon「探湯」saimon-ki「探湯する」
tasum「病氣」tasum-ki「病氣する」
hau「聲」hau-ki「云ふ」

(33) -ke (he)
i) 語根について名詞をつくる
ar-ke 「半分」
kim-ke「山」
or-ke 「處」
pan-ke「かみ」
pen-ke「しも」
rep-ke「沖」

ii) 名詞（の抽象形及び具體形）について「處」の意味を表はす
chorpoki＝chorpoki*ke*「(そ)の下」
kashi＝kashi*ke*「(そ)の上」
kotcha＝kotcha*ke*「(そ)の前」
sama＝sama*ke*「(そ)の側」
tukari＝tukari*ke*「(そ)の手前」
tumu＝tumu*ke*「(そ)の中」

(34) -ke 動詞法（§ 180）
(35) -ke 他動詞法（§ 181）
(36) -ke 形容詞法（§ 203）
(37) -ko 形容詞語尾（§ 205）

(38) -ko 副詞法語尾 (§ 206, vi)

(39) -kor 動詞法接尾辭 (§ 175)
(40) -kor 形容詞法接尾辭 (§ 200)

(41) -kosanu ⎫
(42) -kosampa ⎭ 一回態 (§ 154)

(43) -ma

i) 名詞法語尾

ni*ma*「木鉢」(ni「木」)
tes*ma*「カンヂキ」(tes-ke「反る」tes-u「反らす」)

ii) 形容詞語尾

tui*ma*「遠い」
ram*ma*「常住の」 ram*ma*-kane「常住に」
mosh*ma*「他の」

iii) 動詞法語尾 (§ 178)

(44) -na 形容詞法語尾 (§ 58, iii)
副詞法語尾 (§ 206, v)

(45) -nak 形容詞法接尾辭 (§ 202)

(46) -natara 持續態 (§ 157)

(47) -ne 動詞法接尾辭 (§ 176)
形容詞法接尾辭 (§ 199)
副詞法接尾辭 (§ 206, iv ; 208, ii)

(48) -no 形容詞法接尾辭 (§ 204)
副詞法接尾辭 (§ 209, ii ; 210, ii)

(49) -nu 動詞法接尾辭 (§ 177)

形容詞法接尾辭 (§ 198)

(50) -o(ho) 名詞具體形語尾 (§ 21)

(51) -o 動詞法接尾辭 (§ 173)
形容詞法接尾辭 (§ 197)

(52) -o 他動詞法語尾 (§ 121, 126)

(53) -oshma 瞬間態 (§ 159)

(54) -ot 動詞法接尾辭 (§ 39)
形容詞法接尾辭 (§ 39)

(55) -p 名詞法語尾 (§ 75, iii)
副文章 (§ 75, iii)

(56) -pa 目的物複數法 (§ 121)
動主複數 (§ 122)
敬稱語尾 (§ 122)

(57) -pe＝-p (§ 75, iii)

(58) -po 指小辭 (*diminutive*)

i) 「小さいもの」

chep	「魚」	chep*po*	「小魚」
chikap	「鳥」	chikap*po*	「小鳥」
menoko	「女」	menoko*po*	「少女」
okkai	「男」	okkai*po*	「青年」

ii) 「可愛いもの」(愛稱又は親稱)

achi*po* 「父さん」
ha*po* 「母さん」
yu*po* 「兄さん」
kaka*po* 「姉さん」

iii) 感歎の接尾辭

"ayа*po*! oyoyo(*po*)! wakka*po*!"
——「おゝ痛! 苦しい! 水よ!」(アイヌ神謠集 123 頁)

iv) 副詞について意味を強める (§ 211)

(59) -ram 抽象名詞
kem*ram*「饑餓」
pon*ram*「幼少」

(60) -re 他動詞化接尾辭 (§ 183)
使役相接尾辭 (§ 184)

(61) -rototo, rototke 繼起態 (§ 155)

(62) -sak 形容詞法接尾辭 (§ 201)

(63) -shi *intensive*
ka*shi*「(そ)の上」
ne*shi*「こそ」(§ 213, 50)
ta*shi*「こそ」(§ 213, 46)

(64) -se 動詞法接尾辭 (§ 179)

(65) -ta 形容詞法接尾辭 (§ 213, 1, iii)
副詞法接尾辭 (§ 213, 1, iv)
感歎の接尾辭 (§ 213, vi)

(66) -te 他動詞化接尾辭 (§ 183)
使役相接尾辭 (§ 184)

(67) -tek 輕微態 (§ 157)
形容詞法
kut*tek*「黑い」
sat*tek*「痩せた」
ret*tek*「老衰した」
yau*tek*「冷却した」

(68) -u(hu) 名詞具體形語尾 (§ 20, 21)

(69) -u 他動詞化語尾 (§ 121, 126)

(70) -un 形容詞法接尾辭 (§ 197)
副詞法接尾辭 (§ 206)
intensive (§ 211, iii)

(71) -ush 形容詞法接尾辭 (§ 197)

(72) -yar 使役相複數接尾辭 (§ 188)

220. 末音 -k, -m, -n, -p, -r, -s, -t：

ra「下」, ra*m*「下の」, ra*n*「下る」, ra*p*「下る」, ho-ra*k*「崩れ落ちる」, ra*s*nachitke「垂れ下る」, ra*t*ki「同」, ho-ra*t*-u「ずれ下る」等

ri「上・高」, ri*k*「高み」, riki*n*「上る」, riki*p*「上る」, ho-ri*p*-i「踊る」(尻を上げる) 等

sa「前・側」, sa*m*「側」, sa*n*「前へ出る」, sa*p*「同」, ho-sa*r*-i「振向く」(尻を前へやる) 等

mak「後」, maka*n*「後へ行く(歸る)」, maka*p*「同」

ya「陸」, ya*n*「上陸する」, ya*p*「同」

po「子」, po*n*「小さい」

pa「川口」, pa*n*「しもの」

pe「水源」, pe*n*「かみの」

ka「上」, ka*n*「上の」, ka*p*「皮」, ka*m*-u「かぶせる」

pok(i)「下」, poki*n*「劣れる・弱い」

tope「乳汁」, tope*n*「甘い」

iso「山幸・海幸」, iso*n*「獵運めでたき」

o「入れる」, o*r*「內」, o*sh*「同」

o「尻」, o*k*「衿首」, o*k*a「後」, o*sh*「同」

o「ある」, o*t*「澤山ある」

a「ある」, a*n*「同」, a*sh*「同複數」, a*t*「同複數」
u*n*「附いてゐる」, u*sh*「同複數」
ni「木」, ni*t*「棒」, ni*p*「柄」
te*k*「手」, te*m*「同」
pe「水」, pe*t*「川」
isa*m*, se*m*, so*m*o, sa*k*（いづれも「無い」）
rok「坐る」, ro*sh*-ki「立てる」
ma*k*-a「開ける」, ma*s*-a「同」
chi*k*「滴る」, chi*r*「滴(る)」, chi*sh*「泣く」
oya「他の」, oya*k**「他所」

II. 合成法 (*composition*)

221.「名詞＋名詞」

所謂對等關係や一致關係のものは無く、總べて先行要素が後續要素を修飾する主從關係のものばかりである：——

kamui-kotan「神の國」
ainu-moshir「人間の國」
ape-huchi「火の婆神」
wenkur-ekashi「貧しき老爺」
kaparpe-itanki「薄作りの椀」
repunkur-atui「外國人の海」(外洋)

先行要素は概念を表示するだけであるから一般に抽象形である。從つて或る合成名詞が何等かの人稱に屬してゐる場合には後續要素のみを具體形にするのである：——

---

* -k には場所の意多し：——
ri*k*「高み」, po*k*「下」, ma*k*「後」, kopa*k*「傍」, huna*k*「何處」等。

shik-kap	「瞼」	shik-kap*u*(hu)	「彼の瞼」
shik-kes	「目尻」	shik-kes*e*(he)	「彼の目尻」
shik-num	「目玉」	shik-num*i*(hi)	「彼の目玉」
shik-pui	「瞳孔」	shik-puy*e*(he)	「彼の瞳孔」

222. 「名詞＋動詞（又は形容詞)」

先行の名詞が主格で後續要素が第 II 類である場合にはその名詞は一般に具體形をとる。かゝる構成の合成語に於ては對象の一部分に就てその性質を述べる場合が多いからである:——

kew*e*-ram「短軀の」(體が低い)
kew*e*-ri「長身の」(體が高い)
kuch*i*-ashkai「聲がよい」(喉が有能)
kuch*i*-kanna「饒舌の」(喉が頻繁)
par*o*-rui「饒舌の」(口が烈しい)
ram*u*-an「賢い」(心がある)
nan*u*-wen「トウベツカジカ」(顔が惡い)
shik*i*-poro「カズナキの一種」(目がでかい)

先行の名詞が目的格で後續要素が第 I 類である場合にはその名詞は抽象形又は具體形をとる (§ 130–132)。

III. 反復法 (*reduplication*)

223. 動詞（又は形容詞）の反復

I. 語幹を反復するもの (*gemination*)——反復態

chik-chik「ポタポタ滴る」
herkai-herkai「ピカリピカリ光る」
kem-kem「ベロベロ舐める」

kik-kik「ポカポカ殴る」
kui-kui「咀嚼する」
paru-paru「バタバタあふぐ」
pita-pita「幾重にも縛つてあるものを解く」
shina-shina「幾重にも縛る」
shinu-shinu「膝行する」
shiru-shiru「ゴシゴシ擦る」
tata「ブツブツ切る」
terke-terke「ピョンピョン跳る」

II. 語根を反復するもの——反復態

char-char-i > chatchari「パッパと撒く」
chim-chim-i「指で探る」
e-tai-tai-e > etaitaye「グイグイ引く」
kai-kai-e > kaikaye「ポキポキ折る」
kom-kom-o「ゴキゴキ折曲げる」
kos-kos-o「手で持つて重さを量る」
sui-sui-e > suisuye「ゆすぶる」
tur-tur-i > tutturi「伸ばし伸ばしする」
tui-tui-e > tuituye「簸る」
pat-pat-u「パッパッと撥ねかす」
pun-pun-i「グングン持上げる」
pet-pet-u「ベリベリ裂く」
moi-moi-e > moimoye「揺り動かす」
ran-ran-i「グイグイ押し付ける」
rut-rut-u「グイグイ押し進める」
rui-rui-e > ruiruye「ヒシヒシと抱きしめる」
ter-ter-ke > tetterke「ヨロヨロする」

pat-pat-ke「パッパッと撥ねる」
moi-moi-ke「うごめく」
sesserke「シャクリ上げる」
tuntunke「クスクス笑ふ」
kar-kar-se「コロコロ轉る」
tok-tok-se「鼓動する」

III. 語根の頭音以外の部分を反復するもの――持續態

chir-ir「ポトポト滴りつゞける」
pash-ash「走りつゞける」
char-ar-ke「サラサラと鳴りつゞける」
heu-eu-ke「傾いてゐる」
mai-ai-ke > mayaike「かゆい」
pat-at-ke「パタパタと音がする」
pet-et-ke「ぼろぼろに裂けてゐる」
per-er-ke「ビリビリ破ける」
pur-ur-ke「コンコンと湧く」
put-ut-ke「ブツブツ音が出つゞける」
reu-eu-ke「撓んでゐる」
tes-es-ke「ヒクヒク動いてゐる」
sum-um-ke「萎んでゐる」
char-ar-se＝chararke
rap-ap-se「ボロボロこぼれる」

IV. 語幹の最後の音節を反復するもの――持續態

chupu-pu「つぼめてゐる」
echiki-ki「したむ」
enitomo-mo「見つめる」
harutu-tu「操る」

hepoki-ki 「俯いてゐる」
maka-ka 「開けてゐる」
masa-sa 「同上」
moso-so 「搖起す」
pirasa-sa 「ひろげてゐる」
putu-tu 「突出してゐる」
toko-ko 「飛び出さしてゐる」
tuku-ku 「突出してゐる」
yonkoro-ro 「待伏せてゐる」

224. 名詞の反復

I. 聽覺的に反復される表象——擬聲語

aiai > ayai 「赤兒」
chakchak 「ミソサヾイ」
kararat 「ハシボソガラス」
owewe 「熊の仔」
tutut 「ツヽドリ」

II. 視覺的に反復される表象

A. 反復される動作——擬容語

esoksoki 「啄木鳥」(顔を振り振りする, *Cf.* shisoksok 「身をゆすぶる」)
erairai 「ブヨ」(顔が下がり下がる)
mosospe 「蛆」(うごめくもの)
ochiuchiu 「鶺鴒」(尾が下がり下がりする)

B. 集合又は複數 (§ 38)

III. 心理的に反復される表象

oyashimshimke 「明々後日」(*Cf.* oyashim 「明後日」)

225. 副詞 (又は助詞) の反復——强調

shino-shino pirka.
實に 實に よい

tane-tane chish anke-anke iki.
今にも今にも 泣き さうに さうに する

kikkik aine-aine konere.
叩き叩き して して 粉にした

第 XI 章 文 章 論

I. 文 の 形 式

226. 命令文の形式

動詞に主格の人稱接辭の附かない形が命令形である:——

ek! 來れ!

inkar! 見よ!

ek wa inkar! 來りて見よ!

en-nure! 私に聞かせよ!

en-kore! 私におくれ!

en-nure wa en-kore! 私に聞かせておくれ!

單數に hani, 複數に yan 等の助詞を添へても云ふ:——

inkar hani! (汝)見よ!

inkar yan! (汝等)見よ!

但し丁寧に云ふ時は一人に對しても yan を用ゐ大勢に對しても yan に添へて hani を用ゐる:——

inkar yan! (あなた)御覽なさい!

inkar yan hani! (あなた方)御覽なさい!

感嘆詞 hokure, hetak 等が往々命令文を導く:——

hokure oman! さあ行け!

hetak rai! とつととくたばれ!

柔かな命令には nankor (p. 152), kus-ne (p. 195), kuni-p (p. 193) 等を用ゐる:——

echi-ki nankon na (お前達するんですよ)。

echi-ki kusu-ne na (汝等なすべし)。

echi-ki kuni-p ne na (汝等すべきものなり)。

227. 否定文の形式

否定には副詞 somo, senne (< sem-ne) 等を用ゐる :——

ek. 彼來る。 somo ek. 彼來ない。

oman. 彼行く。 somo oman. 彼行かない。

moyo「少い」, senne moyo「少くない」

somo-ki は强調的な構文に用ゐられる :——

ek ka somo-ki「來もせず」

an ka somo-ki「ありもせず」

en-tumam ka somo-ki en-hoshipire ka somo-ki.

——「抱いて寢もせずいとまもくれず」

senne (<sem-ne) は sem となつて動詞に輯合する :——

senne a-kottanu＝a-sem-kottanu「我不關焉」

樺太では ham, hane (< hanne < hamne) が用ゐられる :——

ham chi-wante「我知らず」(タライカ)

hane auwante「私は知りませぬ」(南方方言)

否定命令卽ち禁止には itek, iteki, itekki を用ゐる :——

itek chish! 泣くんぢやない!

丁寧に云ふ時は yan を添へる :——

itek chish yan! 泣きなさんな!

樺太では hanka (< hamka) を用ゐる :——

hanka chish hanka chish! 泣くんぢやない, 泣くんぢやない!

ika を用ゐる場合には動詞は主格の人稱接辭をとる :——

ika e-ikka (na)! 汝盜むなかれ!

ika e-en-oira (na)! あなた、私を忘れないでね!

ikia, ikianepheka, ikianepeka, ikanepeka 等はその强調形である。

228. 疑問文の形式

疑問文は肯定文を *rising intonation* で發音するだけでよい:——

e-kor.「汝もつてゐる」。 e-kor?「汝もつてゐるか?」

又助詞 he 及び ya を添へても云ふ。但し前者は名詞·代名詞·助詞等の後に、後者は動詞·形容詞の後に用ゐられる:——

e-kor-pe he? 汝のものか?

e-kor-pe ne ya? 汝のものであるか?

疑問代名詞は一般に文頭へ來る:——

nep e-kor (ya)? 何を汝もつか?

その他確說法 (p. 141), 聞說法 (p. 142), 見說法 (p. 143) 等の助詞も疑問文をつくる。

(注意 i) 感歎文は疑問文に一致する。

(注意 ii) 反語文も大體疑問文に一致する。尙次の助詞を參照:——

hetap, hetapne
amun, somun
tashi } ......nek
neshi }
} (p. 144)

II. 法 (*mood*)

229. 文の內容に對する話者の態度が陳述の形式に現はれるものを「法」といふ。アイヌ語の「法」には「確說法」「見說法」「聞說法」「感說法」「豫期法」「意志法」等があり、悉く助詞によつて示される。

(a) 確說法——文の內容を旣定の事實として確說するもの:

hapo rai *ruwe-ne.*[1]「彼の母は死んだのである」。

(b) 見說法——眼前の事實に就いて確說するもの：

apto ash *shiri-ne.*「雨が降つたところである」。

(c) 聞說法——單なる傳聞として述べるもの：

hapo rai *hawe-ne.*[2]「彼の母は死んだのださうだ」。

(d) 感說法——話者の「感じ」として述べるもの：

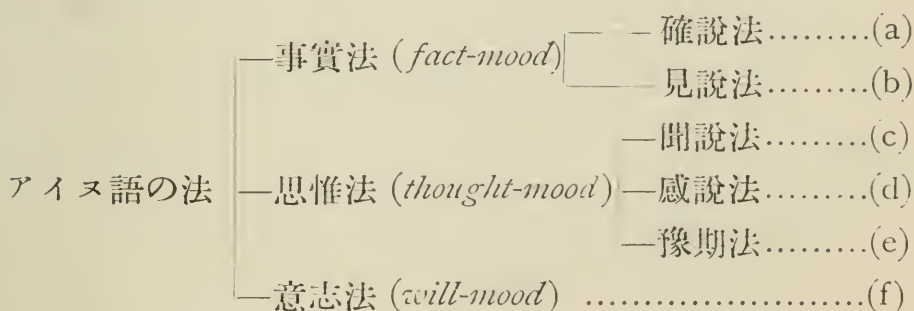
apto ash *humi-ne.*「雨が降つてゐるらしい」。

(e) 豫期法——「當然(又は必然)……の筈」といふ話者の期待を示す：

an *kuni* ku-ramu.「當然ある筈と私思ふ」。

(f) 意志法——話者の意志を表はす：

ku-oman *kusu-ne.*「私行くつもりである」。

(a) (b) は文の内容を事實として述べるのであるから事實法と名附け、(c) (d) (e) はそれを單なる思惟として述べるのであるから思惟法と名附けることが出來る。(f) をも加へて圖示すれば次の如くなるであらう。

(a) 確　說　法

230. ruwe.

ruwe は樺太では rūhe と云ひ、本來は「跡」「足跡」「痕跡」

1) *Ger.* Seine Mutter *ist* tot.

2) *Ger.* Seine Mutter *sei* tot.

「路」等を意味する名詞 ru の具體形である。「何々の痕跡がある」「何々の事實がある」の如く事實法に轉じて行つたものと思はれる。

pisun kiroru arpa *ru* ko(nna) maknatara.
濱への 大路 行く 痕 ぞ けざやかなる

＝pisun kiroru arpa *ruwe* ko(nna) maknatara.
濱への 大路 行く さま ぞ けざやかなる

さて ruwe は先づ接續助詞として用ゐられる：

Panampe chip shik kane kamui-chep kusa wa ek aike,
パナンペが 舟 いつぱい に 鮭 を 舶載し て 來る と

pet parurketa shine sattek kusan seta an wa, chep
川 岸 に 一匹の やせ つぽの 犬が 居 て 魚

eikoituipa noine Panampe kor chip orun inkar wa an
欲 し さうに パナンペ の 舟 の方を 見 て ゐる

ruwe Panampe nukar awa, ar ne seta erampoken kusu,
のを パナンペが 見 て 大變その 犬を 哀れに思つた ので

chip otta iyotta mimush pirka poro kamui-chep uk wa
舟 の中で 一番 肥えた 美しい 大きな 鮭 を 取つ て

ne seta samakun ante.
その 犬 のそばへ 置いた

又終助詞として疑問文をつくる：

pirka *ruwe*(-an)?——pirka ruwe-ne.
美しい のか 美しい んだ

231. ruwe-ne.

「云々したのである」といふ斷定に用ゐられる。

shineanto-ta Panampe pish ta san wa inkar aike,
ある 日 パナンペが 濱 へ 出 て 見る と

humpe-huchi yan ine an *ruwe-ne*. ki-kusu Panampe ene
鯨 婆さんが 陸へ上つて ゐた のである そこで パナンペが 云ふ

itak-i: "humpe-huchi, a-komui kusu-ne!" sekor Panampe
ことには 鯨 婆さん 虱をとり ませう と パナンペが

hawean kor humpe-huchi okshutuhu kotuk hine, humpe-
云ひ ながら 鯨 婆さん の衿頸 に寄つ て 鯨

huchi okshutuhu e-a e-a, okakean kor, humpe-huchi
婆さんの衿頸(の肉)を 食べに食べ それが終る と 鯨 婆さんは

repun *ruwe-ne.* yanke kaipe kaipe-ok kata humpe-huchi
沖へ出た のである 岸近き 波の 波 の 頭 の上に 鯨 婆さんが

arpa kor, Panampe ene hawean-i : " hokure arpa, okshutu
行く と パナンペが 云ふ ことには さあ 行きやがれ 頭

chimesu ! " sekor Panampe hawean akusu, " ho makanake
もげ野郎 と パナンペが 云ふ と え 何だっ

ta ? " sekor humpe-huchi hawean *ruwe-ne.* Panampe ene
て と 鯨 婆さんが 云つた のである パナンペが 云ふ

itak-i : " hokure arpa ! sekor itak-an *ruwe-ne* " sekor
ことには さあ お歸り と 言つた んです と

Panampe hawean akusu, humpe-huchi ene hawean-i
パナンペが 云ふ と 鯨 婆さんが 云ふ ことには

" ashpap ka somo chi-ne awa, e-hawean kusu, a-e-raike
つんぼ でも ない 俺 な のに お前はさう云ふから俺はお前を殺して

kusu-ne na ! " sekor humpe-huchi hawean kor Panampe
やる ぞ と 鯨 婆さんは 云ひ ながら パナンペを

keshi-ampa *ruwe-ne.* Panampe kira wa ekimne wa arpa
追つかけた のである パナンペは 逃げ て 山の方へ 行つた

ruwe-ne. humpe-huchi Panampe keshi-ampa wa paye
のである 鯨 婆さんは パナンペを 追つかけ て 行く

aine Panampe etokoho-ta ni kata eyami shinep an hine
うち パナンペ の行く手 の 樹 の上に カケスが 一羽 ゐ て

ene hawean-i : " hutne pinai kari ! " sekor eyami hawean
云ふことには 狭い 谷を 通れ と カケスが 云つた

kusu, Panampe hutne pinai kari kira wa arpa *ruwe-ne.*
ので パナンペは 狭い 谷を 通つて 逃げ て 行つた のである

humpe-huchi Panampe keshi-ampa wa hutne pinai kari
鯨 婆さんは パナンペを 追つかけ て 狭い 谷を 通つ

awa, nai ru-oro hutne ine arpa eaikap, irushka kor
たら 谷間 の徑が 狭く て 行くことができず 怒り ながら

hoshipi *ruwe-ne.*
引返した のである

232. ruwe-an (*pl.* ruwe-okai).

疑問文又は感嘆文をつくる：

nep ka aerannakpe ka isam *ruwe-an* ?
何 か 心配なこと でも 無い のであるか

poro oni nea pise orota ek wa ene itak-i : " akor
大きな 鬼が その 浮袋 の所へ 來 て かう 云つた 俺の

akpe iyush *ruwe-an*!"
わなに 漁があつた ぞや

間投助詞 ta が接中すれば疑問及び感嘆の氣持が強まる：

nep ne *ruwe-ta-an*?
(一體)何である の か

nep ka aerannakpe ka isam *ruwe-ta-an*?
(本當に)何 か 心配なこと でも 無い のかい

"uneno wen-an awa, akor Panampe, nekona iki wa
同様に 我等貧しかつた のに わが パナンペの君よ どう して

ene nishpa ne *ruwe-ta-an*?" ari Penampe itak.
から 長者 になつた のであるか と ペナンペが 云つた

wenkur patek okai *ruwe-ta-okai*!
(げにも)貧者 のみ 多く居る ことかな

tap が接中すれば強い斷定を表はす：——

kuani ne *ruwe-tap-an*!
俺 だ ぞ よ

tap-an の代りに un を以てすることもある：——

ruwe-an?——*ruwe-un*!
さうかい さうだよ

（注意） ta 及び tap はもと中稱指示代名詞（§ 85–86）が處格の助詞（§ 42）に轉じ、次いで間投助詞になつたものである。

an は本來「がある」(*there is*) を意味する動詞であるが、處格助詞 ta 或は tap と結合すれば「である」(*is*) の意味になつて、動詞 ne と同じく單に *copula* として用ゐられる：——

nep *an* ya?
何 がある か

nep *ta-an* ya?
何 である か

(=nep *ne* ya?)
何 である か

shisam *an*.
日本人 がゐる

shisam *tap-an*.
日本人 である

(=shisam *ne*.)
日本人 である

233. a (*pl.* rok).

a は本來「坐つてゐる」といふ意味の動詞である。これが助詞化して、動作を確定したものとして述べるのに用ゐられる。從つてそれは動作の完了又は過去を示してゐることが多い:——

oman *a*? (＝oman ruwe?)
行つ たか

oman *a*. (＝oman ruwe-ne.)
行つ たよ

修飾語に附く -a (*pl.*-rok) も本來はこれである:——

ne-*a* menoko「その女」(§ 88)

ne-*rok* ainu「それらの男」(§ 88)

akor-*a* nishpa＝akon nishpa「わが主人」(單)

akon-*rok* nishpa＝akon nishpa「同上」(複)

持續態の ...-a...-a (§ 158) も本來はこれである:——

oman-*a* oman-*a* aine inne kotan an.
行き 行く ほどに 大きな 村が あつた

ipe-*a* ipe-*a* aine honihi yaro shinne an.
食べに 食べた あげく 腹が 詰叺 の如くに 成つた

次の諸助詞に於ける語頭の a- は本條の a が *proclitic* に他の助詞と結合したものである。從つてそれらが用言にのみつく理由も明かである:——

hempar pakno emush-ukoiki a-ki *a*chiki......
いつ まで 太刀 討を 我等し たとて

pet otta san wa inkar *a*ike shu mom wa ek.
川 へ 出 て 見 たら 鍋が 流れ て 來た

ipe *a*ine honihi yaro shinne an.
食べ たあげく 腹が 詰叺 の樣 だ

oman *a*kusu chise orowa menoko soine.
彼行つ たら 家 の中から 女が 出て來た

kemeiki patek nepki ne a-ki kor an-an *a*wa......
針仕事 のみ 仕事 として 我し つゝ 我あり しに

234. a-(w)an (*pl.* rok-okai).

意外な事實又は結果に對する驚きを示す。

(nep ka wempe hene ne kuni a-ramu awa, oroyachiki)
何 か 悪い者 でもであるにちがひないと思つてゐたのに 意外にも

Penampe kamui poho ne *awan.*
ペナンペは 神 の子 で あつた

(sennekaunsui ene ne kuni a-ramu awa, oroyachiki)
よ も や さう だ とは 思はなかつ たのに 意外にも

Panampe kor seta utar ne *rok-okai.*
パナンペ の 犬 ども で あつた

括弧内は省いても意味は同じである。

(b) 見　説　法

235. shir-.

見説法の shiri は shir の具體形である。shir はもと *land*[1] 又は *place*[2] を意味する名詞であるが、現在では一般に接頭辭の如く用ゐられて、種々の意味を表はす:——

i) 「大地」

shir-shimoye 「大地が搖れる」(地震)
shir-rupush > shinrupush「大地が凍てつく」
shir-uhui 「大地が燃える」(野火・山火)
shir-horak 「大地が崩れる」
shir-uwante 「國見をする」

ii) 「目前の空間」(「あたり」「そこら」)

shir-hutne 「あたりが狹い」「間狹(まぜま)な」
shir-sep 「あたりが廣い」「間廣(まびろ)な」
shir-chashnure「そこらをかたづける」「掃除する」

1) mo*shir* (國土), pokna(mo)*shir* (地下界), repun-*shir* (沖の島一禮文島), ri*shir* (高い島一利尻島), *shir*-etok (岬)。
2) to*shir* (川岸のウロ), tu*shir* (墓穴)。

chi-*shir*-eanu 「そこらに置いてある」

shir-kunnatara 「あたり一面まつ黒(な人集り)」

iii) 時 (*time*)

shir-peker 「夜が明ける」

shir-kunne 「日が暮れる」

shir-onuman 「晩になる」

ponno *shir*-an ko 「少し經つと」

iv) 時代 (*age*)

teeta-kane *shin*-nupur ita tapan petpo "Kanchiwetunash"
昔 時代が偉かつた 頃は この 小川は 流れの早い川

ari aye a korka tane *shir*-pan kusu "Kanchiwemoire"
と 云はれ た が 今 時代が衰へた ので 流れの遅い川

ari aye ruwe tashi anne! (アイヌ神謠集 p. 70)
と 云はれ てゐる のだ よ

v) 天候・氣候

shir-pirka 「天氣がよい」

shir-wen 「天氣が惡い」

shir-sesek 「時候が暑い」

shir-nam 「時候が冷い」

shir-apa 「雨漏」

vi) *intensive*.

shir-kupa 「がぶりと噛む」

shir-kuta 「ぶちまける」

shir-oterke 「ぶち踏む」

shir-otke 「ぶち刺す」

vii) 見說法

apto ash anke *shir*-an.
雨 降らん とする 模様 あり

(「雨が降りさうだ」)

apto ash anke *shir*-ki.
雨 降らん とする 模樣 なり

（「雨が降らうとしてゐる」）

apto ash anke *shir*-iki.
雨 降らん とする さうした模樣なり

（「雨でも降りさうだ」）

（注意） shir-ki は動作狀態の前の一語を受けて、それだけについて云つてゐる。雲が動いて雨が降りさうだとか、風がさあと來て雨になりさうだとか。

shir-iki の方は、iki は「物す」といふことで、漠然と包括的に全體を受けて、さういふ雰圍氣、さういふ環境だといふやうに指す。

shir-an は動作でなしに、やはり靜的な狀態の存在を云ひ、それに對しては shir-ki も shir-iki も動的である。

236. shiri.

接續助詞として用ゐられる。

ne-pakno a-raike yakka ainu orake *shiri* oar-isam.
どんなに 殺され ても 人數の 減る 樣子 更に 無し

nea seta nea chep ekupa wa sar suye-suye kor oman
その 犬が その 魚を 銜へ て 尾を 振り 振り しながら 行く

shiri nukar aike, anihi nakka oshi oman rusui.
樣子を 彼見る と 自分 も ついて 行き たくなつた

oman *shiri* nukar wa, konkani poshta neike “konkani
彼行く のを 見 て 金の 小犬 は 金色

wo wo!” ari mik, shirokani poshta neike “shirokani wo
ワン ワン と 吠え 銀の 小犬 は 銀色 ワン

wo!” ari mik.
ワン と 吠えた

tane anakne Penampe toi parkoat wen parkoat *shiri*
今 こそ ペナンペに ひどい 罰が當り いまはしい 罰が當つた のを

Panampe eraman wa, shino ehese hine ene itak-i:
パナンペは 知つ て 大いに 鬱憤も晴れ て から 云つた

“hokure inkar, Penampe! ko-nep wen itak a-ki wa-
そら 見ろ ペナンペ 何 の 惡 口を 俺が したのでも

kusu, ene e-i-ko-yaikire ichakkere e-iki awa, tane anakne
ないのにあの樣にお前は俺を馬鹿にして汚いことをした つけが 到 頭

kamui panakte shiri-tap-an.
神樣が 罰を當てなすつた のだよ

又「云々してゐるのに」「云々してゐるのにも拘はらず」といふ意味に用ゐられることもある：——

wen-an *shiri* a-wen-chise ko-shirepa shiri iyairaikere.
我々貧乏してゐるにも不拘 我々の粗末な家 にお出で のこと 感謝の至り

a-sa-utari shinki *shiri* suke ki wa i-ko-pumpa.
我姉たち 疲れてゐる のに 炊事 し て 我に 捧げた

237. shiri-ne.

眼前の事實に就いて「云々である」「云々した所である」と確說するのに用ゐられる。

ashir pirka chep e-i-kore kusu, a-utari opitta enupetne
新しい よい 魚を 汝我等に與へたので 我が一族 殘らず 喜び

uwekarpa wa, ene shito uta *shiri-ne* kusu, tanukuran
集つ て 斯く 粢を 搗いてゐるのである から 今宵

anakne teta e-reushi wa, e-ipe-rusui pakno e-ipe wa,
は 此所に 汝 泊つ て 汝 食べたい だけ 汝 食べ て

nisatta e-unihi e-ko-hoshipi kusu-ne.
明日 汝の家に 汝 歸り なさい

Shinutapka-un-kur a-ko-asurani kusu yan-an *shiri-ne.*
シヌタプカ の 人に 我 知らせん とて 我のぼり來れるところなり

paro-chi-osuke a-ekarkar kusu ran-an *shiri-ne* na.
炊事をして 我彼を饗はん とて 我下りたる ところなる ぞ

"etoko-ta pase kamui a-ko-onkami orowa-un hoshipi-
先づ 大 神 を 我 拜して それから 我 歸

an kusu ek-an *shiri-ne*" sekor itak.
らん とて 我來れる ところなり と 彼云ふ

shirar kata poro urir tuppish usamta okai wa, reku-
岩 上に 大きな 鵜が 二羽 並び 居 て 首

chi turpa yompa kane ikichi shiri rametok utar
を つはし ちゞめし つゝ ものしてゐる 樣子を 勇者 達が

uniwente *shiri-ne* kuni chi-ramu ruwe-ne.
ウニエンテの儀禮を交してゐるのに違ひないと我思つたのである

(注意) その他に shiri-ne は體言につく助詞として次の如き意味にも用ゐられる：——

(1)「の代りに」「に代つて」

hapo *shiri-ne* i-resu.
母　に代つて 我を養ふ

(2) 「の如くに」(=shinne)

po *shiri-ne* i-omap.
子　の如くに　我を愛す

238. shiri-an (*pl.* shiri-okai).

疑問或は感嘆の意を表はす:

uneno wen-an awa, eani patek nekona e-iki wa ene
同じ様に 我々は貧しかつたのに 汝 だけ どう し て さう

nishpa e-ne wa e-ipeno *shiri-an*?
長者に 成つ て 美食してゐる のか

ko-nep wen itak a-ki wa-kusu ene ichakkere e-iki
何の 惡 口を 我し た とて さう 汚いことを 汝する

shiri-ta-an?
のか

tane anakne kamui chi-panakte e-ekarkar *shiri-ta-an*!
今 こそ 神様が 罰を 汝にお當てなすつた のだ

so-ene Penampe yairenkap ki wa iramasure epirka
何とまあ ペナンペが 自分の思ふ通りに し て みごとに 儲けた

shiri-an-i!
ことよ

(c) 聞　說　法

239. hawe.

hawe は hau「聲」の具體形である。「云々の聲がある」「云云の噂がある」の如く聞說法に轉じて行つたものと思はれる。

inne chironnup utar Panampe sapaha hemem netopake
多くの 狐 どもが パナンペ の頭 をも 體

hemem ukoruiruipa kor rai-chishkar *hawe* pepunitara.
をも 搖ぶり ながら 哀哭する 聲が 騒々しかつた

michi irushka wa an *hawe* nu chiki toiko ishitoma wa
親爺が 怒つ て ゐる と 聞いたので すつかり 怖氣を催つ て

kira wa isam.
逃げ て しまつた

疑問文に用ゐられる:——

hunakoro arka *hawe*?
何處が　痛い　といふの

240. hawe-ne.

hunak-oro arka *hawe*?
どこが　痛い　といふの

——te-oro arka *hawe-ne*.
ここが　痛い　んだとさ

hushkone kamui-tono chōri ari a-ye-p ush. Ne chōri
むかし　お殿様は　草履　と　いふものを履いた　その　草履

ari a-ye-p kamui-tono ushte rata-tono an. shineanto-ta
と　いふものを　お殿様に　履かせる　下役人が　あつた　或　日

chōri ante katu wen ari kamui-tono irushka hine, rata-
草履の　置き　様が　悪い　と　お殿様が　立腹し　て　下

tono rekuchi tuye wa osura. ne shiriki kamui nukar
役人　の首を　斬つ　て　捨てた　その　ことを　神様が　見

wa, shino erampoken wa, karkatchiu ne kar. tampe-
て　大へん　あはれに思つ　て　カラカツチウ　に　した　それ

kusu, karkatchiu anakne "chori! chōri! chori" ari rek
故に　カラカツチウ　は　草履　草履　草履　と　啼く

hawe-ne.
のだといふ

241. haw(e)-ash.

Iyo-chiunkur tureshi turano a-tak a *hawash*;
イヨチ　びと　その妹　と共に　招かれ　た　さうだ

Rupettomunkur tureshi turano a-tak a *haweash*;
ルペツトム　びと　その妹　と共に　招かれ　た　さうだ

Shamputunkur tureshi turano a-tak a haweash;
シヤンプツ　びと　その妹　と共に　招かれ　た　さうだ

Ruwesaniunkur tureshi turano a-tak a *hawash*.
ルエサニ　びと　その妹　と共に　招かれ　た　さうだ

242. hawe-an (*pl.* hawe-okai).

疑問(或は感嘆)を表はす。

hunak-oro arka *hawe*?

=hunak-oro arka *hawe-an*?

＝hunak-oro arka *hawe-ta-an*?
どこが　痛い　といふの

a-kore ko nekon ne *hawe*?

＝a-kore ko nekon ne *hawe-an*?

＝a-kore ko nekon ne *hawe-ta-an*?
我彼に與へたら　どう　だ　といふのか

（注意） hawean (*pl.* haweokai) 及び haweash が itak (「云ふ」) と同義に用ゐられることがある。その場合には何れも第 II 類の動詞で、口語に於けるその全活用は次の如くである：

	sing.	*pl.*
I.	ku-hawean「私云ふ」	haweokai-ash「私達(對立)云ふ」 haweokai-an「私達(包括)云ふ」
II.	e-hawean「君云ふ」 haweokai-an「あなた云ふ」	echi-haweokai「君達云ふ」 haweokai-an「あなた方云ふ」
III.	hawean「彼云ふ」	haweokai「彼等云ふ」

尙母音が重出する場合は前の母音が落ち易いので、次の如き形も存在する :——

hawean > hawan.
haweokai > hawokai.
haweash > hawash.

(d) 感　說　法

243. humi.

hum はもと「音」といふ語。humi はその具體形で「…の音」。原義「音」の意味のあらはな例は :——

Shirarpetunkur inotu-orke hopuni *humi* turimimse.
シララペツ　びと　の死靈が　昇り行く　音　鳴りとよむ

chinuina apa kari ahun *humi* ash.
かくし　戸　から　彼入る　音が　した

音の意味から轉じて、味でも色でも匂でも、「の様子」「の

けはひ」といふやうなものに至る迄、「判じて」いふ語氣になる。「…と感じる」とか「…と思ふ」とかいふやうに、主觀をあらはし、從つて「…らしい」といふやうに不確かな判斷をあらはす。

humi は

i) 接續助詞として用ゐられる:——

hotke-an kor mokor-an ranke, sui mokor-an wa an-an
我床に就く と 我眠り 眠りして 又 我眠り て我ありたり

awa, wentarap-an *humi* ene oka-hi:
しが 我夢見し こと かく ありき

(我横になつてうつらうつらして又寢入つてあつたが、夢を見たのだらう、それはかうだつた)。

ii) 感嘆の意を表はす:——

sake pirka *humi*! (いゝ酒だ!)
酒の よい ことよ

rapokita oni omuken wa okimun san wa, "hai ku-
その間に 鬼は 空手 で 山から 戻つて來 て あ、

shinki *humi*!" ari itak kor ahun awa, pon oni utar
くたびれた なあ と 云ひ ながら 這入る と 小 鬼 どもは

shinen ka isam.
一人 も 居なかつた

244. humi-an (*pl.* humi-okai).

nep-kush-ta a-oksutuhu sesek *humi-an*?
何うして 我 えりくびが あつい のだらう

eashka me-an *humi-an*!
ひどく 寒い やうだぞ

Penampe ene-hetapne mat-kon rusui *humi-an* awa, tane
ペナンペは あれほどにも 妻帶し たく 感じてゐた のに 今

anakne shino pirka pon menoko mat ne kor eashkai
こそ すてきな 美しい 少 女を 妻 に 持つ によい

kusu, sonno nupetne.
のだから 大いに 喜んだ

okimun san wa inkar aike nea seta kurihi ka isam.
山から 歸つ て 見る と 先刻の 犬 の影 も なかつた

"ene hetapne a-yupke-shinashina *humi-an* a-p!" ari
あれ ほど 厳重に 縛つて置いた つもりな のに と

hawean kor ekeshne hunara yakka oarar-isam.
云ひ ながら 諸方を たづねた けれども 竟に居なかつた

245. hum(i)-ash.

ukuran moireno hoshippa-an *humi-ash.*
昨夜は おそく お歸りになつた やうですね

(眠つてゐて歸つた音をたゞ聞いてゐたのを翌日云ふやうな語氣)。

"tane anakne ene a-kar-i ka ene a-ye-i ka isam noine
今 となつては どう しやう も どう いひやう も ない 樣に

humash" ari itak kor yairamkikkar wa-isam.
思はれる と 云ひ ながら 諦め てしまつた

246. humi-ne.

Tane toiko shir-peker kane kokekko ari Panampe itak
もう すつかり 夜が 明けた 頃 コケツコ と パナンペが 云ふ

awa, oni utar "aa sanpantori ne; tane hoshippa-an ro!"
と 鬼 どもは あゝ 三番鷄 だ もう 歸らう よ

ari haweokai kor esoyun inkar awa mashkino shir-peker
と 云ひ ながら 戶外を 見る と あんまり 夜が 明け

kasui kusu sonno uhomatpare hine nerok ichen neno
すぎてゐた ので すつかり 狼狽て て それらの お金を そのまゝ

ante kane ne-un ne *humi-ne* ya kira wa paye humash.
置い て 何處へ で あらう か 逃げ て 行く 音がした

Penampe kisaraha kursutuhu pakno toiko kittek kane
ペナンペ の耳 の附け根 までも すつかり 堅くなつ て

rupush *humi-ne* awan.
凍つてゐた のであつ た

(e) 豫 期 法

247. kuni.

「當然…の筈」又は「きつと…にちがひない」といふ話者の期待を示す：——

an *kuni* ku-ramu. (當然ある筈と愚考する)。
ある　と　私　思ふ

kamui ne *kuni* a-ramu awa. (てつきり神様と思つたら)。
神　だ　と　我 思ひ　しに

shirar kata poro urir tuppish usamta okai wa, rekuchi
岩　上に　大　鵜　二羽　並び　居　て　首を

turpa yompa kane ikichi shiri rametok utar uniwente
のばし　ちゞめ　しつゝ ものしてゐる 様子　勇者　たちが　ウニエンテの

shiri-ne *kuni* chi-ramu ruwe-ne.
儀禮を交してゐるにちがひないと我思つたのである

rayayaise kor kira wa ek ko, machihi inkar wa, hure
泣き叫び　ながら 逃げ　て　來る と　妻が　それを見　て　赤い

kosonte mi wa, shinotcha ki kor ek hawe-ne *kuni* ramu
小袖を　彼が着　て　歌を　歌ひながら來る　のに　ちがひないと思つ

wa, mi yarpeshit opittano hoka o, atusa kane an awa,
て　着てゐた ぼろを　そつくり　爐に　入れ 裸になつ　て　ゐる　と

oroyachiki hokuhu tam-pir ari kemnu wa hure ruwe-ne
意外にも　夫は　刀傷　のために 出血し　て　赤い　のであつ

awan.
た

248. kuni-ne. 「…するやうに」(*in order that…may*)。

a-kor tennep tunashno pirka *kuni-ne* esanniyo wa en-
私 の　赤子が　早く　快癒す　るやうに　勘考し　て　下

kore!
さい

pirka *kuni-ne*, esaman-kamui iyoira kushkeraipo, tane
いゝ　あんばいに　川獺　神が　物忘れした　おかげで　今

okai ainu utar katu-wen ka somo ki-no okai eashkai
ゐる　人間　たちは　恥しい姿　も　せ　ず に ゐることが できる

ruwe-ne.
のである

249. 未來又は柔かな命令に用ゐられる:——

apa uk *kuni* kotchaotno tu-imerukur chi-aworaye.
戸に　手をかけようとするに先立つて　數多の　光が　内へさしこんだ

tane anakne a-arpare *kuni* ka hankep akor kamui
今　は　熊送りする　こと　も　近い　私の　熊

ne awan.
だつ　た

echi-ki *kuni*-p ne na. (「汝等すべし」)。
汝等　す　べきこと　ぞ　かし

echi-ki *kuni*-p somo ne na. (「汝等すべからず」)。
汝等　す　べきこと　に非ざる　ぞ　かし

(f) 意　志　法

250. kus(u)-ne.

i) 第一人稱に於ける意志

hoshkino oman wa enkore! kuani oshi ku-oman *kusu-*
先に　行つ　て　おくれ　私　後から　行く　つもり

ne na.
だ　から

kamui-moiremat ene haweokai-i: "inkar, Panampe,
神　女　は　かう　云つた　これ　パナンペよ

eani anakne sonno keutum pirka puri pirka-p e-ne ruwe
汝　は　本當に　心の　よい　氣前の　よい　者　である　ことを

usetara a-eraman. tampe-kusu e-koinkar-an e-pirkare-an
はつきり　私は知つてゐる　それ　ゆゑ　汝に　惠みを與へ　汝に　福を授け

kusu-ne."
よう

oni utar sonno irushka wa "konoyaro! tan Penampe
鬼　どもは　ひどく　怒つ　て　この野郞　この　ペナンペ

ne awan teeta ne-yakka i-kosunke wa a-kor ichen eikka
で　あつた　先日　も　我々を欺し　て　我々の　金錢を　盜ん

awan-pe! tane e-raike-an *kusu-ne*!" ari hawokai.
であつた奴は　さあ　お前を殺して　くれる　と　云つた

Panampe ene itak-i: "hokure tane anakne umurek
パナンペ　曰く　さあ　今　こそ　夫婦に

ane *kusu-ne* na. Tu sotki kar wa ikore; hotke-an *kusu-*
俺達は　なるのだ　ぞ　二つの寢床を　造つ　て　おくれ　床に入　らう

ne na."
よ

iresu-sapo harukesh poka okai chiki sake suipa yan!
まゝ　姉　糧つ殘り　にても　ある　ならば　酒を　かもし　給へ

tanepo poka rorumpe uturu wempe uturu a-e-shini ita
たつた今 にも いくさ のひまに たゝかひ のあひだに われら休む 時

pon tonoto poka a-kar wa a-nomi-kamui a-nomi, ikir-kese
少しの 酒 なりと われら造りて 我 祭 神 を われら祭り 式の はて

ta a-ekashi-utari a-shinrit-utarorke a-ko-shinnurappa ki
に われらの翁 たち われらの先祖 たち へわれら 供養を し

kusu-ne na.
ませう よ

251. ii) 將然態或は未來

Penampe hopuni *kus-ne* ko hopuni ka eaikap pakno
ペナンペが 起上ら うとする と 起上れ も しない ほどに

hemanta an. yayeni aine hopuni wa inkar aike chise
何か あつた 奮張つ て 起き て 見る と 家

shik kane seta-shi an.
いつぱい に 犬の糞が あつた

oni kisara uheupare kane yaikoshiramse kan'an aine
鬼は 耳を かしげ て 考へ てゐたが やがて

ene itak-i : "peure-kampo tane nani a-suye wa a-e *kusu-*
から 云つた 柔い 肉 今 すぐに 煮 て 食 はうと思

ne awa, oar kirap kusu onuman pakno hoka enka-ta a-
つ たが いやに やせてゐるから 晩 まで 爐の 上 に

ratkire *kusu-ne* na."
つるして置 かう よ

naa ponno shir-an ko te-ta oni utar poronno uwekarpa
もう 少し 時が經つ と ここへ 鬼 どもが 大ぜい 集つ

wa pakuchi ki *kusu-ne.* itekki e-humiashte-no mo-no
て ばくちを する だらう 決して 汝 音を立てず に 靜か に

e-an aine tane shir-peker ehanke chiki kokekko ari e-
汝ゐ て もう 夜 明け に近くなつた ら コケツコ と 汝

hawean kusu-ne. oni utar sonno uhomatpare wa kira
云ひ なさい 鬼 どもは ひどく 狼狽し て 逃げ

wa paye *kusu-ne.* okaketa kor ichen opittano e-uk wa
て 行く だらう その後で その お金を そつくり 汝取つ て

shino nishpa e-ne *kusu-ne.*
本當の 長者に 汝成る だらう

252. iii) 意志の表示から第二人稱に對する柔かき命令となる。

e-ko-yairaike-an kusu, tan a-kor nitpo e-kore-an
貴方に 私感謝してゐる ので この 私 の 孫を 貴方に私差上げる

kusu-ne. e-tura wa e-oman chiki, oro-ru-pirka-i ta tan
のです 連れ て 行く 際 路のよい 所 では この

a-nitpoho e-apkashte, oro-ru-wen-i ta e-shike kata e-ante
私の孫を 歩かせ 路の悪い所 では お荷物の 上に のせ

kane e-oman *kusu-ne* na. orowa ru hontomo-ta tan a-
て 行つて 下さい な そして 途 中 で この私の

nitpoho ipe-rusui wa chish chiki, e-shike e-pita wa, shito
孫が ひもじくなつ て 鳴いた 際は お荷物を 解い て 粢を

e-sanke wa, eani ramne shito e-e chiki, tan a-nitpoho
出し て 貴方が まるまゝの 粢を 食べた なら この 私の 孫に

shito arke e-ere kane e-oman *kus-ne* na.
粢の 半分を 食べさせながら 行つて 下さい な

III. 語　序

253. 修飾語は被修飾語に先行する。

從つて形容詞は名詞に、副詞は動詞に先行する。

目的語及び補足語は動詞に先行する。

助詞は悉く後置詞である。

主語の位置に關しては二つの場合がある。

A. 主語が單語（名詞·代名詞）として現はれる場合

これは第 III 人稱の場合に限る。この場合には「主語＋動詞（第 II 類)」或は「主語＋目的語或は補足語＋動詞（第 I 類)」の順序である。

seta mik. seta meko noshpa.
犬 吠ゆ 犬 猫を 追ふ

抱合的活用に於ける人稱接辭も矢張この順序である。

a-e-kore. a-echi-kore. e-i-kore. echi-i-kore. *etc.*
我汝に與へる 我 汝等に與へる 汝我(等)に與へる 汝等我等に與へる

B. 主語が人稱接辭として現はれる場合

これは第 I 人稱及び第 II 人稱の場合である。

a. 第 I 人稱の場合

第 I 類の動詞に於ては接頭辭として現はれる。從つてそれが目的語或は補語をとる時は「目的語或は補足語＋(主語) 動詞」の順序をもつ。

meko a-noshpa. meko a-ne. *etc.*
猫を (我) 追ふ 猫で (我輩は)ある

第 II 類の動詞に於ては接尾辭として現はれる。

chish-an.「我泣く」。 *etc.*
(泣く)←(我)

b. 第 II 人稱の場合

この場合は動詞の第 I 類たると第 II 類たるとに關せず常に接頭辭として現はれる。從つてそれが目的語或は補足語をとる場合の順序は第 I 類の動詞に於ける第 I 人稱の場合と同じである。

meko e-noshpa. meko e-ne. *etc.*
猫を 汝 追ふ 猫で 卿は ある

人稱接辭の中では主格のもの先頭に立ち、目的格のものそれに次ぎ、補足語を代表する指相の接辭は更にそれへ續く。

neampe e-i-ko-sunke.
(そのこと) (に就て)(汝)(我に)(嘘を云ふ)

接尾辭に在つては數を表はすものまづ出で、使役それに次ぎ、相の接辭は最後に來る。

kor-pa-re-pa.「澤山お與へになる」。
(複數)(使役)(敬相)

IV. 輯 合 (*poly-synthesis*)

254. 指相·互相·再歸相の輯合。

人稱接辭の主格のものと目的格のものとが同時に動詞に抱合

する現象に就いては既に述べたが、其の他に指相·互相·再歸相及び時としては副詞·名詞の類までも、意義上必要ある時は動詞の語體へ結び附いて來る所謂輯合性がアイヌ語には存在する。

例へば pirka は「善き」、chi-e-kuni-p は「食物」、resu は「育てる」、a-i-resu は「吾育てらる」、pirka chi-e-kuni-p ari a-i-resu は「善き食物を以て我育てらる」であるが、これを pirka chi-e-kuni-p a-i-*e*-resu と云つても意味は同じである。卽ち a-i-*e*-resu の *e* は先行の pirka chi-e-kuni-p「善き食物」を受けて「それを以て」の意味を表はしてゐるのである。

usa-orushpe は「色々な事」、itak は「話す」、u-ko-itak は「お互に話す」「話し合ふ」、a-u-ko-itak は「吾々がお互に話し合ふ」、usa-orushpe a-*e*-u-ko-itak は「色々な事に就いて吾々がお互に話し合ふ」といふことであつて、この *e* がやはり先行の usa-orushpe「色々な事」を受けて「それに就いて」といふ意味を表はしてゐるのである。

wakka は「水」、korachi は「の如く」、notaku は「その刄」、een は「鋭い」、poro は「大きな」、mukar は「鉞」、shi-sempir は「自分の背後」、ta は「に」、a-ani は「吾持つ」、以上を續けて wakka korachi notaku een poro mukar shi-sempir ta a-ani と云へば「水も垂れる樣な刄の鋭い大鉞を自分の背後に吾隱し持つ」といふことであるが、これを wakka korachi notaku een poro mukar a-*e*-shi-sempir-ani とも云ふのであつて、この *e* もやはり先行の wakka korachi notaku een poro mukar「水の垂れさうな刄の鋭い大鉞」を受けて「それを」といふ意味を表はしてゐる。

shi は「自身」、ram は「心」、sui-pa は「幾囘となく搖り動かす」、shi-ram-sui-pa で「とつおいつ思ひめぐらす」といふことである。yai は「自身」、yai-ko は「自身に對して」「みづから」、yai-ko-shi-ram-sui-pa と云へば「みづからとつおいつ思ひめぐら

す」といふこと、a-yai-ko-shi-ram-sui-pa と云へば「吾みづからとつおいつ思ひめぐらす」といふことである。それを「何々に就いて吾とつおいつ思ひめぐらす」の如く云はうとすれば、やはり *e* を挿入してその「何々」といふ語を受けさせる。例へば「色々な事に就いて吾みづからとつおいつ思ひめぐらす」は usa-orushpe a-*e*-yai-ko-shi-ram-sui-pa と云ひ、更にまた「色々な事に就いて吾みづから遠くとつおいつ思ひめぐらす」の如く云はうとすれば tuima といふ語を挿入して usa-orushpe a-e-yai-ko-*tuima*-shi-ram-sui-pa といふ。

尚 *o-*, *ko-* 等に就いても同様である。例へば huchi upsoro ta a-i-resu と云へば「祖母のふところに於て吾育てらる」といふことであるが、それを huchi upsoro a-i-*o*-resu 又は huchi upsoro a-i-*ko*-resu と云つても意味は同じである。

255. 副詞の輯合。

大抵の副詞はそのまゝの形で動詞の語體へ嵌入する。例へば a-kik-kik は「吾彼を打ち据ゑる」、toiko a-kik-kik は「さんざんに吾彼を打ち据ゑる」であるが、これを a-toiko-kik-kik と云つても意味は同じである。

但し形容詞に -no が附いて出來た副詞はその -no を省いて動詞に輯合する。

kewe-ri-kur a-ruki ko urepechi patek ponno etuk
丈の高い男を 我 呑め ば その足指 だけが ちよつと 出る

korka, kewe-ram-kur a-ruki ko a-*hamne*-ruki wa isam.
が 丈の 低い 男を 我 呑め ば そつくり 呑下し て しまふ

(a-*hamne*-ruki wa isam＝*hamne-no* a-ruki wa isam)

輯合した副詞にはよく -kur が附く。この -kur は意味の無い虚辭である。

pis-un yakura nikat-tuikashi e-yai-*riki-kur*-hopuni-re.
濱の やぐらの 梯子 の上 へ 自身を 高く あげた

(濱の櫓の梯子の上へ登つた)。

au-ta keusut yuk-chikoikip chep-chikoikip au-o-rura-kar
隣の 小父が 鹿の 獲物 魚の 獲物を 内へ運んで來て

i-e-*pirka-kur*-resu-itara.
我をそれにてよく 育てゝゐた

(i-e-*pirka-kur*-resu-itara=*pirka-no* i-e-resu-itara)

256. 名詞の輯合。

a-*wakka*-ta-re.
我 水を 汲ま す

=*wakka*-ta-re-an. (膽振方言)
水を 汲ま す (我)

=wakka a-ta-re.
水を 我汲ます

kina-e-rusui-an. (膽振方言)
草を 食べ 度し (我)

=kina a-e rusui.
草を 我食べ 度し

ki-kupa-an. (膽振方言)
虱を嚙み殺す(我)

=ki a-kupa.
虱を我嚙み殺す

inau-ke-an. (膽振方言)
木幣を削る (我)

=inau a-ke.
木幣を 我削る

kina-tui-hoshi a-*e-yai-pokishiri*-karkar.
草の はゞき にて(我) 脚を 卷く

=kina-tui-hoshi ari yai-pokishir a-karkar.
草の はゞき にて 脚を 我 卷く

a-*nuewempe-ka-somo*-ne awa.......
我 つんぼ にても な かり しに

=nuewempe ka somo a-ne awa.......
つんぼ にても なき 我 なり しに

e-*hau*-kasu.=hau e-kasu.
聲が 大なり 聲に於て大なり

e-*ni*-ika. = ni e-ika. (樹上から墜落する)
樹を踏外す 樹に於て踏外す

o-*chip*-ika. = chip o-ika. (海中に墜落する)
舟から踏外す　　舟　から踏外す

o-*toi*-poso. = toi o-poso.
地(中)をくぐる　地(中)をくぐる

索　　引

凡　　例

I. 数字はページを示す。特に説明事項が二頁に跨つてゐる際はハイフンを入れて示す。例 67–68.　尚三頁以上に跨つてゐる際は中間の数字を省いて示す。例 99–103＝99–100–101–102–103.

II. アイヌ語索引の見出項は代名詞・數詞・副詞・助詞・接辭に限つたが、見出項内の派生語には名詞・動詞・形容詞をも加へた。

III. 名詞の語末には( )を以て具體形語尾を示して置いた。但しそれによつて具體形を作る際 t-i > chi, u-e > we, i-e > ye なることに注意を要する。例へば am-set(-i), am-toi(-e) の具體形はそれぞれ am-sechi, am-toye である。尚開音節に終る語の具體形はそのまゝでよいのであるが、此處では特にその強調形を示して置いた。例へば am-so(-ho) とあるものゝ具體形は am-so 又は am-soho なのである。

IV. 動詞には必ずその所屬の變化を示したが、その際次の如き略號を用ゐた:——

*v*I.	第 I 類動詞	*v*II.^{4}	第 II 類第 iv 種動詞
*v*II.^{1}	第 II 類第 i 種動詞	*v*III.^{1}	第 III 類第 i 種動詞
*v*II.^{2}	第 II 類第 ii 種動詞	*v*III.^{2}	第 III 類第 ii 種動詞
*v*II.^{3}	第 II 類第 iii 種動詞	*v*III.^{3}	第 III 類第 iii 種動詞

V. 以上の他に用ゐた略號は次の如くである:——

adj.	adjective	*pl.*	plural
adv.	adverb	*pref.*	prefix
end.	ending	*pron.*	pronoun
interj.	interjection	*sing.*	singular
n.	noun	*suf.*	suffix
num.	numeral	*v.*	verb.

I. アイヌ語索引

N

O

S

T

U

W

Y

II. 事項索引

か

き

く

け

こ

さ

し

す

せ

そ

た

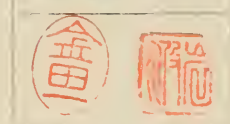
に

は

ひ

ふ

昭和十一年七月一日　印　　刷
昭和十一年七月五日　第一刷發行

アイヌ語法概說
定價貳圓八拾錢

著　者　金田一京助
　　　　知里眞志保

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市牛込區神樂町一丁目二番地
印刷者　小酒井吉藏

東京市神田區一ツ橋二丁目
發行所　岩波書店

電話九段(33)　一八七番　一八八番　一八九番　一八〇番　一〇二二番（小賣部專用）
振替口座東京二六二四〇番

研究社印刷

（大森製本）